

学長賞

「画家ホールウオードは生きている」

井上 玲

附属図書館長賞

「一枚目のキャンパスの魔法」

江頭扶実子

「くたばれ、マイヒーロー」

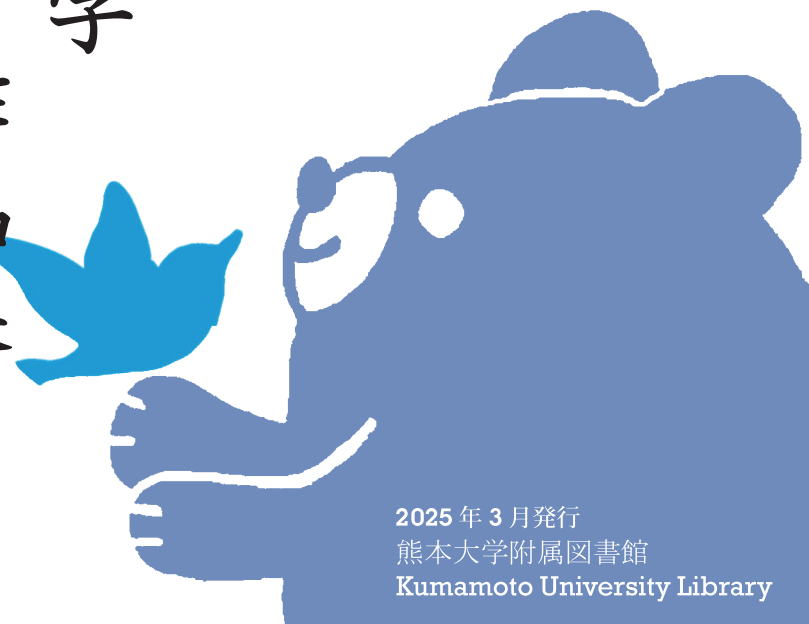
坂田悠美香

「食べる」

吉野 美羽

第17回熊本大学

東光原文学賞作品集



2025 年 3 月発行

熊本大学附属図書館

Kumamoto University Library

第十七回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十七回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

学長のことば

熊本大学長 小川 久雄／4

発刊のことば

館長のことば

熊本大学附属図書館長 宮崎 誓／6

第十七回東光原文学賞作品集の公刊によせて

学長賞

画家ホールウオードは生きている

井上 玲／9

(文学部コミュニケーション情報学科二年)

附属図書館長賞

一枚目のキャンパスの魔法

江頭 扶実子／54

(教育学部特別支援教育コース三年)

附属図書館長賞

くたばれ、マイヒーロー

坂田 悠美香／77

(文学部総合人間学科四年)

附属図書館長賞

食べる

吉野 美羽／125

(文学部文学科三年)

選考を終えて

濱田 明「東光原文学賞総評」／166

日高 愛子「日常と非日常のはざままで」／171

農 孝生「小説の器」／175

発刊のことば

熊本大学長 小川 久雄

熊本大学東光原文学賞は、平成二十（二〇〇八）年に創設し、令和六年度で第十七回の開催となりました。十七年にわたり熊大生の読書への関心を高め、創作という能動的な知的活動の機会を提供してきました。第十七回東光原文学賞には、文系の学部に残まらず全学部から合計二十篇の応募があったと聞き、東光原文学賞が本学の文化として根付いていることを実感しました。

熊本大学は、明治二十（一八八七）年に設立された第五高等中学校（五高）から百四十年近く
の長い歴史を持っています。五高では、嘉納治五郎、ラフカディオ・ハーン、夏目漱石などが教鞭をとり、物理学者で随筆家の寺田寅彦、首相となった池田勇人、佐藤栄作などが学生として学びました。また、新千円札の肖像となった日本医学の父で感染症学の巨星、北里柴三郎も、本学医学部の前身である古城医学^{かくしろ}学校で医学への道を志しました。

このような歴史と素晴らしい伝統をもつ熊本大学で学ばれた受賞者は、コミュニケーションワ
ードである「創造する森 挑戦する炎」を着実に実行され、成果を出されました。

創作活動は大きく二つのステップに分かれると考えます。第一は自ら学び作り出すステップ、

第二は作り出した作品を応募や公表することにより世に出すステップです。いずれも大きな労力がかかることですが、それを乗り越えてこの場にいらっしゃることは、大変素晴らしいことです。

表彰式の場合において、学生の皆様に直接ふれあえる機会を設けることができ、嬉しく思います。学長賞及び附属図書館長賞を受賞される四名をはじめとして、惜しくも受賞とならなかった応募者はすべて、「創造する森 挑戦する炎」による創作活動に勤しまれました。この経験は、今後の大きな飛躍への糧になるものと信じ、さらなる活躍を期待しております。

最後に、第十七回熊本大学東光文学賞に係わられたすべての方々へ謝意を申し上げます。また、本書を手にとってくださった皆様が熊大生の文学に触れ、創作に、読書に親しみを持ってくださいることを祈念して、発刊のことばとさせていただきます。

第十七回東光原文学賞作品集の公刊によせて

附属図書館長 宮崎 誓

今年も東光原文学賞の季節が来ました。六月下旬より応募作を募集し、今年度は十一月六日に締め切りました。一週間ぐらい前に「何篇の応募ですか」と問うと、「直前に増えますから」と図書館職員からの回答です。最後まで文章を練っている学生の姿を思い浮かびます。今年度は二十篇の応募でした。確かに、熊大の全学生数の一握りです。しかし、原稿用紙五十―七十枚程度の力作を応募する学生が二十名もいるということです。小説を書く機会を提供する附属図書館のイベントは十七回目を迎えました。例年よりも応募数は増え、内訳は、文学部九篇、教育学部二篇、法学部二篇、理学部二篇、医学部二篇、薬学部一篇、工学部一篇、自然科学教育部一篇です。第一次選考を経た九篇について、人文社会科学研究部教授の濱田明先生（委員長）・同准教授の日高愛子先生、熊本日日新聞社論説委員会副委員長の農孝生先生の三名に読んでいただきました。そして、十二月二十五日の選考委員会にて、精査した作品を協議し、学長賞一篇、附属図書館長三篇を選出しました。

文章を書くことは、構想を立て、具象化して、表現することです。日頃から社会問題・歴史・文化・科学に関心を寄せ、人間に興味を持つこと、そして、何よりも「書いてやるぞ」という気

迫が小説を作ります。受賞作を読みました。創作過程の様子が目の前に浮かんできます。設定の斬新さ、展開の意外さ、テーマの同時代性、文章の流麗さ、それぞれの応募作には特徴があり、書き上げた学生の顔が垣間見えます。熊大生の想いの断片を乗せた風を感じます。この冊子を取った皆さんにも是非読んでほしいと思います。できれば、何か感じ取り、小説にチャレンジしてください。

審査員の方々は、苦心して筆を進めた作品を受け止め、真摯に評価しようと読み始めます。大変ですよ。興味・嗜好が必ずしも一致しない文章を読み通すのです。しかし、楽しみでもあります。作者との思わぬ会話も見出します。これらの積み重ねを通して、四名の受賞者が確定しました。おめでとうございます。

「画家ホールウォードは生きている」は生きづらいと感じる社会へのメッセージでしょうか。二元中継の舞台設定に意欲を感じます。そして、何と言っても読後感が良いのは「一枚目のキャンパスの魔法」です。スラスラ読めました。SNSの功罪に向かい合った「くたばれ、マイヒーロー」は社会問題に正面から問いかけています。視点が面白かったのは「食べる」ことを主題にした作品です。人間を食から観察しています。受賞作品は学生の生活・考え方を私たちに十分に知らせてくれました。今年も面白い経験をしました。学生たちの発信が知の集積になるのは、大学の役割だよ、と言いたい気持ちです。

東光原文学賞は、第五高等学校の運動場名に由来しています。図書館はこの地に建てられ、多くの貴重資料を保存・公開しております。市民講演会などを通じて、地域に還元するとともに、大学内の教育・研究を多岐に亘り支えています。ひご未来図書館（中央館）の一階には、グルー

プ学修室・古文書閲覧室・PCコーナーに加えて、学生同士が談笑しながら学習できるラウングコモンズを備えています。国際的な研究情報を媒介し、研究成果の発信を推進し、熊大の研究を支援するのも附属図書館の役割です。東光原文学賞は教育支援事業の柱の一つです。熊本大学附属図書館の活動の大きな特徴の一つです。企画から作品発表まで図書館の方々に骨を折っていただいています。附属図書館長として、文学賞を支えていただいた方々に感謝するとともに、本イベントの主人公たる学生たちのチャレンジを称え、彼らの成長を切に願っております。



上段：農・濱田・宇佐川・日高
 下段：小川・坂田・井上・江頭・吉野・宮崎

画家ホールウォードは生きている

井上 玲

三木侑奈がフィリップ・ホールウォードの夢を見始めて、今晚で三回目になる。

二日ぶりのアトリエには昼下がりの陽光が差し込み、カーテンがゆっくりと揺れている。窓際に寄せられた引き出し付きの机にはナプキンに包まれた果物ナイフと瑞々しいりんごの積まれた果物籠、皿と銀のカトラリーが並べられている。おもての庭では花々が青空の下で見事な大輪を咲かせ、木漏れ日が踊っている。彼の家にはいつも長閑さと心地良い退屈が風に乗ってやってきた。

部屋の中央のイーゼルには眩しいくらいに陽の光を照り返す庭を淡い色彩で描いたカンバスが置かれている。その正面にホールウォードは腰かけ、時折庭の様子を窺っている。彼は髭こそ整えられているものの髪には寝癖が残っており、服もくたびれた印象を受ける。いつも何か大きく重たいものについて悩み怯えるような憂いと微かな震えを瞳に宿していて、彼がそこにいるだけ

で部屋がずっと陰ってしまふような男だった。

三木はいつも天井付近で意識の塊となって漂っている。少しも動けなかったが周囲を見渡すことはできた。彼女の中で数日が過ぎることに彼の中ではその倍以上の時間が経っているらしく、全く変わらない部屋の中でカンバスと窓越しの庭だけが移ろいを教えてくれた。

部屋の扉がゆっくりと開き、一人の男が顔を出す。三木は召使であるパーキンソンかと思つたが、違った。一晩目にも見たヒューゴ・ラッセルという男で、ホールウォードの唯一の友であるらしい。カンバスと向き合うホールウォードの背中を見て静かに微笑むと、音を立てないよう細心の注意を払って扉を閉じ、革張りの肘掛椅子にどっかりと座り込む。そして窓から外を眺めてうっとり目と目を細めた。

三木の目はラッセルに釘付けになっていた。艶やかな黒髪を後ろに撫でつけて皺一つないジャケットに袖を通す彼は、どのような場合であっても幸せそうな微笑を浮かべる美丈夫であった。程よく肉のついた立派な体躯に長い四肢と細くしなやかな指、理想的な曲線を描く鼻筋や顎は彫刻を思わせ、椅子に背を預けて長い睫毛を伏せる彼はそれだけで幾ばくかの金のとれる一枚の絵になるほどだ。

ラッセルは机から果物ナイフとりんごを一個手に取り、皮を剥き始めた。赤い帯が緩やかな曲線を描きながら垂れていく。小さな音をホールウォードの耳が拾ったようで、彼はラッセルの方を向いた。瞬く間に彼の顔を覆い尽くした驚きの色が、すぐに微笑に塗り替わる。

「りんごなんて剥けたのか」

筆をイーゼルに置いて、妙に上擦った声でもりながらホールウォードは話しかける。

「小さい頃に女中に教えてもらったのだよ。母が寝込んでしまったときに、何かできないかと考えた結果、りんごを擦りおろして出すことを思いついてね。可愛いだろう？」

「健気だ。母君もさぞ嬉しかったんじゃないかな」

「ああ、喜んでくれたよ。だから今でもりんごだけは剥ける。じゃがいもは駄目だ」

口元に手を添えてはあはあと独特な笑い方をするホールウォード。ラッセルもつられて微笑んだ。

皮を剥き終わったラッセルはりんごを皿に乗せると、刃をナプキンで拭きながらホールウォードの方を見た。

「それ、観ても良いかい？」

ラッセルの顎がカンバスを指していくと動く。ホールウォードは一瞬肩を強張らせたが、立ち上がって微かに震える手でカンバスを示した。

「ありがとう、フィル」

ラッセルはカンバスの正面に立ち、腕を組んでじっと見つめる。彼の斜め後ろに立ってホールウォードは右の掌で左の肘辺りを撫でていた。二人の様子を見つめる三木も知らず知らず息を詰めていた。彼女の知る限り、ラッセルがこの絵を見るのは初めてだ。

ラッセルはしばらく黙っていたが、ふと吐き出した息に溶かすように言った。

「良い絵だ」

明るい声色にホールウォードの眉間に寄っていた皺が浅くなる。

「やはり君の絵には惚れ惚れする。構図に色遣い、筆の扱い方にもだ。きっと完成したら目を見張るものになる。画商に話をつけなければ。誰がいただろう。キャンベルは駄目だ、あいつは減点方式で絵を買う。偽りは無いが、正しい目を持っていない。ああしかし、少々影が薄いのではないか？ これでは締まりが無い。黒の扱いは君の十八番だろう、恐れずやってみるといい」

「わかった。尽力してみよう」

ラッセルはまたしばらく絵を覗いていたが、ふとホールウォードの方へ振り返った。

「また新しいモティーフに挑戦しているらしいな、今回はどうした？」

ホールウォードは一瞬目を丸くし、眉を寄せた。

「前の、紅薔薇の絵はブレナンが似たものを描いていた。でもこれならば僕だけが知る景色だ。被ることは無いし、駄作には絶対にならないだろう」

ラッセルは黙っていた。顎を指先で撫でる彼の表情は合点がいったとも、何かを思案しているとも見える。三木は窓の外を見やった。美しい庭を見て、家ごとに大した差が出るだろうか、と考えた。

ラッセルはゆっくりとした歩調で部屋を横切ると、先程の椅子に腰を降ろす。そしてナイフを手にとって皿の上でりんごを八つに切り始めた。切り終わると皿の上に並べ、未だ立ったままのホールウォードを手招く。彼は先程まで自分が座っていた椅子を持って来て座り、カトラリーを手にとるとカンバスに視線を向けた。

「あの絵は、サマセット夫人に気に入られるだろうか。あの人の支援が無ければ、僕は……」

「案ずることは無いさ。あの方は良い目を持っている。きっと前回のように高貴で清廉な言葉で称えてくれるだろうさ。それに何より、私が気に入っている」

「君は僕のどの絵であっても好きだろう」

「何を言うのだフィル。もちろんだとも。何故ならば君は誰よりも勤勉で努力しているからね。主は我々に数々の試練を、罪を犯した者に罰をお与えになるというがね、君ほどの者にはなさらない、褒美だけだ」

「試練とは誘惑の事だ。私は断じて何かに惑わされているのではないよ。君はもう一度学びなおした方が良い」

「おや、そうだったかい」

「君の神に委ねすぎているところは好ましいが、正しい知識は付けなければ」

「なんと、この面倒な性を褒めてくれるとは」

「君は現実を見ていて鋭い指摘をくれる。称賛ばかりくれるよりずっと安心する」

「それはよかった。なにぶん素直であれと育てられたからな、嘘と謙遜はお生憎様、ちっとも身に付かなかった」

二人は顔を見合せて笑った。

カトラリーを手に取ってりんごを一切れずつ口に運ぶ。咀嚼することに二人の顔はほころぶ。

「ああ、これは良いりんごだ。君から召使に言っておいてはくれないかな、彼は素晴らしい感性

を持つている」

「もちろんだ。君に褒められたとあれば、パーキンソンもきつと誇らしいだろうね」

二人の話は続いていき、合間にりんごの小気味良い音が響く。美食家を自称する腹の大きい滑稽なチャールズの話を終え、ルイス姉妹の喧嘩について行く先を悲観し始めた頃、三木は意識が朦朧になる感覚を覚えた。夢が終わる。視界が白みだし、アトリエと二人の輪郭が解けていく。遠くからアラームの音が近づいて来た。

講義室の扉を少しずつ開ける。肌を刺す冷たい風が隙間から室内に向けて吹き込んでいった。急に蝶番が軋む音をたてたので三木は体を強張らせる。既に講義は始まっている。これ以上目立つのは避けたかった。三木は足音を極力立てないよう努めながら歩いていき、講義室の後方、一番右の列に見知った金髪の後ろ姿を見つけた。少しでも早足に隣まで来ると相手もこちらに気づいたようで、控えめに手を振ってくる。知り合ってからそろそろ半年になる彼女は岸和紗といった。

「おそーい」

三木が座ったタイミングを狙い、岸が肩を小突いてくる。にまにまと笑う顔が憎たらしい。

「どうしたの、寝坊？」

「そんなところ。遅刻じゃないからセーフ」

「たしかに。十分はセーフ」

「セーフセーフ」

岸は私物のパソコンでパワーポイントの資料を表示していた。三木も急いでダウンロードしたが、映ったスライドに思わず顔をしかめた。専門用語の並ぶ地味な資料は目が滑るばかりでちっとも理解できそうになく、そもそもこれまでまともに講義を聞いていたためしが無いのでなおさら意欲が湧かない。それは岸も同じで、表示させているだけで見てはいないと三木は知っている。二人揃って優等生には一步届かないぐうたら学生であったという訳だ。

じりじりとなけなしのやる気が削がれていく。手持無沙汰な時間に限って秒針はゆっくり回るものらしく、三木は時刻を確かめる度うんざりした。再来週に控えた期末試験が脳裏に過る。大学生初めての春休みを楽しみ尽くすためにも、試験では大きなミスをしたくなかった。だがこの調子では及第点すらあわやといったところ。

既に岸は見るものが無くなったのかスマホを机に伏せあくびをしている。三木の視界にも頭の下がり始めた学生がちらほら見える。当の三木はなんとなく眠れずにいた。爪先が冷えて感覚が無くなってしまい、その違和感が妙に気になって目が冴えてしまっているのだ。春から初夏にかけての暖かさが恋しくなる。ふっとあの夢の景色を思い出した。部屋に満ちる眠たくなるぬくもり、試験などのしがらみもなく、時間がとけて無くなったように開放的なあの穏やかさ、まさに三木が今心底求めているものだった。

「最近、同じような夢見るんだよね」

声をひそめて話しかける。岸は前を向いたまま相槌を返した。

「同じっていうか、同じ人たちが出て来る夢っていうか」

「映画みたいな？」

「あー、それ近い」

「ふーん。……どんな夢？」

「どっかの家で画家が絵を描いているのをずっと見てる夢、外国っぽい」

「外国人か、ナシ寄りのアリ。イケメン？」

「イケメンっていうか、おっさんだった。三十は近いんじゃないかな」

「三十路はナシ寄りのナシ」

「でしょうね」

そのときパソコンを見ていた先生が突然話すのを止めて顔を上げた。講義室のあちこちから漂うように聞こえていた話し声が小さくなる。三木と岸も口を閉じてわずかに俯く。先生はゆっくりと講義室を見回し、再び視線を手元に戻した。

「服はちょっと汚くて、吃音で、笑い方が気持ち悪くて」

「めっちゃ言うじゃん」

「でも、良い絵描くんだよ」

三木は美術などからっきしで、モナ・リザや星月夜など有名な作品ならば絵と題名が一致するが、それも辛うじてだ。絵を観る趣味などあるわけがない。それにも関わらず、ホールウォード

の絵は違った。絵の具で描かれた、何の面白みも無い絵を初めて綺麗だと感じた。心の底から染み出して来るように、夢特有の惚けた思考の中で感動を抱いた。彼の絵のどこに惹かれたのかはわからない。だが魅せられたのが事実だ。

ふうん、と岸が興味なさそうに言った。彼女の目はほとんど閉じられており、そろそろ眠気の限界らしい。次第に左右に大きく頭が揺れ始め、肘を立てて額に掌を当てた意味が無くなってくる。傾きすぎて机にぶつかりそうになる度に目を覚まし、先生に見られていないか確かめていた。しばらくそうしている内にととう岸が眠ってしまったので、三木はぼうっとスクリーンを眺めつつ、乾燥した冷たい手を擦ってカイロを忘れてきてしまったことを悔いた。年が明けてまだ早いのに、今から春が恋しかった。

ホールウォードが一張羅に身を包んでいた。強張った表情で椅子に腰かけて頑固な癖毛に櫛を通している。パーキンソンによって丁寧に保管されていたのか、シャツには皺ひとつ見当たらない。三木は部屋の角で漂いながら少しだけ驚いていた。彼が外出するのを見るのは初めてだった。「旦那様、そろそろお時間です」

パーキンソンが顔を覗かせる。いつも仏頂面の彼は感情が読み取れず、主人とは最低限の会話しかない。三木が苦手とする類の人間だ。だがその無関心や不忠とも捉えられる態度がかえって楽なのか、ホールウォードはいたく心を許しているようだった。

「見苦しくないかな、パーキンソン？」

いつにも増して震えた声で問いかける。

「いいえ」

「折角サマセット夫人の食事に呼ばれたんだ。もっと飾った方が良かったりするのではないかな？」

「飾りなどお持ちなのですか？」

「ううん」

「ならばどうしようもできません。それに世の芸術家は服に頓着なさらないものとお聞きます。旦那様ほどの画家とあれば、十分他の者たちよりも整っている方でしょう」

場所と相手によっては侮辱と解釈されかねない彼の物言いだ、彼の表情から少しばかり力が抜けている。世辞を言われるより気が楽なのかもしれない。

ホールウォードは立ち上がると背もたれに掛けていたジャケットを羽織り、壁のフックにかけていた帽子を被る。部屋を出た彼の後ろをパーキンソンが付いて行く。玄関に辿り着くとホールウォードは扉を少しだけ開けて顔を出した。街灯の橙色が薄暗い街の中で道なりにぼつぼつと浮かんでいる。仰いだ空は薄灰色の雲に覆われているが、雨の匂いはしない。町は心地良い藍色の夜に包まれていた。

「日が変わる前には帰ってくるよ」ホールウォードはパーキンソンを振り返った。

「僕を待っている必要は無いから、仕事を終えたらぜひ眠ってくれ」

「かしこまりました」

「じゃあ行ってくる」

閉まっていく扉の向こうでパーキンソンが深く頭を下げていた。

階段を降りきってホールウォードは再び深呼吸し、襟を正して帽子を被りなおすと俯きがちに歩き始めた。大通りまで来ると彼は路肩に停まっていた馬車に乗り込んだ。進みだした馬車の音が夜道に響く中、三木の体は自分の意思と関係なく馬車を追うように空中を進んでいた。これではまるで風船かドローンだ。しばらく戸惑っていたがいつしか気にならなくなり、見慣れないレング造りの街並みを眺めていた。

馬車はある屋敷の前で停まった。立派な門を持つ、見るからに裕福な家だ。ホールウォードは客室から降りて御者に駄賃を渡し、整えられた庭を通して玄関の戸を叩いた。彼を迎えた召使が夫人とその他の客は既に食堂にいることを伝え、ホールウォードの手荷物を受け取った。ホールウォードは彼に案内されて廊下を進み、辿り着いた扉のノブに手をかけて目を閉じて数回深呼吸をした。肩が微かに震えている。そして目を開き、扉を押した。

「よく来てくださいました、ホールウォードさん」

中に一步踏み入れたとき、一番奥の席に座っていた女性が彼に話しかけた。食事会の主に相応しく着飾っているが、過剰な若作りはしていない。顔の皺ひとつ、指先の傾き方ひとつから気品が溢れている。重ねた年月を味方につけている人という印象を受ける。

ホールウォードは彼女に挨拶を返し、彼女から一番遠い席に腰を降ろした。女中が一人扉を開

けて入ってきて、彼の前に食事を並べ始める。

「ホールウッドさん、紹介しますわ。この方はダグラス・トマス。私の兄の孫息子なのだけけれど、絵描きを目指しているらしいの。仲良くしてくださいと嬉しいわ」

夫人は自分の隣に座っていた少年を手で示した。少年はまだ初々しい緊張と恥らいを顔に浮かべて頭を下げ、人懐っこくはにかんだ。垂れた眉と頬に散らばったそばすが彼に子犬のような愛嬌を与えている。手にはまめができており、よく見れば爪が汚れている。ホールウッドが画家の卵に精いっぱい励みの言葉をかけると、少年は

「あのホールウッドさんからお言葉をいただけるなんて、僕は幸せ者です」

と微笑んだ。発音の節々に若干の田舎訛りがうかがえた。

「そういえばホールウッドさん、新作の進捗は如何です？ 芸術家を急かすなんておこがましいかもしれませんが、私貴方の作品を楽しみにしているのですよ」

「順調ですよ。大まかに色を乗せ終えたので、細かい調節に入ろうと思っています」

「あらそうなのですか。芸術を見ることはできても生み出すことはできない私ですから想像するしかありませんが、大変な作業なのでしょうね」

「貴女の日々の苦勞と功績に比べれば私など」

「あらご謙遜を。私など孤兒院の哀れな子供たちと未来ある方々を支えることしかできません」

「ホールウッドさん、僕に教えてください。貴方は今何の絵を描いているのですか？」

「私の屋敷の庭です。あの景色を、どうにかキャンバスにおさめてみようと思います」

「なるほど。貴方のような方でも身近なものを題材にすることがあるんですね。僕はまだまだのようです。早く技術を上げて皆さんのように示唆を含む抽象画を描かねばと焦っていました」

ホールウッドは僅かにたじろいだ。トマスの言葉に嘘や皮肉は感じられない。

「画家の全てが全てそうだとはい限りませんよ。私は私の側にある美しさを、絵の具と私の貧しい技術で表現しようと足掻いているだけです」

「なるほど。学びになります」

食事はつつがなく続いた。夫人が監修したという料理に客はたいへん満足し、感極まった女性がレシピを夫人に尋ねていた。夫人は秘密だと言って微笑むばかりだが相手もなかなか食いがらず、二人はどこか楽しげだった。今晚の客は様々な分野から集められているようで、ホールウッド達芸術家や政界関係者、たった一晩で巨億の富を得た商人もいた。彼らの話は皮肉と冗談を挟みながら続く。カトラリーを左手に持ったトマスは話が切り替わる度顔を話者に向け、時折夫人に何かを小声で問うていた。早く都会の雰囲気を感じようと励んでいるらしかった。ホールウッドは終始黙ったままだった。時々話の流れに合わせて顔をあげて表情を曖昧に変えていたが会話に混ざることとはできず、視線を彷徨わせた果てに決まりの悪そうな顔で皿と向き直すことも一度や二度ではなかった。

メインディッシュの皿が下がり、運ばれてきたデザートも食し終わった人が出始めた頃、扉が開き召使が入って来てトマスの名前を読んだ。どうやら迎えが来ているらしい。トマスは小さく声をあげた。

「もうそのような時間なのですか？」

夫人が彼の頭に手を乗せた。

「そう悲しい顔をしないで、ダグラス。また会えますから」

「まだ聞けていない話が沢山あるのです。時間は次を許してくれない薄情者だと先程伺いました。お願いです大叔母様、どうか貴女から説得してくださいませんか？」

商人の男が笑った。

「これはこれは、坊ちゃん、まさか私のような人間の言葉を覚えておいでとは」

「貴方と僕とは人生経験の厚みが違います。僕が上手く生きていくためには、皆様からお話を聞かし、来たるべき危機になけなしの備えをして怯えることしかできないのですよ」

「これは参った。ではこうしましょう。次この集まりに私を慈悲深くも呼んでくださった暁には、私はどの商談も金の匂いもかなぐり捨ててここに参りましょう。そして貴方の前に走る轍、その砂粒を一つでも増やしてみせると誓いましょう」

「本当ですね？」

「商人の口約束ほど信頼のおけるものではありませんまい。何故なら我らが契約書を介さず契約を結ぶとき、それは目の前に転がり出でた至上の利益を逃がすまいと飛びついたときですから」

「約束、いえ、契約ですよ？」トマスが目尻を下げると、商人は深く頷いた。

「では大叔母様、皆様、僕は帰ります。楽しい時間をありがとうございました。どうかご自愛くださいね」

「こちらこそ楽しかったですよ。またいらっしゃいねダグラス、風邪には気を付けて」

トマスは一同に向かって深く頭を下げると、軽快に靴を鳴らしながら扉をくぐっていった。次いで商人がおもむろに腰を上げた。

「夫人、私もここでお暇させていただきたく存じます。まったく光栄な契約を結んでしまった以上、それと腸を断つことにならぬよう、一層励まねばならないので。お食事、たいへんおいしくございました」

「ありがとうございます。貴方には必ず手紙を差し上げなければなりませんね、あの子のためにも」

商人は優美な仕草でお辞儀をし、食堂を出ていった。

食堂は静かになった。トマスの天真爛漫な様子を思い出しているのか、皆表情が柔らかい。夫人は客が皆デザートを食べ終えたのを確認し、控えていた女中を呼んだ。彼女が皿を回収し始めたとき、ホールウォードが夫人にいきなり声をかけた。

「私も帰りたいと思います」

「あら、さようですか」

「とても美味しかったです。では」

彼は音を立てながら椅子を引き、一度頭を下げると速足気味に部屋を出た。

彼の背中を見送ったことで、三木はふと気が付いた。自分の体が彼に付いて行かない。依然テールの少し上、人々の顔が良く見える位置を保っている。目覚めの気配は無い。三木は急に不安

になった。拭えない嫌な予感が心をかき乱していた。確証は無かったが、何か大きなことが起こる気がしてならない。

遠くで扉の閉まる音がした。すると夫人の隣、トマスの向かいに座っていた老紳士が顔を上げて玄関の方を見た。彼はこの食事会中一言も発することなく、ただ不機嫌そうにしていた。老紳士はもともと厳つい顔を更にしかめ、夫人を睨みつけた。

「何故あの男を呼んだ」

しわがれた棘のある声だ。夫人が露骨に嫌そうな顔をする。

「来客のリストは事前にお渡ししたでしょう、兄さん。それを見た上で、貴方は今日出席すると言ったのですよ」

「俺はてっきり、誘いを断れないから承諾はしたが、当日になって怖じ気づいて仮病でも使うものだと思っていたのだ。まさか本当に来やがるとは！ 冗談や皮肉や賛美の一つ、話題の一つも出せない凡夫以下のくせに、飯だけ丁寧に平らげて帰りやがった！」

「そうあの人を悪く言わないでください。私の友人ですよ」

「友人だあ？ 坊主の紹介だけして、一度も話しかけなかったくせによく言うよ」

夫人は黙って目を伏せた。老紳士は可笑しそうに笑う。他の人々も視線を彷徨わせている。一人の女性がおずおずと夫人に話しかけた。先程レシピを尋ねていた者だ。

「サマセット様、正直に申し上げますと、私も何故あの人をお呼びするのか疑問に思っております。あの人の絵、もう誰が好いているのです？ いえ、決して駄作だとは申しません。今も昔

もあの人の絵は変わらず素晴らしいものです。しかし」

「変わらなさすぎる、でしょう？」サマセット夫人が薄眼で彼女を見る。

「あの人の停滞は私も感じています」

「お前の事だ、体裁を考えているのだろうか？ 呼ばなくなれば面倒な噂を流される。だがこれ以上は駄目だ。お前の財も底なしでは無いし、ダグラスもいる。老木が若き芽の妨げになってはいけない。あれが何を考えているのか知らんが、成長を止めた芸術家に未来は無いぞ」

「ええ、わかっています」固い声だった。

「ですから、前回と次回の品評会にはお呼びしていません。その次はお声がけます」

老紳士は声高に笑った。

アラームの音が聞こえる。三木は茫然としていた。

昼休みの学食は人であふれかえっている。三木は肉うどんを頼みに行った岸を待ちながら、スマホで検索エンジンを開いていた。履歴にはずっと下まで類似した単語が並んでいる。語順を入れ替えたりスペースを抜かしてみたり、後半は無意味な試みを繰り返しているらしい。ため息をついたとき、人の頭を避けながら岸がお盆を手に戻って来た。

「ごめーん、めっちゃ列長くなってさ。ユウのマーボー冷めてない？」

「大丈夫じゃない、多分」

「多分って」

席取りに使っていたリュックを床に降ろそうと横を向いたとき、岸の脚が目に入る。外の空気は痛い程冷えているのに、ミニスカートを履いて見事に白い肌を晒していた。三木は尊敬と少しの恐怖でその白い脚を見た。見ているこちらが寒い。岸のファッションにかける情熱は見習うべきだと思っているが、ここまでできる自信は無い。三木は早々に降参して長ズボンとタイツを装備していた。

二人で手を合わせ、スプーンを持つ。掬って口に運べば舌に残る唐辛子の辛みと、やわく崩れる豆腐の風味が丁度いい具合に混ざり合う。まだ飲み込みきれない内に白米をかき込めば染み出したスープと絡み合って極上の旨味を生む。普段ならば熱のせいで辛みが倍増されるのだが、少し冷えているおかげで食べやすい程度に落ち着いている。だがそれでもスープを含んで柔らかくなった白菜は辛かった。隣の岸は勢いよく麺を啜り口いっぱい頬張っている。大盛りのうどんがその薄い体のどこに収まっているのか、以前冗談で尋ねたが、「胃だよ？」とまた冗談が返って来たので金輪際聞かないことにしている。

「そういえばユウ、五限の講義場所変わるって」

「うそ」

「ほんとー」

「どこ」

「知らない。調べて？」

急かす岸に文句を垂れながらスマホを持つ。パスコードを入力した途端、開きっぱなしだった検索履歴画面が現れる。急いで切り替えたが、横から覗き込んでいた岸にははっきり見えていたはずだ。腹の底が冷え、怪しまれていないか不安で手が震える。内心を悟られないようにメールアプリを開いた。件の講義は一つ下の階、映像機器が揃えられた教室に移動となっていた。講義一回分を使って何かしらの映像を見せられるのかもしれない。きっと睡魔と戦う羽目になるだろう。

岸が見たのを確認してメールを閉じ、麻婆豆腐に向かい直る。スプーンを握ったとき、岸が話しかけて来た。予測はしていたが、彼女はあの異様な検索履歴を見逃してはくれないらしい。

「さっきちょっと見えちゃったんだけど、ホールウォードって何？ 講義に出てきてたっけ」

フィリップ・ホールウォード、画家、男性、庭の絵。これらの言葉で履歴は埋め尽くされていた。思考を回すが手ごろな言い訳は思いつかず、素直に打ち明けることにした。はぐらかして面倒なことになるよりはきつと良い。

「この前、画家の夢を見るって言ったじゃん」

「うん。あ、その人？」

「そう」

岸の眉間に皺が寄り、首が傾く。想定通りの反応だった。

「夢ってさ、記憶をもとにしてるって言うでしょ。けど私あの人のこと知らないし、画家についても外国の街並みについてもさっぱり。でも夢にありがちなぐはぐなところとか一つもあの夢

には無くて。だからもしかしたら、いつか教科書とかで見たことがあって、それで夢に出るのかもって思ってる」

「なるほどね。で、どうだった？」

言い淀む。

「一つも出てこなかった。小説の登場人物として画家のホルウォードさんはいるらしいんだけど、全くの別人っぽいし、もちろんその作品は読んでないし」

岸は何も言わなかった。何も言えなかった、がきっと正しいだろう。胸中の混乱は容易に察せられた。ただ何度も見ただけの夢にここまで固執するなど、きっとどうかしている。

「ごめん。私でもヤバいなって思ってるよ。ファンタジーじゃないんだから。私のことだし、別に気にしないで」

「……わかった」

岸は何か言いたげな顔をしていたが、それでも飲み込んでくれたことに三木は心の中で深い感謝と謝罪を抱いた。

空いた皿を返却口に運んで外に出る。昼だというのに冷えきっている空気が体から容赦なく熱を奪っていく。マフラーに鼻先をうずめ、手袋越しの指先に息を吹きかけても意味は無かった。

三木はこっそり岸の顔を見た。隣を歩く彼女は口を引き結んだままだ。サークルや掛け持ちしているバイトなど話題に尽きない人なので、静かにしているのは珍しい。三木はいたたまれない気持ちになった。十中八九、三木の話が原因である。岸の顔からは何を考えているのか推測できな

い。ホールウォードについて考えているのか、三木の突飛な発想を不思議に思っているのか、三木の脳内に数多の仮説が浮かんで飽和する。次の時限では別々の講義を取っているが、唐突に別れを切り出すのはなんだか嫌だった。だが丁度良い話題も再び夢の話をする勇氣も、生憎持ち合わせがなかった。目的の角がもうそこに見えている。三木が焦っていると、

「ねえユウ」

先に岸が話しかけてきた。わずかに歩調が遅くなる。三木は駆け出しそうになるのを必死に抑えた。

「さっきの夢の話、してもいい？」

「……いいよ、どうしたの？」

いつもより少し真面目な瞳と目が合った。

「なんで何度もその夢を見るのかとか、その人はなんなのかとか、色々気になるけど、それよりも、なんでユウはそんなにその人のことだけ考えてるんだろうなって。ユウのさっきの話なら、外国の街並みも画家の暮らしも知らないでしょ。でもホールウォードのことばっかり調べてた。どこかで見たはずだって言うのなら、他のも調べたりするんじゃないかって。教科書とか、資料集とか」

三木はなんだか負けた気分だった。岸は聴く、人をよく見ている。いつもの明るく少々だらしない雰囲気からは想像できないほどに。しかし岸は分別のつく人でもあった。自分の性格がもたらす発言の影響を自覚していて、だから言葉を選ぶことができる。人の悩みに自分から切り込ん

でいくことはしない、普段ならば。

「力になりたい、ユウ」

一体どこまで見透かしてるのだろうか、三木は笑ってしまいそうだった。

たった今三木は思い知った。岸は真っ直ぐで、少し傲慢な人だったらしい。誰かを心から信じている。今だって「三木は自分を拒まない」と疑っていない。岸の強い視線が物語っている。それを嬉しく感じ、あまつさえ安心してしまったのだから、もう三木に残された選択肢は一つしかなかった。

近くのベンチに岸を誘う。昼休みはまだ残っている。席の心配など講義室に駆け込んだ数秒間の自分がすれば良い。

「自分の好きなこと、楽しいって思っていることが、誰かの勝手な都合でできなくなるのって、とっても嫌だし、腹立たしいなって思ったの」

まずは今まで見た夢たちについて話すことにした。

三木はテニスが好きだった。炎天下のコートで、疲れて重たい腕を力いっぱい振りぬくのが爽快だった。ボールがぶつかり、息が上がり、外野から声を張り上げて、テニスに関わる音の一つ一つに心を躍らせていた。ボールを追いかける内に周りが見えなくなっていく、勉強も進路も忘れて次の一手のことしか考えていない澄みきった思考が癖になっていた。技術を磨き、メンバ―

とネットを挟んで戦って互いの技を称え合い、勝っても負けても楽しい雰囲気になり魅了されていた。

始まりは小学校高学年、特に深い理由もなく入部した。山間にある小さな小学校のテニス部は言わずもがな規模が小さく、大会を目指すより楽しむことを重視する傾向があった。共に腕を磨き、たまにぶつかり、友人の成果を自分のこととして喜び、友情と協力と努力の美しさを学ぶ。三木にとってテニスとはそういう場だった。

中学校では入部しなかった。先輩たちがずっと喧嘩してばかりだと噂が回って来たからだ。他に興味を引かれた部活も無かったので、三年間帰宅部で過ごした。充実したものだったが、好きなテニスができない虚ろは埋められなかった。

街中の高校に合格し、花の高校生活を謳歌するにあたり、テニス部に入ることは考えるまでもなく決めていた。不穏な噂は無く大会に毎年出るほどに優れた団体だと知り、三木の高揚は一入だった。各地の中学校から集まった知らぬ顔の生徒たちに不安と期待を抱き、小学校のときよりうんと多い部員数に慄き、充実した設備に目を輝かせ、うきうきと入部届を提出した。

想定していたものと違う、と気づいたのは初めての大会が終わり、次に向けて切り替えている時期だった。雰囲気は冷たかった。部内の人間関係が劣悪だったわけではない。友人との仲は良かったし、先輩とも良い関係を作れていた。だが部全体に、見えない亀裂があちこちに走っているような、薄氷の上を歩きながらも気づかないでいるような、大小様々な軋轢の気配がいつもしていた。部活への参加度、先輩への態度、様々に理由があったが、何より三木が信じられなかつ

たのは技術の差に起因する感情だった。上手な部員への嫉妬と嫌味と諦観、不得手な者への白眼視と無関心と無接触、どれも三木のテニスにはありえないことだった。

もちろん三木もわかっていた。自分より技術の劣る者を踏み台にしての上がっていくのが良くも悪くもスポーツだ。しかも大会が目標とあらば上澄みをより高めていく方に集中するのは理にならっている。三木もその風潮の恩恵を受けて先輩や顧問に目をかけてもらった一人で、より上を目指すのも技術を磨くのも心が沸き立つような心地だった。その分際で劣る者を見捨てる体制に異議を唱えるのは、どうも綺麗ごとを言っているようで躊躇われた。わかっていた、飲み込めなかっただけで。

冬休み、偶然少しだけ暖かかったある日、三木は幼馴染と会話の流れでテニスをするることになった。彼女とは小学校の頃からずっと共にテニスをしてきた仲だった。最初は緩いラリーを繰り返しながら雑談に花を咲かせていたが、次第に熱が入り戦略の読み合いが始まった。球が速くなり、四肢に力が入り、いつのまにか目的が勝ちにすり替わっていた。三木はある瞬間、手元にやってきたボールと背中にしたラケット、対角を結ぶ真っ直ぐな線を見た。それが勝利の線だと認識し、反射で腕を振った。ボールは鋭く飛んでいき、狙った通りの場所に着地した。三木は勝利に声をあげ、腕を振り上げた。そして自分が取り返しのつかないことをしてしまったと気が付いた。「強くなったね、侑奈。私なんかじゃもう勝てないね」

彼女は悲しそうに笑っていた。諦めたように、何かを失ったように。嬉しそうでもあったが、楽しそうでは決してなかった。

三木は恐ろしくなった。ずっとテニス仲間であった彼女を敵だと認識し、倒すために全力を注いだ。楽しむテニスではなく、勝つテニスをした。自分のテニスが、いつの間にか壊されてしまっていた。

春になり、三木はどうとう集中でなくなった。代わりに視野が広くなり、受け入れられない実態ばかりがますます目に入るようになった。結局、大会を待たずに退部した。届を渡したときの、裏切られたような部長の顔が鮮明に焼き付いている。

「私がテニスをやめたのはさ、全部とは言いたくないけど、私のせいなんだよ。あのピリピリした、誰かを見捨てるような雰囲気は絶対駄目だと思うけど、それでもやめたのは私なんだから。……でもさ」

ホールウォードの震えた背中と手を思い出す。彼はいつも何かに怯えていた。それはきっと、誰かからの冷遇、低評価、見捨てられ、支援を打ち切られることだ。

「あの人は何も悪いことしてないよ。ただ認められる絵を描こうとしてただけ。見てくれる人が気に入ってくれるようにずっと悩みながら、頑張ってた。本当に描きたいものも描けずに」

一度だけ、ホールウォードが笑って絵を描いていたことがある。二回目の夢で、新しく手に入れた青の試し描きだった。紺や藍とも呼べる深い青を、彼は小さな絵葉書の一面に塗った。それは静かに揺れる夜の海の絵だった。ぬらついた紺の水面が水平線で黒い曇り空と混ざり合い、小

さく細い三日月が頼りない光を放っていた。暗くて目を引く物が無い、庭の絵と全く対照的な絵をこそ、彼は心底楽しそうに描いていたのだ。その絵にこそ、三木は心を奪われたのだ。

「お金が無くちゃ描き続けられないから、彼はやめられなかった。迷いながら描いて、苦手な食事会にも参加して、それなのに、それなのに、捨てられた」

老紳士の笑い声が、おずおずと発言した彼女の仕草が、サマセット夫人の固い決意のこもった瞳が、ずっと脳裏にこびりついている。

「ただの夢にここまで真剣になるのなんておかしいって思ってる。けどさ、駄目じゃん、それは」

わかっている、飲み込みたくないだけで。

「だからさ、夢なら、私の記憶からできたものなら、どこかで見たことがあって、この世界のどこかにあの人の歴史が残っているはずなんだよ」

遠くでチャイムの音がする。

「そうでなきゃ、あの人の努力が報われないじゃんか」

岸は黙って聞いていた。ややあって、静かに

「スタバの新作飲みに行こうよ、奢るから」

と言った。

本降りの雨に打たれる石畳を、ホールウォードはラッセルと並んで歩いていた。彼は右手に旅行鞆を握り、濡らさないよう傘を傾けていた。三木は彼らの数歩後ろを付いて行く形で彼らを見ていた。二人はぽつぽつと何かを話しているようだが、雨音と道行く人々の足音でよく聞こえない。まだ昼間なのに空が黒い雲に覆われているうえ、雨粒で視界が悪い。

二人はある角に差し掛かるとどちらからともなく話を止めた。曲がると目の前が開け、奥にレンガ造りの立派な駅舎が雨にけむる中静かに現れる。

「もう着いてしまったか」

ラッセルが静かに言った。ホールウォードは何も返さず、彼の隣を歩いている。広いロータリーを抜け、ラッセルは扉へ続く石階段を上って傘を閉じる。ホールウォードはその様子を雨が叩く傘の下で見っていた。ラッセルがジャケットの露を払ったところで、ホールウォードが右手の鞆を差し出す。

「すまないね、持たせてしまって」

「良いよ。君はこれから長旅になるだろう？ 体力を今から使うのは悪手だ」

「はは、重かったかい、酷なことをさせたね。なにしろ急な連絡だったものだから、鞆も荷物も選んでいる暇なんて無かったのだよ」

ホールウォードは少し俯いた。

「母君については、心からお悔やみ申し上げる。強く聡明で、素敵な夫人だった。最後の挨拶にすら行けないこの身が恨めしい」

「ありがとう、父や兄にも伝えておくよ」

ラッセルの目元が憂いを帯びる。

「むしろ謝らねばならないのは私の方だ。冷酷なこの町に君をおいて行ってしまうのだからな」

「僕は大丈夫だ、君の心配には及ばない」

ラッセルは何も言わずに一度時間をかけて瞬いた。

「することが山積みだから、きつとすぐには帰れない。手紙を送ろう、屋敷に咲いている花を同封してね」

「それは嬉しいね。何よりも丁重に僕の部屋まで持ってきてもらうよう、パーキンソンに言うておかねば」

ラッセルは悔し気に顔を歪ませ、持ち手を固く握りしめる。そして胸に湧き上がっているらしい感情の爆発に突き動かされて一歩前に出た。

「フィル、本当に」

「ラッセル、時間は大丈夫なのかい？」

三木からホールウォードの顔は見えなかった。ただ無理矢理に被せてきた彼の声に、ラッセルが一瞬たじろいだ後目を伏せ、

「そうだな」

と小さく返したのはよく聞こえていた。ラッセルはいくつか言葉を述べて駅舎へと入っていく。その背中が人影に隠れてしまうまで、ホールウォードはその場にいた。

帰路についているときも、屋敷の戸をくぐってアトリエに入ってから、三木はホールウォードの顔を見ることはできず、細い猫背を見つめ続けていた。イーゼルには変わらず庭の絵が置いてある。ホールウォードは椅子に腰かけてカンバスと向かい合ったが、描き始める素振りはない。少しずつ窓に叩きつける雨が強まっている。夜には嵐になってもおかしくないだろう。ふと扉が開き、パーキンソンが紅茶のカップをお盆に載せて現れた。ホールウォードはわずかに彼の方へ頭を傾けた。

「パーキンソン。君はこの絵をどう思うかな」

脇のテーブルにカップを置いて召使は静かに応えた。

「旦那様、私は色を正しく解しません。御存じでしょう」

「……そうだったね」

風雨の音にさえ掻き消されてしまいそうな声だった。パーキンソンが退出するとホールウォードは背中を丸めて頭を抱えた。雷の轟音の狭間より彼のか細い呻き声が聞こえて来る。

目覚めの兆候が三木をさらいに来るまで、息の詰まる時間は続いた。

起きてまず三木は岸へ連絡を送った。机上に積み重なった教科書を視界に入れないよう努め、化粧を最低限だけ施して、テスト前日など知るかかマンションを飛び出した。岸との待ち合わせは中心街から少し離れた、古い面影を残す小さな喫茶店だった。ベルが慎ましく響く店内に人

はまばらで、店員に待ち合わせだと伝えると角の席に案内された。カフェラテのホットで掌を温めていた岸は労わるような目線を三木にくれる。三木は彼女の向かいにどっかりと座り、腕を組んで突っ伏した。

「もうやだ」

その頭を岸の手が撫でる。

「おつかれーユウ、とりあえず何か頼もう？ ゆっくり聞くからさ」

三木はホットサンドとコンソメスープとカフェラテ、岸は追加でナポリタンを注文した。寡黙なマスターが作る料理はどれも素朴な味わいだ、手作りの温かみを感じられ、三木の疲弊した心を解していく。スープの最後の一口を飲み干して、三木は背もたれに体を預けてゆっくり息をついた。手を合わせた岸がカウンターでコーヒーを淹れていたマスターに美味しかったです、と声をかける。彼女はこの店にしょっちゅう通っているらしく、手を挙げただけのマスターの返事にもどこか親しみが感じられる。

「で、どうしたの？ やばいの見たって言ってたけど」

岸に促されて、三木は話し始めた。ホールウォードの友人であるラッセルが故郷に帰ってしまったこと、彼はホールウォードの唯一の理解者であったこと、サマセット夫人はホールウォードの支援を切る腹積もりで召使も絵には明るくないこと、即ちホールウォードが真正銘独りになってしまったこと。話し終えた頃には三木はすっかりブルーになってしまい、岸も言葉を探しているようだった。

「あの時代にもSNSがあればな……」

三木の呟きに岸が首を傾げる。

「あの人は自分のコミュニティが狭いしたった一つしか無いから、そこに入れてもらえなくなったら終わりの訳でしょ。ならSNSがあれば色んな人たちから見てもらえて、クラウドファンディングとか、あの人が無理しないやり方で援助を貰えるかなって」

「なるほど？」

「まあその分誹謗中傷も今まで以上に見ることになるだろうけど、それはあの人もわかってるだろうし、頑張ってるらしい。一度バズってしまえばこっちのモンでしょ」

カフェラテを口に含む。まろやかな味を舌で楽しんでいると、岸が手の甲で顎を支えながら怪訝な顔をしているのに気が付いた。

「それは、どうなんだろう」

視線で促すと岸はスマホを手を取った。

「それだけすごい絵なら、もしかしたらバズるかもしれないけどさ、そうそう簡単にいくかなって」

「まあ時間はかかるだろうし、運もあるだろうけどさ」

「一度バズっても、それで終わりになっちゃうかもよ」

岸はスマホを渡してきた。ある動画が開かれている。制服姿の女子高生三人がテーマパークの一角でキャッチーな曲に合わせて踊っているものだ。指先まで意識して丁寧な踊っているのか、

簡単に単純な振り付けなのにごとか一等上手な印象を受ける。

「久々に聞いた」

少し前に流行していた音源である。ぼやいた三木に向けて岸が鋭く人差し指を指してくる。

「それ、まだ流行ってから二カ月も経ってない」

「うそ」

「ほんと」

確認すればその動画はたった一か月前に投稿されたものだった。だがもうここしばらくこの楽曲のかかる動画を見た記憶が無い。たかだか三十日程度で使い古されてしまったのか。腕を組んで天井を仰いだ岸が苦い顔をする。

「たとえバズったとしてもさ、すぐ忘れられちゃうわけよ。てことはずっとみんなに見てもらったためにはずっと良いものを作らないといけないじゃん。かといってそれも難しいし。SNSがあったところで、その人が絶対伸び伸びと絵を描けるってことでもないと思う。中々難問だね、この話」

三木は腕を重ねて机に伏せた。何も言えなかったし、思いつかなかった。有効な手段だと思っただが欠点ばかりで自分の単純な思考が情けない。そもそもあの夢の中に現代技術を持ち込むのが無理難題だ。何せ移動手段に馬車を使う時代だ、インターネットのイの字すら生まれているかどうかとも怪しい。三木は額を腕に擦りつけた。だいたいホールウォードが何を目的としているかすらわからないのだ。金を得たいのか、有名になりたいのか、ただ知り合いに認められたいのか、

三木はそれすら知らない。自分の浅慮を恥じるばかりだ。

二人で喰っているとき見かねたマスターが食パンの耳で作ったラスクのチョコレートがけをおまけしてくれた。ラスクは甘すぎないビターな味わいで、二人はすぐに食べきってしまった。

その後しばらくホールウォードの夢は見なかった。毎晩夜遅くまでレポートとテスト対策に追われ、半ば気絶するように寝ていたのが原因かもしれない。次に彼を見たのはテスト最終日、最後のレポートをなんとか仕上げるために岸の家に泊まった日だった。

久々に見たアトリエにはいつもと変わらず長閑な時間が流れていた。夏が近いのか少々室温が高く庭が輝いて見える。部屋の主は不在だったが、代わりに沢山の袋や箱が置かれていた。大きさからみるに恐らくカンバスが入っているのだろう。唯一イーゼルに乘せられている、あの庭の絵であろうカンバスには布がかけられていた。近くには椅子と小さな机が寄せられ、絵の具の入った箱とパレットが置いてある。窓辺の机には空の果物籠とナイフとナプキンが置いてあり、革張りの肘掛椅子も前見たとおりの場所にあった。

ふと壁向こうから乱暴な足音がした。ホールウォードもパーキンソンもそのように歩く人ではない。強盗かと三木が身構えている間に足音は部屋の前までやってきて、そして壊れかねない勢いで扉が開け放たれた。叩きつけるように扉を閉めて顔を両手で覆い隠したのは、息の荒いホールウォードだった。彼は明らかに不安定な状況にあった。背を丸めて顔に爪を立て、四肢は明ら

かに震えている。呼吸は乱れて浅く、か細い声が喉から絞り出されている。指の間から彼の目が見えた。限界まで見開かれており瞳孔が動き続けている。何かを睨みつけているようで、何も見えていないだろう。その動きが止まる。こけた頬に指先が引っ掛かりつつも、だらりと腕を脱力させるとゆらりと部屋の中を進み——イーゼルを蹴り飛ばした。

このようなもの！

声にならない悲鳴を上げた三木の脳内にホールウォードの怒号が響く。彼女の動揺など知るはずもなく、続けて椅子が壁まで飛ばされた。

芸術の端くれにもならなかった、駄作ばかりじゃないか！

慄く三木の視線の先で部屋が次々に荒らされていく。物が倒され、蹴り飛ばされ、踏み潰される。ひきつった呼吸音しか聞こえない代わりに、彼の叫びは全て三木の脳に直接轟く。流れ込み続ける絶叫の波によって三木の思考は溺れていき、視覚や聴覚からの情報すら処理できなくなる。頭痛がする。視界が狭まる。意識を手放しそうになる。だがそれを許さない彼の慟哭が三木の意識を引き摺り続ける。

技術もモチーフも全て他人の真似事だ未熟で未来の無い能無しめ僕しか見ていない景色など浅慮の極みどれも誰かが既に描いているものに決まっている今まで僕は何をやってただだ画材と時間を浪費したただいくら金を使った無駄にした絵の具だってカンパスだって安くはないそれなのに僕は何が自分の側にある美しさを表現するだみっともない慢心もいい加減にしろ気持ち悪いお前如きが何を描けるああトマス未来ある憎き我が敵サマセットと他の者共を私から奪ったあ

の小僧やめろふざけたことをのたまうな彼には才能があるお前と違って罰が下ったのだ思いあがったお前に相応しい天罰が有難がれ有難がれ主のお恵みだそうだ全てお前には不釣り合いだったのだなんだこの絵は醜い汚い絵の具の塊め構図も色遣いも筆の使い方も見苦しい見ていられない何故このようなものが存在している芸術の顔をしてカンパスの上に乗っている反吐が出る消えろ消えてくれ目に入れたくもない夫人に見せ続けたなど不敬極まる蠻行極刑に値する僕は何故このようなものを描いたのだ後悔するとわかっていたはずだ何故続けた何故描いた何故違うこの絵は悪くないただ惨めで世間知らずな僕によって生み出されてしまった哀れな作品だ彼らに罪は無い罪は僕にある僕が悪いのだ僕が――

声が止まった。三木の思考が少しずつ論理を取り戻していく。頭痛は未だ治まらないが乱れた息が少しずつ落ち着いてくる。闇に吞まれていた視界に色が戻ってきた。床が目の前に広がったので三木はホールウォードの様子を見ようと視線を上げ、そして絶句した。

部屋は荒れて果てていた。壁に椅子やカンパスの折れた脚がぶつかって傷を作り、絵の具がちこちに転がっている。カンパスを入れていたはずの袋や箱は破かれて中身が出ており、絵はどれも元の状態がわからないほどに切り裂かれていた。ホールウォードは部屋の中央で四つん這いになって一枚のカンパスを見つめている。あの庭の絵だ。右手に握りしめた果物ナイフをそれに突き立てようとしていた。切っ先がカンパスに触れる寸前で正気を取り戻したらしい。肩が大きく上下し、しゃくりあげるような呼吸が静かな部屋に響く。

ぼくは、なにを。

今にも消えてしまいそうな声だった。踵に太腿の付け根を寄せて上体を起こす。煌びやかで暖かな春の庭は傷一つ無く在りし日の昼下がりをたたえていた。ゆっくりとナイフをカンパスから離していく、手元に視線を降ろす。

ああ。

堰をきったように両目からは大粒の涙が溢れ始めた。震える利き手を左手で包み込み、手首を返して親指を外に向ける。天井を仰いだ。

つみをおかしたものに、しゅはばつをおあたえになる。

ふわりと、微笑んだ。

深く考えるまでもなく三木は飛び出していた。

「やめて！」

寸前で彼の手首を掴み、ようやく、三木は自分に腕があったこと、自分の意思で体を動かさせたこと、

「……きみは？」

初めて彼と目が合ったことに気が付いた。

「うあああ！」

飛び起きる。背中を丸めて震える体を抱き、痛いぐらいに早い脈を打つ心臓を押さえる。髪が

乱れるのも気にせず頭を振り、脚で敷布団を掻き回す。開いた口が閉まらず、視界に星が飛んだ。
「侑奈！」

鋭い声がして、体の震えが止む。見れば岸が三木の肩を抱いていた。叫び声を聞いてベッドから降りて来たのだろう。滅多に見ない焦った表情に、このような顔もするのかとどこか他人事に考える。岸は三木が少し落ち着いたのを見て息をつくと、毛布で三木をくるんだ。

「お湯持ってくるよ」

岸はリモコンで明かりをつけ、キッチンへ向かう。三木はべたべたと間拔けな足音と、水の入ったやかんが火にかけられる音をぼんやり聞いていた。ベッドに擦り寄って木枠にもたれ、毛布を撫でて待つ。しばらくして湯気の立つマグカップを二つ持ってきた岸から一つ受け取り、二人並んで指先を温めた。

先に口を開いたのはまた岸だった。

「なにがあったの？」

三木は答えようとしたが声が出るあと少しのところで喉が引きつる。首に手を当てた三木の背中を岸が撫でる。

「無理に言わなくていいよ、ありがとう」

三木は情けなくて泣きたくなった。お湯を飲んだのどを潤しつつなんとか堪える。

「とりかえしのつかないことになった」

ようやく絞り出した声は随分と舌足らずだった。

「なんとかしたけど、起きちゃったから、あの後どうなってるかわかんない、どうにかしたいけど」

声が震える。目が熱い。やるせなさで心が宙に放り出され震えている。だが駄目だ、とこめかみに力を入れる。今負けたら、きっと立ち直れないような気がした。だが、

「でも」

頭ではわかっていても、心が付いて行けなかった。耐えたところで何も無いのだから。

「もうどうしようもない。終わっちゃった、起きちゃった。次いつ見られるかわかんない。二度と見られないかもしれない。それはやだ。でも、会いたくない。どうなったか見たくない。もしあの人が」

あの人の握ったナイフが、そのまま、止まっていなかったら。

「ユウ」

岸の腕が三木を毛布ごと包む。

「ねえユウ、まだ終わってなんかいないよ、どうしようもあるよ」

意図をとりかねて三木は岸の顔を見た。岸は瞳に優しくも確かな光を宿して、諭すように続けた。

「夢はまだ終わってない。また見られるよ」

「……どうして？」

問うと岸は微笑んで、スマホの画面を見せて来た。三時半だ。

「まだ夜は終わってないもん」

目から鱗が落ちるとはこのことを言うらしい。三木は思い出していた。いつもあの夢から覚めるとき、決まって同じ工程を踏む。意識がぼやけて視界に靄がかかり、アラームの音が三木を迎えに来る。だが先程はそのどれも無かった。まだ目覚めるときではなかった、まだ夢は続いているのだ。光が見えた気がした。

「大丈夫そうだね。寝よっか、ユウ」

岸がベッドに戻る。三木も毛布を敷きなおし、体を横たえた。リモコンを手にとった岸を見る。声はもう震えていなかった。

「ありがとう、行ってくるよ、おやすみ」

「どいたま。おやすみ！」

目を閉じる。意識を研ぎ澄ませば眠気が沁み込み始め、深くへと沈んでいく。何も聞こえなくなり、布団の肌触りや重力すら遠のいていく。暗闇を漂った果てで、気が付くと三木はあのアトリエに立っていた。

暖かい風が部屋を巡り、どこかで鳥が鳴いている。アトリエは庭の絵とイーゼルを残して他は片づけられていた。自分の意思で首を回す。ホールウォードは肘掛椅子に深く座り、窓の外を見ていた。

「ホールウォードさん」

確証は無かった。だが必ず届くと思った。そしてその通り、彼は弾かれるようにこちらを向き、

しっかりと目が合った。

「きみ、は、さきほどの」

「三木侑奈です。初めまして」

頭を下げると、慌ててホールウォードが立ち上がって胸に手を当て、少々ぎこちない仕草でお辞儀する。

「フィリップ・ホールウォードです。ミスユーナ」

顔を上げた彼は口ごもっていたが、やがて意を決して口を開いた。

「貴女はずっと僕を見ておられたので？」

三木は頷いた。

「そうだったのですか。すみません。全く気づけず、今だって薄汚いこの部屋でまともにもてなせていない。僕は家事などからっきしですし、召使も買い出しに行っていますから」

「良いですよ、大丈夫です」

ホールウォードが俯き申し訳なさそうにしているのを見て、三木は泣きそうになるのを必死にこらえていた。彼の首元に傷は無く、疲れてはいるが確かに生きている。三木は間に合ったのだ。

「貴方が無事なら、それで良いんです」

ホールウォードは一瞬狼狽えた後、目を伏せた。

「本当に、貴女には助けられました」

ゆっくりとイーゼルに歩み寄り、カンバスの縁に触れる。

「更なる無礼を承知で、僕を見てくださっていた貴女にお聞きしたいことがあります」

一つ深呼吸して、真剣な眼差しを三木に向けた。

「僕は、次何を描けばよろしいでしょうか」

「……はい？」

「新しいパトロンを見つけねばならず、そのために新作を売ろうと考えています。どのような絵ならば、貴女はお気に召しますか」

三木は今すぐ彼の顔をひっぱたきたくなった。

「まだ、描くんですか」

「描きますとも。人生のほとんどを絵に捧げたからなのか、どうも画家でない僕など僕ではない気がするのです」

迷いのない口調だった。きっと三木がどう返してもそれに従って新作を描くだろう。それこそ三木は許せなかった。

飛びつくように机の引き出しを開け、戸惑うホールウォードの声を無視して中を漁る。三木の記憶していたとおり、一枚の絵葉書を見つけた。裏面にはあの夜の海がある。紺の波は穏やかで、黒雲の隙間からはおに光る三日月が見える。緩やかな風に混じって潮が香る気がした。暖かくはないが決して寂しくはない、誰かの悲しみを見て見ぬふりするような、一目惚れした海がそこにあった。やはりこれでなければ、と三木は思った。振り返り、困惑しているホールウォードに押し付ける。

「私はこの絵が好きです」

反論の隙は与えない。すかさず続けた。

「この絵を描いているときの貴方が、楽しそうだったからです！」

心の底から憤った。他人に流されず、好きなことを心から楽しむことの、一体何が悪いのだ。

残響が聞こえる。ホールウォードは目を丸くしてかたまった。震える瞳が三木から絵葉書に視線を移す。

「……これを、覚えていてくださったのですか」

掠れた声で呟いた瞬間、目元が歪む。絵葉書を額に当てて顔を隠し、肩を震わせる。隙間から見える唇が噛み締められた。

「……ああ、嬉しいなあ」

まるで心から幸せだと言うような震えた声だった。

三木はハッとした。彼の望みはこれだったのだ。金でも名声でもない、ただ誰かの記憶に残りたい。あまりにも愚かで、だがどうしようもなく人間らしい。心が締め付けられ、目頭が熱くなる。

しばしの後、落ち着いたのかホールウォードは目元を指先で拭う。

「しばらく絵は描かないでおきます。自分を探しなおさなければ。ああ、折角ですし旅にでも行きましょか」

その表情は先程よりいくばくか明るい。

「それと、ラッセルに手紙を送ろうと思います。折角送ってくれたのに、返事をできていない。……彼も僕と同じで、寂しい男ですから」

三木は何も言わずに微笑んだ。二人の関係について何も知らないのだから、言葉を送るのは違う気がしたのだ。

花瓶を探しに行くと言うので三木も付いて行こうとしたが、能わなかった。強烈な眩暈がして足元がふらついた。何とか踏ん張るも視界が急激に白み始める。終わりの予兆に焦っていると、異変に気が付いたらしいホールウォードが駆け寄ってくる。何かを喋っているが、悲しいことに何も聞こえない。まだ別れたくない、三木は彼の顔を見つめた。その表情にホールウォードも別れを悟ったのか、次第に何も言わなくなった。輪郭が解け、視界が白に塗りつぶされていく。遠くからアラームの音がやってきた。目覚めに抗えずにいと、不意に手に温もりを感じた。乾燥していて、悲しい程に優しい手だった。

意識が浮上しきる直前、柔らかな声が聞こえた。

「本当にありがとうございます、ミスユーナ。貴女に主の御加護があらんことを」

澄んだ目覚めだった。冷えた空気に朝の光が混じる。三木は布団の上で上体を起こし、しばらくぼうつとしていた。

アトリエの風景を思い出す。暖かい春の日、柔らかな色の壁紙、眩しい花々が咲き誇る庭、美

しいカンバス、暗い海を閉じ込めた絵葉書、最後に三木の手を握ってくれた、優しい彼の手。

「……あ」

夢は覚めてしまった。もう彼には会えない。理解した瞬間心に虚ろな穴が開き、じんじんと鈍く痛む。視界が大きく歪み、頬から顎に何かが伝う。パジャマの襟元が冷たいのに気が付いてようやく、三木は自分が泣いているのだと知った。

しかめっ面で布団から這い出て来た岸が慌てて三木のもとへやってくる。心配してくれる彼女を見て、三木は大丈夫だと首を振った。確かに虚ろは痛むが、決して苦しくはなかった。彼の手の温もりと声が確かに記憶に残っている。それだけで乗り越えられる気がした。ちゃんと伝えられたのだから、後悔は少しも無かった。だから三木は

「私、来年テニス部入る」

と岸に笑いかけた。岸は一瞬目を見開いたが、すぐに目尻を下げ、

「楽しんで、きつとうまくいくよ」

とかたく三木を抱き締めた。

「おー酔ってるねえ。大丈夫だよ、卒部しても会いに行くから。また試合しようよ。

え、入った理由？ いきなりだなあ。そうだな……楽しいことは続けるべきだって教えてくれた人がいるから、かな。私色々あってテニス一回やめたんだけど、毎日なんだか空っぽで。そん

なときに、その人画家なんだけど、『絵を描かない自分なんて自分じゃないから、描くんだ』って言うて。ああ私、テニスが無いから空っぽだったんだなって思った。だから入った、テニスが大好きだから。

その人とは多分もう会えないし、本当に生きていたのか……じゃなくて、今も生きているのかもわかんないけど、でも、私があの人を忘れなければ、覚えていれば、あの中ですぐに甦るし、あの子の努力は報われるんじゃないかなって思うんだ。……あ、えっと、だから、みんなにもここで忘れられない楽しい思い出を作ってほしいってこと。ほら、乾杯！」

(文学部コミュニケーション情報学科二年)

一枚目のキャンバスの魔法

江頭 扶実子

小さなこの町にも、大きな図書館がある。古い木造の建物の中にはあらゆる本の香りが充満している。ここには新しい本はほとんど並んでいない。でも、誰もが名前を一度は聞いたことがあるような有名な作家の作品から、知らない言語で書かれた古い本までがぎっしりと詰まった歴史の深い図書館なのだ。この町の読書愛好家たちが絶え間なく通い続ける、宝のような場所である。初めて来たのは五歳の時。まだ文字などろくに読めず、絵本の絵だけをじっと眺めているような、そんな読書だった。でも畳敷きの児童書コーナーで仰向けに寝転がって絵本を開くと、その先には高い天井が見えて、遙かな空間に世界が広がっていくような気がした。ここでは、皆そうやって自分の時間と世界を持って過ごしている。誰にも邪魔されない。生まれつき耳の不自由な僕にとって、この図書館は最高の居場所だったのだ。いつか、背の高い本棚に並んでいる本が読めますように。そう夢見ながら、多くの時間をここで過ごした。

それから十回目の春を迎えた。今ではどんな本も手が届く。僕の世界では目に入るものが全てだ。でもこの図書館の中では目で見える世界だけでなく、聞くことの無い音の世界さえも手に入れた気分になった。この耳が音を拾ってくれたら、と思ったことは何度もあったが、本さえあれば、その気持ちを忘れることができた。昨日までは推理小説を読んでいた。シリーズもので長編だったけれど、あまりの面白さに惹き込まれてあっという間に読み終えてしまった。次は何を読もうか。この作者の他の作品を読んでみようかな。そう思いながら、本棚と本棚の間をゆっくりと歩いて行った。世界の名作が並んだその先には、あの懐かしい児童書コーナーがある。改めて見ると、そこまで高い天井ではなかったのだが、それでも広々としたスペースは落ち着いて本を読むための雰囲気が整っている。今では幼稚園生くらいの子どもが母親と一緒に絵本を読んでいるのをたまに見るくらいで、それほど使われていない。ほんの少し寂しくもあるが、この町の小ささでは至って普通のことなのかもしれない。

えも言われぬ気持ちになりながら、僕は目についた一冊を手にした。小説ではなく、画集だった。見開きページに一作品ずつ載っていて、制作年代やら背景やらが事細かに書いてある。絵は好きだ。目で鑑賞できるものの一つだからである。色鮮やかな人の心を映した絵画に見惚れて、その場に立ったままページを捲った。その時、横に人が来ていることさえも気づかなかった。急に肩をつつかれて、現実を引き戻された。顔を上げると、自分と同じくらいの年齢の少女がいた。何かを僕に訴えようとしている。多くの言葉を発しているようには見えなかったが、短い言葉をいくつか言っている様子だ。困ったことに口の動きも読み取れなかったため、僕は自分の耳を指

さした。そして持っていた本を脇に挟み、両手でバツ印を作った。その子は、はっとした顔をした。一瞬にして、「どうしよう」という表情になったのが分かった。こんな時のために僕は手帳を持ち歩いている。ポケットからペンと一緒に取り出して渡した。大抵の人はこれでコミュニケーションをとってくれる。しかし彼女は、受け取りはしたものの何も書くこうとせず、ますます難しい顔をした。少し考える様子を見せた後、周りを見渡した。「あっ」と視線を止めた先は、大きな地球儀であった。この図書館の真ん中にある地球儀。それがどうしたのだろう。そう思っていたら、彼女が僕の手を取りそちらの方向に引っ張っていった。訳の分からないまま、彼女が地球儀を回すのを見ていた。するとその子は僕の目を真っ直ぐ見て、右手の人差し指を胸の方に向けたあと、その指を地球儀の一点に止めた。それは、彼女が中国から来た人間であることを意味していた。外国人が珍しいというわけでもないが、同世代の子に出会ったのは初めてだ。話しかけてきた時、何か困っていたようだからできることなら手を貸したかったのだが、あまりにも言葉の壁が大きかった。今まで中国語など一度も触れたことがない。ましてやこの耳である。情けないほどに何もできないのである。僕がぐずぐずしていると、しばし悩んでいた少女がさっき渡した手帳の空いたスペースに何やら書き込んでいた。返されたそれを見ると、英語で「絵本」と書かれていた。ああ、この子は絵本のコーナーに行きたかったのか。僕は片手で丸サインを示した。伝わったよ、と言いたかった。そこでやっと僕たちは笑い合うことができた。

絵本がずらりと並んだ本棚の前に連れていくと、ありがとう、とジェスチャーで伝えてくれた。じっくりと眺めた後、彼女は一冊の絵本を手にとった。誰もが知っている、あの猫の話だ。子供

の頃に読んだが、なぜかその頃よりも今の方がその本の良さを理解できるような気がする。あの猫の死が、不思議なほどに生と彼自身の愛を感じさせる。それに気づけたのは僕が成長したからだろうか。彼女はべらべらと中身を見た。ふいに顔を上げ、時計を確認すると焦ったように本を元の場所に戻した。もう帰らなきゃと言っているようだった。僕はうなずいて、出入り口の方を指さした。ごめんね、というような素振りですぐに彼女は急いで帰っていった。少しだけのみ出した絵本を見て、なんだかシンデレラみたいな去り方だな、と思ってしまった。

僕も帰ろう。明日から中学校最後の一年が始まる。ほんの少し憂鬱で、平穏な一年が繰り返されるのだろう。

この学校で僕に関わってくれるのは先生だけだ。普段教室ではなく、別室で勉強をしている僕には友人はいない。行事などには同級生と混ざって参加することはあるものの、それ以外での関わりは自ら避けてきた。かといって誰かが僕にあからさまな嫌がらせをするということもなかった。仮に悪口を言っていたとしても、どうせ僕の耳には届かないから気にもならない。一人で勉強したり一人で楽しんだりするのに慣れてしまったから、今更寂しいという思いもない。本を読んでもいれば、僕の望む世界はそこにある。

唯一手話を使える先生が話しかけに来てくれた。

——今日は転校生が来るのよ。

転校生か。どんな子だろう。転校生という響きは物語を秘めている感じがして、少し気になる。とはいえ、どうせ関わることはほとんどないだろう。なにせ僕のことだから。

——実はね、まだ日本語があまり出来ない子なのよ。中国から来たんですって。

えっ、という顔をした僕を見て先生はにこりと笑った。

——しばらくはこの教室で勉強することになりそうなの。顔を合わせることも増えると思うけど、無理に関わる必要はないわ。

せわしく動く手をぼんやりと見つめながら、僕の意識は昨日の記憶を辿っていた。ひょっとして、という思いがどんどん押し寄せてくる。そんなにたくさんさんの中国人がいるとは思えない。

——始業式の後、クラスで自己紹介を終えたらたぶんここに来るからね。

心臓がドキドキした。一つに結んだ髪の毛を揺らして走った後姿が頭から離れなかった。

始業式の間、僕はずっと教室にいた。集会の時、体育館に行くことはほとんどない。何を言っているかあまり分からないし、話のたびに手話を要求するのも気が引けて行かなくなってしまう。あと、正直に言うとするなら、集会そのものが好きではない。人が集まるところに行くとはなく「耳が聞こえない人だ」という視線を感じてしまう。嫌というわけでもないのだが、居心地は良いものではない。ただじっと待つ時間の方がいいと判断したのだ。だけど今日は違う。こんなに胸が高鳴る三十分がこれまであっただろうか。「もしかしたらあの子にまた会えるかも」という考えはすぐに確信に変わっていた。なぜここまで嬉しいのか、自分にはわからなかった。ただどこかで、また会いたいと願っていたんだと思う。あと十分。また会えたら、仲良くできる気がしていた。僕は耳が聞こえない。彼女は日本語が十分に話せない。壁は二重だ。それでもなぜか、そっちの方がいい気がする。あと五分。時計の秒針は丁寧にめもりを一つずつ指している。

後ろの方に人の気配を感じた。はっとして振り返ると、先生の隣に佇んだ少女の姿があった。間違いない。それは紛れもなく図書館で出会った彼女だった。高い位置で結んだ髪の毛に、セーラー服がやけに似合っていた。緊張した面持ちで、うつむき加減に立っていてなかなか目を合わせてくれないので、きっと僕だと気づいていないだろう。僕は立ち上がって二人の方に向かった。そこで初めて、彼女は僕を認識してくれたようだった。あ、と小さく口を開き、そのまま微笑いた。同じように僕の口角も上がっていた。先生が不思議そうに僕たちの顔を見比べた。

——知り合いなの？

昨日たまたま知り合ったんです。あまり、お互いのことは知らないけれど。そう説明すると、先生は、ふーんという表情をした。多分そのまま口に出して言っていそうだ。そして、友達？と先生が聞いているのが分かった。彼女は少し考えて「まだ」と言った。簡単な日本語は勉強したんだろうな。全部は分からないけれど、短い会話は成立しているようだ。おもむろに彼女はこちらを真っ直ぐ向いた。

——わたし。

右手の人差し指は胸を指していた。口を大袈裟に動かして、話してくれているのが伝わった。だけど、その後が分からない。一生懸命何かを言おうとしているのに、汲んであげられない自分がかもどかしい。初めて会った時よりも、もっと悔しい気持ちになる。

——リン・ユシン、これがこの子の名前よ。

見かねた先生が助けに入ってくれた。リン・ユシンという名前がなぜか魔法の呪文のように思

えた。何かいいことが起きそうな、そんな空想が湧き出した。先生は僕のことでも紹介してくれた。「なるみ、りつ」と彼女が復唱したのが見えた。僕には聞こえないけれど、くすぐったい気分だ。――しばらく、ここで待っていてくれる？

と言って先生は教室を出ていった。いざ二人きりにされると、どうしたらいいのか分からなくなってしまふ。僕はノートを出した。まだ新しいノートの一ページ目を開き、鉛筆で『鳴海律』と書いてみせる。彼女がそれを指さして「なるみりつ？」と言った。うん、と頷くと彼女は嬉しそうに笑った。そうして近寄ると僕のシャープペンを手に取った。僕の名前の横に書いたのは『林雨欣』という三文字だった。これがリン・ユシンの漢字なのだと気づいた。りんゆしん、りんゆしん、りんゆしん。どんな響きか分からないけれど、この文字を眺めながら何度も心の中で唱えた。

僕たちの教室は同じだったが、授業は互いに別のことをする。僕はいつも通り個別で教えてもらい、それも音のない授業だから同じ空間にいても問題ないようだ。ユシンは日本語を一生懸命勉強していた。僕たちが今やっている数学とか理科とかいう科目は、母国ですでに学習していたみたいで、とりあえずコミュニケーションが大事だという結論に至ったらしい。彼女の語学の習得は早く、この僕から見ても彼女の日本語の世界が広がっていくのが分かった。机に向き合って字を練習していたのはほんの一週間程度で、いつの間にか先生たちと楽しそうに話す姿に変わっていった。元々頭の良い子だったのだなと思った。日に日に顔から不安が消えて、彼女はどんどんこの生活に慣れていく。会話ができると知って話しかけに来る同級生も増えた。ユシンの本来

の性格だろうか、明るく気さくな個性はすぐに学校に馴染んでいった。そんな様子をこっそりと見ていて、僕はほっとしていた。でも彼女が話す言葉を聞けないことだけが、なぜかとても悲しかった。どんな声でどんな風に話しているのだろう。今まで学校で過ごしていてこんな風に思ったことはなかった。

そのうち、ユシンはこの小さな教室を少しずつ飛び出して他の生徒と授業を受けるようになった。音楽や体育の授業に向かっている時、新しくできた友達に囲まれているのを見た。興味津々に話しかける女の子たち、遠くから混ざりたようにユシンを見つめる男の子たち。間違いなくこのクラスを中心になっていた。正直に羨ましい気持ちもある。あの中に自分がいたらと想像しないこともなかった。でも、最初にリン・ユシンと知り合ったのは自分なんだという優越感が、そこまでの嫉妬心を生まなかったのだろうと思う。

それにまだユシンは半分以上の時間は別教室にいる。その分僕とユシンもよい友達になれている。それは僕が絵を描いていたことがきっかけだった。図書館が居場所だった僕は、小さな頃絵本を作るのが夢だった。だからたくさん絵を描いた。絵の中の僕はいつだって自由だった。今はもう絵本作家が現実的な将来ではないと気づいているけど、絵を描くのは好きなままだった。教室でキャンパスに色を塗っていると、ユシンは椅子を持って来てずっと隣で筆の先をじっと見つめているのだ。最初は人に見られながら描くことに慣れていなくて、変に緊張していた。だけど、どの色にするか迷った時なんかは彼女がパレットを指さすので、言われるままに塗ってみた。満足そうな顔をするので僕自身も癖になってしまった。そうしているうちに、いつしか僕が描いた

下絵に、彼女が彩りを加えてくれる日々が続いた。絵の具だけではなく、クレパスやら色鉛筆やらチョークまでも使って出来上がった絵は斬新で、とても綺麗なものになった。今まで僕が作り上げてきた絵とは明らかに違っていて好きだった。

ユシンに彩られる世界が楽しくて、僕は毎日必死になって絵を描いた。好きなものを選んでいいよと言いながら、本音は全て彼女の物にしてもいいと思っていた。

次は何を描こうかと思っていた時ふと、初めて会った日、彼女が手に取った本を思い出した。猫の絵でも描いてみるか。結末は決まってしまうているけれど、あと少しあの猫が生きたらなら、どんな終わりを迎えていたのだろう。もっと美しい世界を見ることができていたのだろうか。そんな思いを巡らせながら、二匹の猫のシルエットを画用紙の中央に寄り添わせた。きつとあの猫はポーカーフェイスだ。幸せな時間を何でもないというような顔をして、身体の中で幸せを噛みしめている。そんなイメージがあった。そんな猫がその時間を幸せな顔をした瞬間を描いてみたいと思った。でもそんな彼を描いてしまうのも身勝手な気がする。考え尽くして僕は鉛筆を動かした。もしユシンがこの絵に色を足すならばどんな景色になるのだろう。

次の日も彼女は手際よく絵の具の準備を始めた。いつの間にか筆の本数が増えていて、僕のパレットは彼女の使った跡が残っている。白いパレットにある色はどれも絵の具チューブにはないものばかりだ。一通りの準備を終えると、次は塗る絵を選ぶ。僕が作りたいいくつかの絵から、その時の気分次第で選んでいるようだ。選んでほしい絵は一番下に置いた。だけどユシンはあっという間にその猫を見つけた。宝物でも見つけたみたいで顔で画用紙をそっと撫でた。

「これ、本のねこでしょ？」

簡単に見透かされた正解を、筆談用のノートに書かれた。僕が笑うと、不思議そうに絵を見つめた。

「なぜ二人は後ろを見ているの？」

僕が描いたのはたぐさんの花に囲まれた後ろ姿の猫たちなのだ。彼が何よりも幸せに感じている瞬間を描きたかったんだと伝えた。首を傾げたまま肯いた。今まで絵の意図なんて聞かれたことがなかった。でもこの絵は僕にとっても、そしておそらく彼女にとっても思い入れのある作品になるに違いないと感じていた。

これまでにないくらいユシンはその絵に時間をかけていた。普段早いものだと一日で仕上げてしまったり、長くても三日程度あれば満足のいく作品ができたりするようだった。気づけばこの小さな教室の空きスペースは僕たちの合作だらけなのだ。学校らしく整理された空間の中で、一生懸命画用紙に向き合う姿を見つめていた。

一週間以上をかけて彩色された絵は、それは幻想的な一枚になった。出来上がる前に僕が予想していたものと違うことと言えば、それが夜の風景になっていったことだった。しかし暗い空ではなく、深く美しい青さに光り輝く星が散りばめられていた。二匹を取り巻く花は僕が描いたものよりも数が増えて咲き乱れている。見たことの無い花たちは色鮮やかに揺れているような錯覚を起こした。猫は頭を寄せながら、夜空の奥にある、なにか温かい光を見つめているようだった。全てがその光に包まれていて、彼らの柔らかな毛並みさえもそこにあるように見えた。この小さ

な画用紙の中に果てしなく広い空間があった。思わず、言葉もなく呆然と見惚れていた。自分が描いた絵だとはとても思えなかった。どんな絵も美しく彩ってくれるユシンの才能にはずっと敬服していたが、今回は心の底から言い表せない気持ち湧き出してきた。

何も言わない僕を見て心配になったのか、ユシンが顔を覗き込んだ瞬間に我に返った。こんな時に、すぐに思いを伝えられないのが腹立たしい。いや、もはや伝わるのか伝わらないのかは関係ない。真っ直ぐには届かない僕の声は、今はまだ君にこの手段でしか届けられないのだから。思いつく限りの言葉を書き連ねた。まるで魔法だ。君が描き出すものは、ただの美しさだけじゃない。それ以上の物語があるんだ。少なくとも僕はこの絵に感動したんだ。やはり君の世界はすごいよ。荒い字はユシンにとってはとても読みづらいものだったに違いない。だけど、伝えなければという思いでひたすら手帳に殴り書いた。僕が褒めていることは伝わっていた。それだけで十分だった。照れ臭そうにありがとう、と目を合わせて僕の止まらない鉛筆を取り上げた。

「もうやめてよ」

今度は目を逸らした彼女の頬は紅くなっていた。そんなユシンを見て、なぜか僕まで恥ずかしくなってしまった。僕の胸の中でも、ユシンが描いたような花が一輪咲き始めた。

土曜日は図書館に行った。あの絵を見て以来、無性に絵本を読みたくなったのだ。絵本の棚はいつも同じ表情で出迎えてくれる。そこに探していた本もあった。迷わずそれを手に取り、畳の上に寝転がった。こうして読むのはいつぶりだろう。いつしか児童書なんて読まなくなっていて、この天井の広さも忘れかけていた。絵本を開くと、懐かしい記憶も引き出される。一ページ見開

くたびに猫の命も辿られていく。この猫が生きた百万通りの命。その全てを知りたくなる。百万回も生きていれば幸せだと感じた瞬間は何度かあったのではないか、とも思った。たくさん人間に愛された経験もあったはずだ。でも、やはり自身の愛を知った彼にとって、あの一度の生涯を超えるものは無かったのだろう。絵本はあつという間に最後のページを迎えてしまう。僕は何度何度も繰り返し読んだ。読んでいてなぜか結末の彼の死を、どこかほっとした気持ちで読んでいることを悟った。何をしてどこにいても無意味だった生涯を、やっと意味あるものに、彼自身の行動で変えることができたのだ。

僕の一生は百万回もない。十五年しか使われていない僕の人生は、振り返れば猫の一回目ほどもない。自分を立派だと思ったことも、好きだと思ったこともない。自分の限界を決めて人と関わるのを避けてきたから、誰かを憎むほどに心が傷ついた経験もない。最後の彼の命のように、僕の生き様も変わるかな。愛なんて本の中だけでしか知らないけれど、別れが辛くなるほど愛せる存在ができるだろうか。

ユシンの絵のように、光だけを見つめて寄り添えるものがあるだろうか。

遠回りがしたくなって電車に乗った。住んでいる町を一望できるところまで来ると海が見える。風にあたって遠い海岸を眺めていると、そこに行けば新しい自分を見つけられるのではないかと考えが浮かんでみたりもする。太陽が西に傾いてじりじりと顔を照らす。この町は今年も暑い。まだ僕の人生に当たる光は優しくはないようだ。

来た道を引き返して家の近くの駅のホームに降り立った時に疲れが出た。たくさん歩いてたく

さん考えたから、心も身体もヘトヘトだ。ゆっくり歩いていると後ろから早歩きで僕を追い越していった人と肩がぶつかってしまった。気配に気づけない僕は、こういう時に咄嗟に動けない。いつまでもホームにいると自分だけでなく誰かを怪我させてしまう可能性がある。すみません、という気持ちで頭を深く下げて、足早にその場を去ろうとした。すると強い力で腕を掴まれた。たった今ぶつかった男性が不快そうな表情をしてこちらを見ていた。怒って何かを叫んでいる。突然のことで気が動転した僕は、相手が何を言っているかを読み取る前に頭が真っ白になってしまった。心臓が激しく暴れて、冷や汗が噴出した。誰か助けてもらえないだろうかと周りを見渡しても、皆怪訝な顔をして見ているだけだ。何度も頭を下げて謝っても、相手の男の人は手をなかなか離してくれなかった。その時、反対側の手を掴まれた。振り向くとそれはリン・ユシンだった。強い視線で睨みながら男性に立ち向かっていった。その勢いに相手も少し驚いたようだった。何が起きているのか理解ができないでいると、駅員さんが飛んできた。ものの数十秒で事態は落ち着いた。駅員さんに窘められた男性は、気まずそうな顔で駅の階段を下りて行った。僕たちは二人でその駅員さんにお礼を言い、駅を後にした。

しばらく経っても僕の心拍は速いままだったし、ユシンは怒ったままだった。掴まれたままの左手首を少し動かすと、彼女はようやく僕の方を見た。その時には目から怒りは消えていた。

「ごめんね」

と謝るとユシンは首を振った。胸元に手を当て、「私も、ごめん」と言っているのが見えた。あの人は何を言っていたのか尋ねると、ユシンは笑いながらこう書いてくれた。

「言葉が速くてわからなかった。私も中国語で怒った」

思わず二人で噴き出して笑った。僕たちはどっちもあの人が何て言っていたのか分からなかったんだ。きっとどれだけ酷い言葉を言われていたとしても、その言葉は僕たち二人には意味を成さない。お腹を抱えて笑っていたらさっきまでの恐怖はどこかに行ってしまった。こんなに笑ったのは、僕は人生で初めてのことだった。柔らかな西日が、僕たちの影を長く伸ばしていた。

憂鬱ではない月曜日が来た。晴れた空を見上げていると、先生が僕の顔をまじまじと見た。

——どうしたの？ とてもいい顔をしているけれど、嬉しいことでもあった？

そんな顔をしているつもりはなくて、思わず頬を押さえた。

——ユシンと絵を描いているでしょう。あれとても素敵だわ。みんなの教室にも一枚飾ってもいいかしら。

思ってもない提案だった。二人で作ったものは、いつも二人で見ても満足するだけだったから。

——ユシンがいいというならば、僕は構いませんよ。

——わかったわ。飾るとしたらどれがいいかしらね。

先生は僕たちのこれまでの絵を一枚一枚丁寧に扱ってくれた。手を止めたのは、猫の絵だった。やはりその絵だけは他とは違う空気を放っている。きっと誰であってもその絵の前で足を止めるに違いない。

——それはユシンが一番時間をかけたものなんです。僕もお気に入りの絵です。

先生は深く頷いた。絵の中の星が光って先生の瞳の中にも吸い込まれていった。目が離せなく

なる気持ちは僕がよく知っている。

ユシンに了承を得られたその絵は、大事に額に入れられ、学級の一角に展示された。早朝の誰も来ていない教室で、ユシンは「あの絵があると偉も教室にいてくれるような気がする」と言った。絵のほとんどは彼女が完成させたものだと思っていたけれど、僕もその一部なのだと言われたようで嬉しかった。「この猫たちが本当に幸せで、愛をたくさんもらえる猫になれるかな」そんなことを言っていた彼女はガラス越しに絵を撫でた。

教室の扉が開き、何人かのクラスメートがぞろぞろと入ってきた。僕が珍しくこの教室にいることに驚いている様子だった。でもすぐさま皆の視線は一点に注がれる。指をさし思わず笑顔になる人もいた。あつという間にユシンは輪の中心となった。僕が教室を半分出かけた時、その場の全員の目は僕に向いていた。それはユシンに向けられるものとは少し違って、誰もが困った顔をしている。いつもと変わらないのは彼女だけだ。僕は思わず愛想笑いをした。それに釣られて周りも同じ反応になる。誰も何も言えず、重たい空気がこの教室を覆っていく。仕方がない。だって僕たちはこれまで、いや、僕が彼らとコミュニケーションを取ろうとしてこなかったのだ。だからどんな風に関わっていいのか、みんなが分からないのだ。

そんな僕らを知ってか知らずか、ユシンは僕を見ると左の口角を上げて親指を立てた。送られたグッドサインに、僕もつい顔が緩んでサインを返した。その瞬間、他のクラスメートも次々にサムズアップのポーズに変わっていた。なぜだか鼻の奥がツンとして、慌てて教室を出た。僕はいつまでも自分の親指を見つめていた。廊下で僕のにやけた顔を見た誰かは、きっと今頃教室で

絵に見惚れているんだろう。

それからというもの、ユシンと一緒に僕に話しかけてくれる友達が少しずつ増えた。ユシンのように筆談で話してくれる人、口の動きだけで会話をしようと頑張ってくれるお調子者、緊張した面持ちで手話を覚えて来てくれる学級委員長。この三年間で想像もしていなかった日々が訪れていた。あれだけ一人を好んでいた自分だったのに、誰かと話す毎日が当たり前になっていった。好きで選んでいると感じていたことは、勝手に自分で決めつけていたことだったのだと気づいた。長いはずの夏も、ものすごいスピードで終わりを迎えようとしていた。

金木犀の香りが、冷たい風に運ばれてくる季節になった。相変わらず僕たちは好きな絵を描き続けていた。町中の木々が色を変えていたから、風景を写すことに夢中になっていた。時には外に椅子と机を運び出して、黄金の落ち葉の真ん中で作業をした。二つの机を並べて描いていると、皆が集まってきた。

「その銀杏の木の中にリスも描いてよ」

「キツネが出てきそうな雰囲気だと思った」

クラスメートの言う色んな意見が面白くて、言われたものをどんどん描いていった。僕のキャンパスは次第ににぎやかになる。動物が顔を出し、木には季節の果物が実った。ユシンも前よりさらに楽しんで色を重ねていた。それと同時に僕たちの、皆の教室が、絵に溢れていった。元々僕たちが二人だけで過ごしていた小さな別教室は、小さな美術館のようになった。もちろんそこで僕が勉強するのは変わらないが、多くの友達がここまで足を運んでくれるようになった。

あとわずかな中学校生活だと分かっていたけれど、小さなこの町ではほとんど同じ高校に進学する。だからこんな日々がずっと続くと思っていた。今みたいに同じ時間に学校に来て、顔を合わせてお昼ご飯を食べて、そして僕とユシンは絵を描く。この先も二人の作品はどちらかがやめない限り、誰かが止めない限り、続いていく。クラスメートだけではなく、僕までもがそう信じている。

幸せだ、と不意にそんな思いが胸の奥から芽生えた。その瞬間にどうしようもなく恐怖が僕を襲った。今日の前にある幸せが、百万回目の人生のように感じたのだ。永遠に続くと思われた、ただの日常が、今すぐにでもこの手から離れてしまうのではないか。この教室を出たら絵を見にくれる人がいなくなる。この町を出たら、描きたいと思える風景に出会えなくなる。誰も知らない中で絵を描いていたあの頃の意味のない自分に戻ってしまう。色々な思考がコンマ数秒で駆け巡っていく。考えたくもない一つの考えが脳の奥底で浮かんてしまった。僕が絵を描いても、ユシンがいなかったら。誰にも色を与えられない、未完成の絵が溜まっていく。僕の性格は厄介だ。少しのネガティブな想像が、次の悪い想像を生む。目を閉じて考えるのを止めた。

ユシンが僕を心配そうに見ていた。

「どうしたの？」

そう聞く彼女も、なぜか寂しそうな顔をしている。僕がこんな想像をしているから、そう見えていただけかもしれない。何でもないよ、と首を横に振るが、表情は変わらないままだ。気持ちを隠すつもりはなかったが、僕は今の思いのありのままを彼女に話すことにした。

「こんな毎日が続けばいいなって。今が何より楽しいと思えるんだよ」

それを伝えると、ユシンの目はより一層暗くなった。重く開いた彼女の口が、重要なことを呟いた。傍で聞いていた何人かが一斉にこちらを振り返った。それは、ユシンが間もなく母国に帰らなければならないということだった。卒業式まではいられないのだという。それを知っても、返す言葉は見当たらなかった。いっそ知らない方が良かったのではないかとさえ思った。

ショックを受けたのは僕だけではなかったが、周りを気遣うほどの余裕はない。いつも白黒だったのは僕というキャンパスだったのだ。僕が彼女のために一心不乱に絵を描いていたのは、ユシンが僕の人生をも彩ってくれていたからなのだ。鳴海律の絵を楽しんでくれていると自惚れながら、僕と彼女で一つの絵になると思い上がりながら、本当は音のないこの世界を林雨欣という色に染めて欲しかったのだ。

僕は絵を描くのをやめた。当然、ユシンが絵の具の筆を持つこともなくなった。クラスメートはユシンとの最後の思い出作りに、手紙を書いたり、遊びに出かけたりした。その全てから、僕は向き合うのを恐れた。ユシンとの別れに関するものから目を背けた。僕はまた別教室に一人になった。

学校にいるのも辛くなり、僕は図書館に向かうようになった。読んでいなかった本を借りて帰ろう。最近は絵ばかり描いていて、読書ができていなかった。気分転換にシリーズものでも読んだら少しは気が晴れるだろうか。ぐるぐると小説の本棚の周りを歩き回ったが、どんな背表紙も目に入らなかった。児童書コーナーの前を通ると、いつもは目が合うはずの猫の姿が見当たらない

かった。誰かが借りてしまったのだろうか。別に、僕には関係のないことだが、と氣を取り直して歩いていると大きな地球儀が見えた。その横の人影にはっと歩みを止めた。『一〇〇万回生きたねこ』を持ち、地球儀を眺めているのは紛れもなくユシンだった。その横顔を見ていると、とても長い間会っていなかったかのような気持ちになった。僕に気づいたユシンはまっすぐ歩いてきた。何を言われるのだろう。あの日みたいに怒っているのだろうか。どうせ僕の耳は聞こえないのだから言いたい放題言ってもらって構わない。だが、彼女は何も言わなかった。僕の手を引いて児童書コーナーの畳の上に座った。そこで絵本を開いて読み始めた。今のユシンならば絵本を読むのはそう難しいことではないだろう。取り残されて変わらないのは自分だけだ。

絵本を読み終えると、彼女はポケットから手帳を出した。僕と話す時に使うものだ。

「中国に帰る時、猫の絵がほしい」

そう一言だけ書かれていた。てっきり質問されると思っていたから、思いがけない言葉にすぐに返事ができないでいた。猫の絵というのは最初に教室に飾った絵のことに違いない。ユシンが試行錯誤して完成させたものだから僕に駄目だという権利はほとんどない。でも、あの絵を失ったと同時にユシンがいなくなることを実感しそうで、内心嫌だと思っ部分もある。

「絵があってもなくても、私は帰らないといけないの。だけど律が描いてくれた絵があれば心強
いから」

こんな言葉に簡単に揺らいでいることを悟られたくなかった。

「絵はあげるよ。でもどうしてその本なの？」そう聞いた。初めて出会った時もその本を探して

いた。この本を好きな人は多いし、世界中で有名な絵本だから、理由もなく気に入っているだけかもしれない。

「この猫が生きた百万回目の一生が、今私が生きたい人生だから」

手帳に書かれた文章を繰り返し読んだ。

「国を行ったり来たりすると、私の場所はどこにもないように思う。でも生きている意味のない一生なんて嫌なの。幸せも、苦しみも全て私の大事な一部。それを忘れたくない」

僕は今初めてユシンのことを知ったのだろう。絵は彼女に持っていてほしいと感じた。持っているべきだと思った。

「僕からも一つお願いがある。また絵を描くから、それも持っていて。色を付けてもいいし、そのままでもいい。次にまた会える日まで」

ユシンは子どもみたいにうんと頷いた。

ユシンとの最後の日はすぐに来た。僕は小ささまざまな紙に白黒の絵を描いて渡した。大事そうにしまうとその目は赤くなっていった。他のクラスメートも思い思いの形で別れを告げていた。きつと皆それぞれの心の中にユシンとの思い出がたくさんある。ユシンは少しでもこの町に来てよかったと、幸せだったと感じたことがあっただろうか。たぶん不安を感じたことの方が多かっただろう。でもあの時走り去る君を見た時から、君の居場所はず僕に必ずあったんだ。ここにいる誰よりも長くて濃い思い出を作ってきた。そんな君と、僕自身を誇りに思う。

笑顔で送り出したはずなのに、僕の顔はぐちゃぐちゃだ。僕らに保証された次はない。ここに

いる全員がそれを知ることになった。いつまでもくよくよと泣いている僕を見かねて先生が何やら持ってきた。

——これは、ユシンにも渡したもののなんだけど、せっかくだからあなたにもあげるわ。

渡されたのは一枚の写真だった。いつだったか、外に皆で集まって絵を描いた秋の日。僕の横に座っているのはユシンだ。後ろ姿しか見えないけれど、楽しそうに描いていたのをはっきりと覚えている。そしてそんな僕たちの周りに集まっているのはクラスメートだ。気持ちよく晴れた秋空と黄色い落ち葉の絨毯のコントラストが美しい一枚だ。

——この風景、まるで二人が描いた絵みたいだわ。ずっと飾ってあった猫の絵。

はっとした。ユシンの魔法はこんなところまで世界を彩っていたのだ。余計に涙が止まらない。でも不思議なことに悲しい感情は少しずつ穏やかになっているのだ。あの絵にもユシンにもしばらくは会えないけれど、次がいつになるかも分からないけれど、彼女のいた足跡は間違いなくここにあった。

あれからさらに十五年程経っただろうか。永遠だと思っていたことは意外にもあっさりと姿を変えていった。僕もあの町を出て都会で一人暮らしをしている。耳は聞こえないままだけれど、不自由なく生活ができるように理解ある人に囲まれて生きている。少しずつ安定して絵の仕事を貰えるようになって、経済的にも余裕のある人生だ。この仕事を始めた頃、他の画家と比べて何か決定的に欠落しているものがあると言われて、努力を認めてもらえない時期があった。たくさ

ん勉強して、人気の画家に添削をお願いしたこともあった。そこで必ず言われていたのが、色の使い方だった。君の絵はとても上手いけれど、色だけは誰かの真似をしようとしている。いっそ塗らずに出してごらん。その一言がきっかけで、下絵だけのような白黒の絵を出すようになった。半分はやけくそだった。すると、なんとそれがとある作家の目に留まり表紙を依頼されるようになった。他にもいくつか大きい仕事を任せてもらえるようになり始めた。

やはり僕の絵を色付けできるのは彼女だけだったのだなあ、と時々思う。僕でさえできないことだ。どのようにしていたのか、聞いておけばよかった。十五年も経ったのに。結局連絡先も全く知らない。手紙のやり取りさえ一度もしなかった。でも、心の中でリン・ユシンの名前を思い浮かべると、十五のユシンが筆を持って魔法をかけてくれているような前向きな気分になる。上手いかわない時のまじないは彼女の名前だ。

今日は大きな仕事の打ち合わせがあり、心身ともに疲れ果てていた。りんゆしん、りんゆしん、りんゆしん。今日も唱えて歩く。よく考えたら人の名前を呪文にするのもどうかと思うが、どうせ口に出して言うことは無いのだからこのくらいは許してほしいと厚かましく考える。体は疲れているけれど、ほんの少し寄り道をしよう。まっすぐ帰る道を右に曲がった。少しだけ遠回りをする、可愛い猫に遭遇したり、空に一番星を見つけたりする確率が高いような気がする。しばらくゆっくり歩いていると、新しい店ができているのに気づいた。よく見ないと店だと分からない人もいるかもしれない。小さい窓から暖色の電灯の光が漏れていて、薄暗い路地をぼんやりと照らしていた。カフェだろうか。コーヒー豆の香りが鼻腔を抜ける。こんなところで絵でも描い

たら仕事が捗りそうだ。今度休日の午前中にでも来てみよう。コーヒー以外にはどんなメニューがあるんだろうか。今日は開店していないようだけど、表から少しだけ様子を見て構わないだろう。

出入り口の扉に近づく、「準備中です」という可愛らしいプレートが下がっている。猫がモチーフの店らしく、あらゆる場所に猫が置いてある。手書きパネルには店が開くのは今週の土曜日からだとなり、すっかり行く気になっていた。小窓を覗くといくつかのテーブルが並んでいて、とても過ごしやすいような空間である。見える範囲で見渡すと、僕の視線はその壁に吸い寄せられた。見覚えのある絵が鮮やかな色を放って飾られていた。忘れるはずもない、色使いだった。

（教育部特別支援教育コース三年）

くたばれ、マイヒーロー

坂田 悠美香

その日、ヒーローは死んだ。

高校生の一真と廉は、元々中学が同じだったこともあり、同じ路線の電車を使っていた。土曜日の夕方、学校近くの駅にたまたま用事があった一真は、帰路につく電車に乗るとほぼ同時に廉を見つけた。廉は一番端っこの席に座り、余所行きの服装でスマホをいじっていた。この駅よりもう少し前にはもっと大きな街がある。おそらくそこに遊びに行き、その街の最寄り駅から乗っていたのだろう。車内は少し混んでいて、満員というわけではないが座れる席はなかった。

なんとなく話しかける気にはなれず、一真は少し離れたドアの近くに立った。ちょうど廉の様子がぎりぎり見える位置。話しかけたくないなら、あちらから気づかれないようにもっと離れればいいのに、それもしたくなって、変な気分だった。気づきたくはないけど気づいてはほしかったのかもしれない。

普段の一真なら電車内はスマホを見る時間にするのだが、今日はスマホよりも廉の隣で手すり

に掴まり立っている老人に目がいった。電車が揺れるたびにふらふらとして今にも転倒してしまいそうな老人の姿は、確実に廉の視界にも入っているはずなのだが、しかし廉はスマホから一切顔を上げなかった。

そんな廉を見て、一真はひどく失望した。同時に、ひどく嬉しかった。
ふーん。

廉もそういうこと、するんだ。

一真はようやくスマホを取り出して、シャッター音が鳴らないカメラアプリを起動した。そして、カメラを廉のほうに向け、老人の姿までフレーム内におさまる角度で一枚だけ撮影した。

画質はよくないが、若者が老人を無視して座っている様子であるというのは分かる写真。喉までじわじわとせり上がってくる感情に、一真は口元を緩ませた。

そして仄暗い考えが一つ、一真の頭をよぎった。

*

「次、教室ここだって」

朝、ギリギリで席についた一真に隣の席の遠藤が声をかけてきた。

言葉が少なすぎて理解が少し遅れたが、時間割を見て納得した。いつもは理科室に移動して受ける化学の授業が、今日はこのまま教室で行われるということだろう。そういえば今日はテスト返しの日だ。わざわざ教室を移動する意味もない。

「まじ？　ありがと」

「ん」

間髪入れずにチャイムが鳴り、遠藤はそのまま会話を続けることもなく前を向いた。

一真もそのまま座りながら、しかしその視線は出席を取り始めた担任ではなく、斜め左に座っているまっすぐな背中に自然と向けられた。

そして化学の授業中、その背中はトップ3に入る点数を取った人物として呼ばれた。

クラス中から拍手をもらう彼の背中を、一真はより強い眼差しで追った。

彼の名前は白石廉。物語の主人公が現実に入ったら、きっと廉になると一真は思っている。

みんなからの拍手を受けて、ちょっとだけ恥ずかしげに俯きながら答案用紙をもらいにくる廉を見て、一真は自分の六十二点のテストを早々に折りたたんでファイルに入れた。

一真が廉に憧れを抱くようになったのは中学の頃だった。

文化祭の出し物で劇をすることになり、そのシナリオで、ある男子と実行委員の女子が揉めて

いた。男子はきちんとした物語、いわゆる桃太郎だったりシンデレラだったり、元々あるものを劇にすればいいと主張し、女子はオリジナルの恋愛ものをやりたいと主張した。両者は折れることはなく、話し合いは放課後まで伸びた。

一真は正直どっちでもよかった。いつもなら話し合いが終わるまでただ黙っていたと思う。しかし、不運なことにもう一人の実行委員は一真自身だった。

早く部活に行きたいクラスメイトたちが段々苛立ってきていて、「なんでお前は何も言わないんだよ」と思われているのを肌で感じた一真は、おそろおそろ二人に口を出した。

「あのさ、二人の意見を取り入れようよ」

睨み合っていた二人が、眼光の鋭さはそのままにこちらを向いた。

「どっちの意見もいいからさ、たとえば桃太郎が鬼退治したあとに恋愛する話にするとか、そういうのは……」

「その脚本って誰が書くわけ？」

男子のほうが吐き捨てた。その声のトーンに一真が怯むと、男子は続けた。

「既存の物語を丁寧にこなすほうがいいじゃん。毎年先輩たちがオリジナルストーリーやって大スベリしてんのに、なんでわざわざ恥ずかしいことすんの？」

まったくその通りではある、と一真は思ったが、それに女子が反撃した。

「普通の物語を普通にやるほうがつまらないし絶対スベるじゃん、どうせならみんなで一からつくってあげたい。今さら桃太郎とかやって誰がおもしろいと思うわけ？」

一真が提案した桃太郎がさらりと却下されたわけだが、一真はそれに気づかず、それもそうだと納得したが、女子はさらに眼光を鋭くして一真を睨んできた。

「てか、深谷くん実行委員なんだから私の味方してくれてもいいんじゃないの？」

深谷というのは一真の名字だ。思わぬところから攻撃が飛んできて、一真はたじろいだ。

「いや、俺は」

どっちもいいと思っていて、と一真が言おうとしていると、男子が声を張り上げた。控えめな一真の声はかき消された。

「実行委員がなんでもかんでも決めるなら俺らいらんじゃないですかー。勝手に二人でやってろよ」

「なんでそういう言い方するわけ!? 話し合おうとしてるんだからこっちの意見もちゃんと聞いてよ!」

「そっちだってこっちの意見聞いてないだろ、じゃあ台本は誰が書いてどんな風におもしろいと判断するんだよ」

言い過ぎだ、と一真は思った。案の定女子は泣いてしまい、言葉にならない何かを叫んでいる。男子のほうはもう会話をする気がないようで、座って違う方を向いてしまった。

「ねえ、もう部活行っていない？」

うんざりしたようにテニス部の女子が一真に言った。

「え、でも、企画書の提出今日までで……」

「じゃあ早く決めてくれない？ 深谷くんにも仕事してないじゃん」

今度は一真が泣きそうになった。

なにもしていないって、俺はちゃんと二人の意見を尊重して折衷案を出したじゃないか。そもそも出し物を演劇まで絞ったのもほぼ一真だ。なんで俺ばかり。そもそもみんな他人事みたいな顔をしているけど、本来みんなで決めなきゃいけないことなのに。

こんなとき、多数決が使えれば楽だ。しかし、一真たちの担任はなぜか多数決アンチであり、何事も話し合って決めることを生徒に課している。そんな担任は「お前たちが話し合って決めろ」と職員会議に行ってしまったって、なんの当てもない。

どうすればいいのだろう。泣いている相方を見て、一真は途方に暮れた。

簡単なのは男子の案のほうだ。配役が元々決まっているし、なにより共感性羞恥を生まない。照れながら舞台に立つ先輩たちがよく分からないオリジナルストーリーを演じる様子は、男子の言う通り見ていて恥ずかしいものだ。しかし、こちらの味方をすれば、相方は一真を敵と見なすだろうし、付随して彼女の友達の子供からもまあまあ嫌われることは確定だ。

かといって、女子の案も決して悪くないと一真は思う。脚本の問題はあるが、それでも一から何かを作り上げるのは楽しそうだし、いかにも文化祭って感じていい。それに、彼女の言う通り、既存の物語をただやるのは面白くないだろうなとも感じていた。

いつの間にか優柔不断な一真が悪者であるように、クラスのみんなが一真を見ていた。重い空気に一真はもう何も言えず、下を向いていた。誰よりも家に帰りがかった。

「深谷」

その声が、まるで輝いて見えたのは、きっと一真の気のせいじゃないと思う。

「俺、深谷の意見いいと思うよ」

光る声に導かれるように顔を上げた一真に、声の主である白石廉がそう言った。

「元々ある物語に、恋愛要素入れるってやつ。いいじゃん。桃太郎もいいし、浦島太郎がおじいさんになったあとに好きな人見つけるとか、そういうのあったら面白そうじゃない？」

その瞬間、重かった空気に風穴が開いたのを一真は感じた。

「シナリオは、じゃあ俺が頑張って考えてみるから、〇〇が添削してよ。〇〇が指定してくれたやつで考えてみるからさ」

もう名前も忘れてしまった、騒動の片棒を担っていた男子に廉が呼びかける。ふてくされていた男子だったが、廉が何度か呼びかけると、しぶしぶといったように頷いた。

「△△もさ、恋愛要素の部分は協力してよ。俺そういうのあんまり分かんないから」

一真の相方は、目を真っ赤にしながら、それでも廉の言葉は届いているようだった。

「他のみんなは？ やりたいこととかないの？」

もう一真のことなど誰も見ていなかった。魔法のように廉がすべてをまとめていくのを、一真は他人事のように見ていた。結局他のクラスメイトは特に異論を唱えず、廉が提案したもので文

化祭は臨むことになった。

「ありがとう」

全員が帰った教室で（なぜか相方の女子もトイレに行ったきり帰ってこなかった）、一真は廉に何度目かのお礼を言った。企画書のまとめまで手伝ってくれた廉は、少し恥ずかしそうに笑っていた。

「いいよ。多数決もできないし大変だよな」

「白石くんがいなかったら何も決まらなかったよ」

「そんなことないって。俺は深谷の意見をそのまま言っただけだし」

あと、廉でいいよ、俺も一真って呼ぶから。と廉は付け加えた。

それまではどちらかというと明るい人間が苦手だった一真は、廉だけには心を許すようになった。

そして、それから廉とその周りの様子を見ていて気づいたことがある。

廉には人に好かれる才能があった。

ただ明るいだけの人間は、相手によっては壁を作られる要因となる。たとえば一真のような人間に。しかし廉は、明るい上に人に圧を感じさせない人間だった。彼と話をしている人間の顔が曇ったことを一真は見たことがない。

頭がいい、運動神経がいい、顔がいい、背が高い、カリスマ性がある……人に好かれる要素と

なるものに廉を当てはめていけば、もちろんそれらすべてに廉は当てはまる。でも、廉はそれら一つひとつの要因でトップを取るかといったら、そうじゃない。廉より顔がいい同級生はいるし、成績がいい人間もいる。それでも、たとえばこの世界に悪の組織が現れたときに、赤色を纏ってみんなを導くのは廉だ。

“完璧ではない”こと。そこも含めて完璧な白石廉は、人生に山も谷もない一真にとってのヒーローだった。

同時に一真は学んだ。

同じことを言っても許される人間と許されない人間がいること。目立っていい人間とただ悪目立ちするだけの人間がいること。悪意を向けやすい人間と悪意を向けるなんて考えられない人間がいること。

一真は廉に勝てないこと。

でも、それでもよかった。

凡人でモブキャラの一真が、廉と友達であること。それだけが一真の誇りであり自慢だった。苦手な体育でペアになってくれた。一緒に弁当を食べた。時折、遊びに誘われた。そういう何気ない廉とのエピソードのすべてが一真の宝物になっていった。だから、廉が地元の進学校に進学することを知った一真は、生まれて初めて猛勉強をして後を追いかけた。

廉はヒーローだから、高校に入学した後も、変わらず一真と友達でいてくれた。

「一真あ、早くお風呂入りなさい。お母さんもう寝るからね」

ソファーに寝そべってスマホをいじっていた一真に母が呼びかけてきた。

母親というのは、なぜ自分が寝るときに報告してくるのだろう。面倒くさいので無視していると、今日は虫の居所が悪い日だったのか、母が追い打ちをかけてきた。

「あんた、テストは大丈夫だったの？」

痛い所を突かれた。

「大丈夫」

赤点はとっていない。一応。母の大丈夫の基準がどのくらいかは知らない。

「廉くんは？」

「知らね」

「せっかく廉くんと一緒に高校行ったんだから……」

「はいはい分かっているって」

うんざりしながら母の話を遮り、手を振ると、母は呆れながらも退散してくれた。

成績優秀な廉のことは母も知っており、中学のときから事あるごとに比べられる。そういう風に育てたらあんなにいい子に育つのかしら、と廉が遊びに来た日に母が呟いていたが、そんなの一真が知リたかった。どんな親だったら廉のように育つことができたのか。遺伝子レベルで凡人な一真を生んだのは凡人な親だろ、と一真は常々思っていた。

母が点けっぱなしにしていたテレビでは、炎上した芸人が謝罪会見をしている様子がニュースで取り上げられていた。テレビなんて見ない現代っ子の一真は、同じ内容のニュース記事をスマホで流し読みしながら、無造作にテレビを消した。すると、突然廉からメッセージが届いた。

『ごめん、明日の地理の課題ってどこからどこまでだっけ』

廉に頼られたのが嬉しくて、一真はすぐに返事をした。指定されたページの範囲を送り、

『その辺明日詳しいところまで掘り下げるっばいから資料集も確認しといたほうがいいかも』

と付け加えた。送った直後におせっかいだったかなと若干後悔しそうになったが、

『まじかー笑』

ありがとう助かった！』

と帰ってきたことで、一真は満足感に包まれた。これで明日の廉も完璧に質問に答えるのだろう。

そして案の定、次の日の地理で廉は先生からの質問に完璧に答えてみせて、教室中からの注目を集めたのだった。

＊

廉に心酔し、常に廉と同じ空間にいたいと願う一真だったが、唯一、学校内において廉がいない空間で過ごす時間があった。それが部活で、一真は演劇部に所属していた。

「深谷先輩、今日って通し何時からですか？」

部屋に入って早々、一つ下の後藤理沙が、大きな目をしばたかせながら一真にそう聞いてきた。理沙はまだ一年生なのに、次の劇で準ヒロインに大抜擢されて、近頃は特にやる気満々だった。大抜擢、というほど大きな部活でもないのだが、それ故にこの学校の演劇部では基本的に年功序列で目立つ役が埋まる。オーディションなども特にならない。それを考えたら、理沙はかなり異例の存在であり、目立つ人間だった。廉とは方向性は違えど、理沙もかなり主人公に近いと一真は思う。

ちなみに理沙の言った“通し”とは“通し稽古”の略だ。もうすぐ文化祭で、部活が一番活気づく時期でもあった。中学の頃の文化祭大揉め事件が、奇しくも一真に演劇への興味を持たせることになったわけだが、あれからもう三度目の秋になることに一真は一番驚いている。

「今日は十八時からの予定だよ」

「じゃあ深谷先輩、一緒に台詞合わせてくださいよ」

「嫌だよ。後藤さん、熱が入ると止まらなくなるし、そもそもそんなに掛け合う場所ないよね？」
一真は今回、悪役の一味の役だ。そこそこの役ではあるが、準ヒロインである理沙と話す場面はほばない。一真が丁重にお断りすると、理沙は思いっきり唇を尖らせた。

「そもそも、深谷先輩が私の恋人役を断ったからじゃないですか！ 本来副部長ってもっと良い役を演^やるものでしょ！」

「おお、後藤ちゃん言うねえ」

部長であり先輩である南が、ニヤニヤしながら理沙の後ろから顔を出した。一真を副部長に推薦したのもこの人で、一真にとっての諸悪の根源だ。今回の舞台の主役でもある。

「でも俺もその意見にはさんせーい。なんで後藤ちゃんの相方断っちゃったわけ？俺より輝く場面あるじゃん」

「荷が重いんで」

「ドライだなあ」

けらけらと南が笑う。この先輩は、一真絡みのことはいつも面白がっているだけだ。

「私は深谷先輩が良かったのに」

ふてくされながら呟く理沙に、一真は何と言っているかわからず手に持った台本の表紙を指でもてあそんだ。そんなことを言われても、実際一真には荷が重たいし、もっと輝くべき人間はいる。適材適所だ。

「……んま、来年は深谷っちが主役飾ることになるし、後藤ちゃんはヒロインになれるように頑張るな」

また適当なことを、と一真は横目で南を見たが、一枚も二枚も上手である先輩は一真のねちっこい視線を笑顔でかわし、去って行った。

なんとなく流れで一真も去ろうとしたが、理沙がぱっと顔を上げた。

「来年は、隣に立たせてくださいね。先輩」

一真の返事を待たずに、先に部室から出て行った理沙の華奢な背中を見送りながら、一真はた

め息をついた。

目立つ役よりも支える役を。それが一真の信条で、どうしても主役級の役をやりたいとは一真は思えなかった。そもそも中学の文化祭で実行委員をしてえらい目にあっただし、みんなを引っ張るとか全員の前に立つとかはもうごめんだ。だから副部長なんて肩書きも欲しくなかったのだが、南に謎に気に入られてしまったのが運の尽き。役職を決めるミーティングにおける南のゴリ押しで、一真は副部長になった（同級生にそこまで野心のある人間がいなかったのも大きな要因だ）。だからせめてと言わんばかりに目立つ役は突っぱねて、今の2.5番手の役に落ち着いた。それでも台詞は多いし、舞台裏に引っ込む時間は少ないし、一真にはもったいないほどだった。

「はい、じゃあ最初から通すよ」

数十分が過ぎ、思い思いに散らばって稽古（練習と言ったらなぜか怒られる）をしていた部員たちが、主に稽古場として使っている第五講義室に帰ってきた。全員でのストレッチが終わると、いつも語尾を伸ばしがちな南の口調が締まる。誰も台詞以外の言葉を発せなくなる空気感。少しピリついて、でも真っ直ぐな雰囲気。その瞬間、自分たち以外の誰かがそこにいるかのような感覚。今だけは、凡人で劣等感に満ちた自分が消える。丸まりがちな背筋が勝手に伸びて、知らない誰かが一真の中に入ってくる。

一真はこの空間が好きだった。一般的に良いとされる役を演ることより、主人公になるより、この空間に自分がいられることがすべてだった。

「さあ、下を向いている暇はあるのか」

決闘のシーンで、一真ではあるけど、一真ではない誰かが主役を鼓舞する台詞を囁みしめるように押し出した。その言葉を皮切りに、主役である南は大きく前に踏み出した。

＊

あっという間に日々は過ぎ、文化祭まであと数日となったある日のことだった。

「結構な怪我だねえ」

いつもはへらへら笑う南が、苦笑にとどまったのを見て、一真はこの怪我がどれだけ大きいものかを改めて実感した。

昨日、同級生がふざけた拍子で階段から落ちた。その下には、教室に向かうために階段を上っていた一真がいたのだった。降ってきた同級生の体重をもろに受け、体が勝手に踏ん張ろうとした結果、一真の足は思いっきりねじれてそのまま一番下まで落下した。幸か不幸か、ひどい捻挫で済んだだけだったが、とてもじゃないが普段と同じようには歩けない状態に陥った。一真を怪我の道連れにした上に下敷きにした同級生は、昨夜親御さんと一緒に謝りに来てくれたが、謝られても怪我は治らないのが現実だ。

包帯で巻かれた足を見て、理沙は自分が怪我をしたかのように顔を歪めた。

「それ、文化祭出られるんですか」

答えは明白だったが、一真はそれに答えたくなって黙ったまま肩をすくめた。理沙もそれで察したのか、もうそれ以上は追求しなかった。

「深谷っちの役は削れない」

南がしばらくの沈黙のあと、吹っ切るようにそう言った。

「代わりを見つけないと」

「代わり……でも、うちの部員じゃ足りないですよね」

理沙が悔しそうに呟く。

そんなに大きくない部活だ。ほぼ全員に役が行き渡っているし、役がない人間はそもそも幽霊部員で、今回一真の代わりを務められるような人はいない。一真の役は悪役だから、悪役以外の人間が務めることもできない。観客はこちらの事情など知らないから、ただ混乱を引き起こすだろう。かといって悪役を演じる人たちは役を掛け持ちするほど余裕がある訳でもない。

また訪れた沈黙に、一真は唇を噛みしめた。

誰か。

あと数日で、台詞を入れられて、そつなく役をこなせるくらい器用な人。そんな都合のいい人、と一真は思ったが、すぐに思い当たる人物が検索結果で挙がった。そもそも一真の交友関係が狭い故の速度である。

「……白石廉っていう友達がいます。そいつなら、頼めると思います」

中学の時、脚本をまとめた上で、主役をやりきったヒーローの横顔を思い出しながら、一真はそう言った。

一真の急な頼みを、廉は渋りながらも承諾してくれた。俺、演技の才能ないからな、と笑いながら。

そんなこと言いつつ、廉は次の日の稽古までに一真の台詞とその前後の台詞まで完璧に覚えてきた。これには南も驚いていて、期待の新人だとへらへらしていた。たった数日しかないし、演技の経験もあの中学の文化祭だけだというのに、そのハンドを飛び越えて廉はするすると上達していった。正直、一年生の端っこの役の子より断然上手かった。

「すごいな、廉」

休憩中に、一真が廉にそう言うと、廉ははにかんだ。

「一真が演技好きなの知ってるから。頑張らないとって思ってるさ」

その言葉が嬉しくて、廉は一真のために今までの稽古で指摘されたポイントや、他の役を演じる人たちの癖などをまとめた台本を、廉に渡した。元々廉に渡していたのは余っていた新品の台本だ。こんな汚い台本を渡すのは気が引けたが、廉はとても喜んでくれた。そして、廉はそれすらも吸収して、まるでずっと前から演劇部にいたかのように堂々と振る舞うようになった。すっかり溶け込んだ廉を見て、やっぱり廉は自分のヒーローだと一真は思った。

＊

そして、文化祭当日。

捻挫してからは母が一真を送り迎えしてくれているのだが、その日だけはどうしても両親ともに予定が合わず、一真は時間をかけて電車で学校に向かった。駅のホームからいつも使っているバス停までは若干距離があるため、午前中の舞台の時間に合うバスに間に合わないことを悟った一真は、心配ながらも午後の舞台だけを鑑賞する予定になっていた。

「一真！」

バスを降りると、一真が着る予定だった衣装を着た廉が校門まで迎えに来てくれていた。

「廉。本番前なのに」

驚いた一真に、廉は笑った。

「一真の代わりなのに、一真を放っておけるわけないだろ」

一緒に舞台である体育館までゆっくり歩いた。こうして並んで歩くのは久しぶりだった。廉はいつもたたくさんの友達に囲まれているし、廉を常に囲むタイプの人種は、一真にとっては苦手な部類に入るからだ。

「もう本当に緊張するな。午前中の舞台に立った瞬間に、台詞ぜんぶ飛びそうになったよ。南先輩が気にかけてフォローしてくれたから助かったけど」

珍しく弱音を吐く廉。眉を下げるその表情は初めて見た。

「分かるよ。俺もそうだったから」

「まじ？ 一真って去年も飄々と舞台に立ってたから緊張とかしないのかと」

「いやいや、たぶん緊張しすぎて表情無くしてただけ」

「あ、そういうこと？」

ふは、と空気の塊を出して笑う廉の顔を、一真はどこか高揚した気分で見つめた。文化祭の雰囲気やられているのか、廉が舞台に立つところを見られるからか、はたまたその両方か。自分が舞台に立てない悔しさを一真は忘れていた。それどころか、こんなことになるなら良い役を引き受ければよかったと思っていた。廉なら、断った役——理沙の恋人役のほうが映えただろう。

人混みを避けながら、一真が歩きやすいようにサポートしてくれる廉を独り占めできることが嬉しくて、一真はただこれからの時間が楽しみだった。

そして、舞台の幕が上がった。

南が最前列のど真ん中の席を用意してくれようとしていたが、一真はそれを断って、舞台袖で劇を鑑賞することにした。怪我をして迷惑をかけたし、舞台にも立てないが、なんとなく一員ではありたくてそこを選んだ。

南が普段からは考えられないくらい真剣な顔つきで舞台上を歩き回る。ヒロイン役の先輩が若干緊張しながら、でも明るく振る舞う。理沙がそれを凌駕するように、視線を集める。……準ヒロインとしてはあまり褒められたものではないが、でも輝いている。

廉はさすがの立ち回りだった。目立たず、でも大事なところは役の個性を出している。丁寧な発音とはっきりとした滑舌。観客の誰も、廉が急遽拔擢された人間だとは思っていないだろう。台詞のミスも、一真の記憶が正しければまったくない。

廉が主役を演じるところを見てみたい。これを機に、演劇部に入ってくれないだろうか。スポーツ万能的な廉が演劇部に、しかも今更入ったら他の部から苦情が来そうだが、そんなの南を使って、どうにかしよう。部員の間にも賛成するはずだ。この劇が終わったらさっそく廉を誘って、

「さあ、下を向いている暇はあるのか！」

その声が、まるで輝いて見えたのは、きっと一真の気のせいじゃないと思う。

場が静まりかえった。

舞台上にいた人間も、観客たちも、こそこそ裏で打ち合わせをいていた部員たちも、そしてどこか違うところに飛んでいた一真も。

全員が目どころか、思考や感覚のすべてを奪うかのような。空気すらも手のひらの上に収めるような。強い照明に照らされた埃がちらちらと光った。

その声を発したヒーローは、ただそこで爽やかに微笑をたたえていた。

そして、一真は見た。その台詞を皮切りに踏み出す南が、今までにないほど目をギラつかせ、楽しそうに笑っている姿を。それを見てようやく時間が動き出すのを一真は感じた。呼吸もできなかった。

2.5番手の役。主役でも何でもないし、今の台詞が、この役の最後の台詞だ。あとは南に倒されて終わってしまう。削れない役だったのは、舞台装置としての役割があるキャラだったからであって、本来誰の記憶にも残らない役。

一真が演れば、そのまま終わっていた役。

こんなに注目を集める役ではないし、無理に目立とうとしたらスベっていたはずだ。

それが、廉が演るとこんなに魅力的な役になる。あんなに人を惹きつける言葉になる。廉を中心としてすべてが動いていく。主役である南ですら、もう廉以上に輝けない。

一真の体から、知らない誰かが消えていく。

……あの台詞は、静かに言うことがすべてだと思っていた。歴代の先輩たちもそうしていたし、そもそも演じている役の性格も大人しいほうで、だから一真はこの役を選んだのだ。しかし、廉は叫ぶように主人公を鼓舞していて、それがぴったりハマっていた。急な大声ではあったが尻上がりのようになるように廉は叫んでいたため、違和感も特にない。なにより、「南が演じる」「主人公への呼びかけとして最適だった。これが違う人が演じるものだったら、廉は他の言い方をしていただろう。

練習ではこんな言い方をしていなかった。つまり、昨日思いついたか会場の雰囲気気分が上
がったのか。どちらにせよ、廉は正しい選択をした。

そうだった。

自分なんて廉に勝てる訳がなかった。

廉は一真の代わりなんかじゃない。一真が廉の前座だった。

なぜ忘れていたのだろう。なんで自分のほうが上に立った気でいたのだろう。

一年生から部活をやってきた一真を廉は数日で飛び越えた。いや、元々廉のほうが上だった。

一真は廉に敵わない。自分のぐちゃぐちゃな台本を渡したことが、ひどく恥ずかしかった。

終盤に差し掛かった劇を遠くの世界の出来事のように眺めながら、一真は居場所が遠ざかって
いくのを感じた。さっきまで高ぶっていた感情は消え失せていた。

＊

文化祭から一ヶ月が過ぎた。その年の出し物で特別賞をもらった演劇部から三年生が引退し、
新しく二年生が運営を引き継いだ。一真は、部長にも副部長にもならなかった。南の説得に応じ
ず、頑として受け入れなかった。

「なんでそんな、絶望した顔で生きてるのかなあ」

困ったように笑う南に頭を下げて、一真はただの部員となった。本当は部活も辞めたかったが、遠くなってしまったとはいえ、居場所を手放せるほど一真は強くなかった。

クリスマスに近くの公民館で披露する演目も、一真は台詞もない役を演じることになった。前は暇さえあれば絡んできた理沙も、呆れられたのかももう今ではほとんど言葉を交わさない。一真の代わりに新たに副部長となったので、業務の引き継ぎのためだけに話す仲になった。

廉をぜひ部員に、とほとんどの部員は言ったが、廉はそれを柔らかく断った。自分はあくまでも代打だから、とか言っていたが、みんな口に出さないだけで、一真より廉のほうが役としての完成度も注目度も高かったと思っていたはずだった。それなのに、どこまでも一真を立てる廉はやっぱり良い奴で、でも一真の心を乱した。

一真自身も、ヒーローである廉になぜこんなにむしゃくしゃするのが分からなかった。廉が演劇部においてほしいと思う一方で、どうしても部活に誘うことはできなかった。

居場所を取られたような、そんな気がしていたのかもしれない。しかし、一真が廉に敵わないことなんて自明の理だった。取られるものにも、一真が独占できるものではない。

分からなかった。分からないまま、それを放置してしまっていた。

一度差し込んだ暗い気持ちは、一真も気づかないうちにどんどん大きくなっていった。

そして、話は冒頭に遡る。

一真の捻挫もようやく治り、電車にも普通に乘れるようになったときの出来事だった。

その場で廉に話しかけることは結局せず、老人も一真の降りる駅より前の駅で降りていった。

廉と老人の写真を自分の部屋で眺めながら、一真は車内から浮ついている気持ちのままに、SNSにその写真をアップした。

廉と老人、そして何人が写っていた乗客全員にモザイクをかけた。車窓から見える景色もできるだけ切りとった。ただ、廉と老人がどういう状況なのか、それだけが分かる写真にした。それ以外なんの情報もない写真だった。

一真は基本的に自分からSNSに日常を投稿する人間ではなく、いわゆる“見る専”だった。それは、廉も同じ性質の人間だからであるのも大きな理由の一つだった。廉のSNSを探した時期もあるが、中学でも高校でも廉はSNSをやっていないようだった。だから、一真もネットサーフィン用のアカウントは持っているが、知り合いで繋がっている人は一人もない。ネット上だけで繋がっている人もいない。

フォローもフォロワーもないアカウント。誰も見ない一真だけの場所。でも一真だけが知っている。完璧でみんなから愛される廉が、すべてをそつなくこなす廉が、こんなに思いやりに欠けた行動をしていたこと。

一真は加工した写真をそのアカウント上にアップした。特に文章も載せなかった。ただの自己満足で、一真はその写真がネットの塵の一つと化したのを見届けてから、眠りについた。

なんとも言えない高揚感と、満足感が一真を包んでいた。ざまぁみろとどこかで思った。

日曜日の朝。というか昼。

二度寝からようやく起きた一真は、もはや何も考えずにスマホがある位置に手を伸ばした。そして、手にした携帯が異様な頻度で震えることを確認した。

違和感が寝起きの頭を支配して、一真は起き上がりながらロック画面を開いた。すると、

『ちーたんがあなたにいいねしました』

『よしおがあなたにいいねしました』

『hantaがあなたにコメントしました』

『セカがあなたをフォローしました』

溜まっていた通知が、たたみかけるように一真の手の皮膚を振動させた。

「……は？」

状況が理解できず、慌ててSNSを開くと、一真が昨日の夜にアップした廉の写真が、ものすごい勢いで伸びていた。昨日までゼロだったフォロワーは数十人まで増えていて、投稿自体は数千の“いいね”がついていた。

心臓の音が急に大きくなった気がした。コメント欄を開く。

『こういう若い奴いるよね』

『なんで席も譲ってあげられないんだろ』

『令和の子どもは繊細だから知らない大人に声かけれないんだゾ』

『この男の子も具合悪いかもって考えろよお前ら』

『スマホ触ってるしそれはなくね？ お前こそ考えろよ』

『これでいいじゃん転けたらここにいる奴ら全員急に立ち上がるんだろ？』

『想像して吹いたwww』

『特定班はよ』

『この電車の感じ、○○地方の路線じゃね』

ここまで見て、一真は恐ろしくなった。その地方の名前は一真が住んでいる地方だったからだ。早くなる鼓動を感じながら、まばたきも忘れて一真は投稿を消した。そしてアカウント自体も削除した。スマホはようやく震えなくなり、一真は脱力してもう一度寝転がった。

一晩でここまで拡散されるものなのか。

なんの影響力もないアカウントだったはずだ。文章も載せてないから検索に引っかかる要素もない。なんでここまで大きなことになったのか、一真には理解できなかった。

まだ心臓がドキドキしている。涙が出そうなほど神経が逆立っている。一真は枕に顔を埋めた。まったく眠くないのだが、起きたら誰かに何かを指摘される気がして恐ろしかった。

大丈夫だよな。

特定とか……されないよな。

だって、かなり濃いモザイクかけたし。電車の内装は分かっても人物まで特定できるはずがな

い。制服でもないし。一真や廉くらしい年代の男なんていっぱいいる。そもそも廉は少し大人びているから、学生だとも思われていないかもしれない。それに、写っていたのは廉だけじゃない。他の乗客も席は譲らずに座り続けていた。その様子も分かるはずだ。廉だけが悪いんじゃない。そうだ。そもそも老人から席を譲ってほしいと言わなければならないのか。廉は悪くない。ぐるぐると回る言い訳に吐きそうだった。廉に会いたかった。会いたくなかった。

怖い。

なにが？

廉がネットに特定されるかもしれないこと。廉がネットのおもちゃになりかけていること。いや、違う。

自分がしたことが廉にバレること。

廉に失望されること。友達でいられなくなること。

自分勝手な自分が気持ち悪くて、一真は軽くえづいた。それ以上考えたくなくて思考を放棄した。ぐちゅぐちゅに湿った心が痛くて、怖くて、恐ろしくて、でもそれだけじゃない。

どこか興奮したような、そんな高ぶりが一真の内側をかき乱していた。

＊

ネットであんなことが起きたのが嘘のように、一真の日常は当たり前になってきた。

SNSの状況は恐ろしくてもう見る事ができなかったのだが、怯えながら登校した一真を待っていたのは普通の教室で、みんないつも通りにそこにいた。廉もいていつも通り友達に囲まれていた。誰も一真が投稿した写真の話などしていなかった。

いい裏切りをされた一真がしばらく自分の机の前で立ち尽くしていると、隣の席の遠藤が不可解に一真を見つめてきた。

「……座れば？」

「あ、あぁごめん」

遠藤は冷めた目で一真を見ていたが、やがて興味を無くしたように机に突っ伏した。

あれは夢だったのだろうか。

震えるスマホの感触が昨日一日忘れられなかったのだが、どうやらボヤ騒ぎ程度で済んだらしい。日常に侵食してくるほどの影響ではなかったようだ。

一真はようやく安堵した。

気持ちが悪く、急に眠くなってきた。あれから寝られなかったのだ。遠藤に倣って、一真も机に突っ伏した。ちょうど朝日が一真の席のあたりに差し込み、気持ちが良かった。おかげで朝礼の時間になっても目が覚めず、一真は朝一で先生に叱られた。

一真の日々はそこから割と順調で、ちょっとした良いことが頻繁に起きるようになった。赤信号で足止めをくらうことがなくなったとか、購買のパンの最後の一個が買えたとか、そういう些

細なことではあるが。しかし、そんな些細なことが積み重なれば余裕もできるもので、ほんの少し勉強に集中できるようになった一真は小テストで良い点数を連続で取った。一つは廉と並んで好成绩で、一真は飛び上がるほど嬉しかった。苦手な体育も、一真の運動スキルの中ではまだマシな部類であるバドミントんに競技が切り替わったため、そこまで憂鬱でもなくなった。

ただ、部活だけはどうにも足が向かなかった。どうしても、廉がみんなを魅了したあの瞬間が忘れられなかった。

そして、部活に顔を出さなくなった結果、帰る時間が廉と被るようになった。週に数回、廉と一緒に帰ることが一真の新たな日課となっていた。

廉と一緒に電車に乗ることで、一真が罪悪感に苛まれていたのも最初の内だけだった。今でも罪悪感自体は残っているし、その感情が減ったわけでもないのだが、慣れてしまったのか忘れようとしているのか、一真は平気な顔をするフリが得意になってしまっていた。むしろ今のほうが、堂々と廉の隣に立てる気がした。

最寄り駅も同じで、家の方向も同じであるため、二人は今日も同じ道を歩いていた。どこかの家の庭からカレーの匂いが漂い、一真の鼻をくすぐった。

「一真、最近部活行ってないの？」

一真がやったことを廉は知らない。だから、廉は今日も変わらず一真と接してくれていた。

「んーまあ、代替わりして先輩抜けたから、ちょっと気が抜けちゃって」

「あーなるほど」

適当な一真の言い訳にも、廉は頷いてくれた。

「演劇してる一真好きだからもう一回見たいけどな」

思いもよらないことを廉が言うものだから、一真は驚いて廉のほうを見た。

「そんなこと初めて言われた」

「まじ？ めっちゃ楽しそうだよ、一真が演劇してるところ。今年の文化祭も結構楽しみにしてた。まさか自分が出ることになるとは思わなかったけど」

爽やかに微笑む廉は、懐かしそうに目を細めた。

高校に入って一真の世界は広がったが、廉の世界は一真の比にならないくらい広がったはずだ。今でも仲良くしてもらっているだけで奇跡のようなもののに、廉は一真の知らないところで一真を意識の内側に置いていくれたらしかった。その事実が一真の心を喜びで満たした。

「……廉もさ、」

その喜びに任せて、口がつい滑る。絶対に嫌だと思っていた自分がいたのが嘘のように、今の一真の気持ちは軽かった。

「演劇部入らない？ みんなが前にも勧誘してたけど、俺も廉が入ってくれたら嬉しい。あの時の演技、本当にすごかったし」

今度は廉が驚いたように一真を見た。

「そう見えたなら、たまたまだよ」

「たまたまじゃない」

熱を帯びた一真の口調に、廉は浮かべた微笑を深めた。

「そんなに熱心に勧誘されると思ってなかった」

そして、少し考えた後、廉はこう言った。

「ありがたいし嬉しいけど、やめとく。一真が真剣に演劇好きなの知ってるからさ」

廉はそれから付け加えるように、早口でこうも言った。

「それに俺、やっぱり演じるより見るほうが好きだわ。この間のも緊張しすぎて記憶無いし」
「はは、と笑う廉の横顔を遠く感じて、一真は何と言えいいのか分からなくなった。

そうこうしている間に廉と別れる道まで着いて、一真は手を軽く上げた。

「じゃあ、また」

廉も同じ仕草を返した。

「次は一真が演劇してるところ見に行くから。じゃあ」

＊

ヒーローの死だというのに、そんな出来事は世界でありふれすぎているのか、ニュースにすら取り上げられることはなかった。

一真と別れた後、廉が自宅近くのビルから飛んだ。氣遣いができる彼らしく、人がほとんど通らない時間帯だった。

遺体がどういう状態だったか、一真は知らない。見せてもらえなかったのだ。窓が閉められたままの棺を、ただ遠くから眺めていた。

最後に彼と接触していた一真は、いろいろな大人から話を聞かれた。しかし、廉との帰り道で話せることなど何もなかった。本当に話すべきなのは別のところにあるのは一真も分かっていたが、それを打ち明けられるほど一真は強くない。

両親と親しかった友人にのみ個別で手紙が遺されていたらしい。らしい、ということは一真には無かったのだ。もちろん中身も知らないから、廉がどんな言葉を遺して、どういう気持ちでこの世から去ることを決めたのか一真には分からない。ただ警察の捜査がすぐに終わったのを見る限り、一真のやったことは関係ないようだった。あれが関係しているなら間違いなくもっと大きな事件になっている。そのことにどこか安心しながらも、しかしそれ故に廉の死んだ理由が分からなかった。

泣き崩れる廉の両親とクラスメイトたちを離れたところで見ながら、一真はいつかの舞台袖に立っていた自分の姿と重なる気分だった。

どこまでいっても、結局一真は当事者にはなれないのだ。たとえば、すぐそこに存在していたと

しても。

ちょうどもうすぐ冬休みに突入する時期だった。学校に行けなくなった一真に対し、両親は、早めの冬休みだと思ってゆっくりしろと言ってくれた。担任もそうするのがいいと言っていたそう。

特にやりたいこともなく、惰性でスマホをいじることもなく、一真は日がな一日ぼんやりとしていた。何日もそうしているものだから、母が心配してずっと様子を見て来ていたが、父にたしなめられたのか数日前から必要最低限の用事があるときだけ部屋に来るようになった。

自分を満たしているのが何なのか、一真自身にも分からなかった。廉がこの世にいないことの虚無感だろうと最初は思っていたのだが、どうやらそうではないらしい。

一真にとっての、たった一人のスーパーヒーロー。

『次は一真が演劇してるところ見に行くから』

廉は確かにそう言った。あの後、空を飛んだ。だとしたら、もうあの時には決意を固めていたはずなのに、廉はそう言った。

廉が自分から約束を破ろうとする人間ではないことは、一真が一番よく知っている。じゃあ何のためにあんなことを言ったのか、一真には理解できなかった。

彼が死んだ理由が一体どこにあるのかも一真には分からない。中学からの仲だけど、でも言葉

を遺してもらえないほどの仲ではなかった。

一真が一方的に彼を慕っていただけだ。

その事実が重くて苦くて、一真は立てた膝の間に顔を埋めた。どうしたら彼の一番になれたのか分からなかった。あんなことをしておいて、まだ自分が廉の側にいられる人間だと自然と思い込んでいることが、やっぱり気持ち悪かった。

カーテンを閉じきり、光すらも差し込まない暗い部屋で、一真は夢か現実か分からない世界をたゆたっていた。

舞台に立つ。台詞を言いたいのに声が出ない。

すると廉が袖から颯爽と現れ、一真が言うべき台詞を言い、やるべき振る舞いを見事にこなすのだ。

立ち尽くす一真をみんながすり抜け、廉を称える。消えたい。

＊

年が明け、一真はさすがに学校に通うようになった。そうしないと母がやたら気にかけてきて、一真を精神科に連れて行こうとするからだ。それが鬱陶しくて無理矢理日常に自分を戻しに行った。

二月のある日。その日も無気力で一日を乗り切った一真に、覚悟を決めたように遠藤が声をかけてきた。

「話、あるんだけど」

春から一真の隣の席にいる遠藤だが、今まで一言二言言葉を交わすだけで、まともに話などしたことがなかったから一真は面くらった。

「なに？」

「ここはちょっと」

遠藤がそう言ってゆっくりまばたきをした。お前が場所を決めろ、ということだろうか。遠藤は物静かなタイプだが、一真みたいなキャラとは違い、圧がある。その点で一真は苦手だった。話があると言ったのは遠藤のほうなのだから、遠藤が場所を指定すればいいのに。そう思いながらも断れるわけがない一真は、第五講義室を提案した。今日は部活がない日だ。二人で使うには広すぎるが、誰も近づかない場所だからうってつけだろう。

久しぶりに来た稽古場は少し綺麗になっていた。部のみんなで年末に大掃除をしたのだろうか。久しぶりとはいえ、来ていないのはたった一、二ヶ月のはずなのだが、懐かしさで苦しくなった。手頃なイスを遠藤に渡し、一真も適当なイスに座る。遠藤は物珍しそうに大道具や脱ぎ捨てら

れた衣装を見ていたが、やがて一真のほうをまっすぐに見た。その視線は凍てつくようで、一真はもう帰りたくなった。でもその視線の鋭さの割には、遠藤は口を開かず、ただ黙って一真を見ていた。根負けした一真が

「何の話？」

と言うと、遠藤は呆れたようにまばたきをして横に視線を逸らした。そして、先ほどよりさらに鋭く一真を睨み、静かに言った。

「廉を殺したよね」

吸いかけた酸素が、喉の奥で奇妙な音を鳴らした。脈拍が急激に跳ね上がる。

「ぜんぶ知ってるから。深谷がやったことも、それが廉を殺したことも」

低い声で吐き捨てるようにそう言って、遠藤は長い足を組んだ。

その声が廉のことを親しげに呼ぶことに違和感がありながらも、でも一真の頭の中はそれどころではなかった。何かを言わなきゃと思いつつも、言葉が出てこなかった。震え続けるスマホの感触が、リアルに皮膚に思い出される。

「……しらばっくれるかと思ったけど、凶星過ぎて言葉も出ないか」

遠藤は自分のスマホを取り出し、操作をして、ある画面を一真に見せた。

そこには、廉の本名、年齢、学校名、大まかな住所が書かれていた。——一真が電車内で撮った写真の下に。

「これ、深谷がネットにあげたよね」

断定口調の遠藤は、写真を指さした。

「あんたはすぐアカウント消して、たぶんそれからネット見てないんだろうけど。結構な勢いでこの写真は広まった。そして、悪ノリした人たちが廉の個人情報を持定した。学校名とか書いてあるのに学校に迷惑行為がなかったのは、まあ飽きられるのが早かったからだろうね。特定も少し遅かったし」

青ざめる一真に、遠藤は淡々と話し続けた。

「不特定多数からの被害は無かったらしいよ。ただ、個人情報が出回るくらいには炎上したし、あんなモザイクだらけの写真でも学校の人……特に同級生が見れば廉のことだって一発で分かる。良くも悪くも目立つから」

遠藤はスマホを仕舞い、なにか反論は？ と一真に問うた。鼓動が喉を塞いでしまったようで、一真は上手く呼吸すらできなかった。

それでも、なんとか言葉を絞り出す。

「な、なんで俺だって」

「廉から聞いた」

なんで俺だって分かったのか、と言い終わる前に遠藤は言葉を遮った。

廉が、知っていた？

「そんなわけ、だって」

だって廉はその写真が広まった後も、変わらず一真と接してくれていた。なんなら一緒に過

す時間は増えていたはずだ。それにそもそも知る術がないのに。

「廉も気づいてた。深谷があの時、同じ電車に乗っていたこと」

遠藤はもう一度スマホを取り出して、今度はメッセージのやりとり画面を見せてきた。左上の名前のところには「白石廉」と表示されている。どうやら遠藤と廉の会話のようだった。メッセージは廉から始まっていた。

『今電車で座ってるんだけど、隣におじいさん立ってて気まずい笑』

『譲ったらいいじゃん』

いつもしてるでしょ』

『譲ろうとしたら「座ると逆に立ち上がるのがしんどい」って断られちゃって』

『たまにいるねそういう人』

『でもこの状況見たら俺が確実にやばい人だよね笑』

『確かに笑』

『あ、深谷乗ってきた』

一真は何度もメッセージを読んだ。

何度も。何度も何度も何度も。

廉は、揺らぐことなくヒーローだった。

俺は、なんてことを。

「付き合ってたの」

スマホを下ろして立ち上がり、遠藤は呟いた。

「廉は人気者だったから、内緒で廉と付き合ってた。だから、深谷がしたことも廉が受けたこともぜんぶ知ってるの」

遠藤は、スマホを見るために前屈みになっていた一真の肩を強く押した。その力は強く、一真の体は情けなく後ろに反って、イスの背もたれにぶつかった。

「あんたが適当な気持ちで写真を撮ったせいで、廉がどんなことされたか知らないでしょ。廉は、裏でいろんな人にバカにされていた。直接悪口をぶつける度胸もないくせに、悪く思っていることを本人に知らしめたい人たちが、見えるように聞こえるように、でも確信を持たせないようにバカにした人たちが大勢いた。みんな廉に助けてもらったことがあるくせに、廉のおかげでなんともなかったこともあるくせに、みんな手のひらを返して廉をバカにした。廉は、ぜんぶ分かってみんなに平等に接した」

まくしたて、語尾を震わせながらも、遠藤の口調はどこまでも淡々としていた。しかし目からは大粒の涙がこぼれ落ちている。単純に感情を声にのせるのが苦手なのだろう。

「あんたのせいで」

一真もいつの間にか泣いていた。

「あんたなんかのせいで、廉は死んだ」

震える脳を必死で押さえつけ、一真は言葉を絞り出した。

「おれ、なにもしらなくて」

「当たり前でしょ」

遠藤は拳を握りしめた。その拳がどんどん白くなる。

「廉は、そういう人なの」

そういう人。

そうだ。廉はそういう人だった。いつだって完璧で、優しく、誰からも心配されない廉。あいつなら大丈夫だろうと思わせる廉。そう思わせるくらいの振る舞いをしていた廉。

「おれが、……廉を、殺した」

言葉にすると、それは鈍い光を伴って一真の胸を指した。紛れもない真実が一真の心を抉って、でもそれに傷つくことすら一真には許されない。

——存在しない記憶が一真の脳内に再生される。

電車内。先に座っていたのは廉のほうだったのだろう。そこに足下がおぼつかない老人がやってきて、ドア付近の手すりに掴まる。それが廉の隣だった。廉はすぐに立ち上がり、老人に席に座るように促す。しかし老人は、こう言うのだ。

「ありがとう。でも、一度座ると立ち上がるのが大変だね。どうぞあなたが座ってください」

廉は照れくさそうに笑いながら、元の席に座る。そして老人が転ばないように気にかける。あの時熱心にスマホをいじっていたように思えたが、もしそうなら一真が乗ってきたことなど廉は

気づかなかっただろう。一真は廉に近いドアから乗ったわけではないのだ。

すべて一真の勘違いだったのだ。

仄暗い喜びを囁きしめていた自分を殺したかった。ヒーローの汚点を見つけてやったつもりだったのだろうか。いつでも完璧な廉の姿に憧れていたが、一度でもその姿が消えてしまえばいいと思ったことはなかったか。

どこかで、廉なんていなくないかと思っていた。だから一真は、誰にも気づかれないアカウントとはいえ、世界中の誰もが見える場所に写真をアップしたのだ。纏った赤色に、小さな染みがつけばいいと思ったのだ。あの瞬間、一真は完璧な廉が自分と同じところまで堕ちてきた気分浸っていた。

実際には、一真は悪役にすらなれなかった。それどころか自分の誤解でみんなを不幸に陥れるただの邪魔者で、悪役のように信念も正義も持っていない。

ああ、

死ねばいいのに。

一真は何を思う間もなく、窓の外に目を向けた。ここは四階だ。頭から飛び降りれば、死ぬだろう。一秒でも早くそうしなければいけない気がして、一真は足に力を入れようとした。

その時、

「死なせないから」

遠藤が一真の頬を薄い紙で叩いた。

叩いた紙を一真の膝の上に置いて、遠藤は悔しげに顔を歪めた。

「あんたなんか死ねばいいってわたしは思う。でも、死なせないでくれて、廉に頼まれてるの。廉との最後の約束だから、あんたは絶対に死なせない」

膝に置かれた紙はどうやら手紙のようで、そこには廉の字で一真の名前が書かれていた。ゆっくり手紙を開けると、見慣れた廉の字がそこに綴られていた。

一真へ

遺書っていうほどきっちりしたものじゃないけど、一真にはちゃんと伝えたいことがあるから手紙を残します。

まず、俺が死ぬのは一真のせいじゃないから。

ネットに画像載せたのは、まあ許せないしふざけんなよって思うところもあるけど（笑）でも、仕方ないかなと思います。だって俺も誤解かかったし。（親はネットとか疎いから知らないと思う。一真のことは遠藤以外知らないから安心して。）

一真のことが無くても、前々から、死のうかなくなって思った。これは本当に。

その理由は、熱中できるものが何も見つからないから。たぶんこの先も、誰かの助っ人にはなれるけど、自分だけのものって見つからない気がする。

演劇は楽しかった。でも、これは一真のものだから。一真の場所を奪いたくないし、それに俺はやっぱ一真の演劇を見ているほうが好きだわ（笑）

だから一真は俺の分まで生きてください。

一真が俺のことどう思っていたかは正直分かんないけど、俺は一真と仲良くなれて嬉しかったよ。親友だったと思ってる。熱中できるものがあったて、誰かのいいところを常に見つけてすぐに尊敬できるところも、人をサポートする優しいところも、まじで漫画の主人公みたいだと思う。いつもなぜか自信なさげだけど（笑）だから、次の舞台は絶対主役をやってください。観に行くから。

じゃあまたいつか。今までありがとう。

白石廉

鳴咽を漏らしながら、一真は手紙を繰り返し読んだ。吸い込む空気が冷たく鼻の奥を刺激し、涙も相まって鼻水が垂れた。

自分が今まで廉に重ねていたヒーロー像は、なんて浅はかだったのだろうか。

廉は一真と変わらない等身大の同級生だったのに、一真は完璧である廉だけを見て、理想像を創りあげていた。

もっと話せば良かった。廉が思っているほど一真は優れた人間じゃない。でもそれと同じことを、廉も言うのだろう。

廉をヒーローみたいに使っていたこと。何でも器用にこなせることをかっこいいと思っていたこと。誰よりも赤色が似合うと思っていたこと。舞台の代役がすばらしかったこと。同時に嫉妬

した。自分がいかにダメで、凡人で、とても廉と同じことはできないと感じたこと。それでも廉に部活に入ってほしいと思ったこと。

伝えたいことがいっぱいある。聞きたいこともたくさんある。
もう、遅い。

季節柄日が落ちるのが早く、すでに夕方は消えようとしていた。迫ってくる夜の温度の中、一真は狂ったように泣いた。

一真が死なないように見張っていた遠藤は、一真の涙が枯れるまで、静かに移りゆく空の色を見届けていた。

＊

「さあ、下を向いている暇はあるのか」
いつか、舞台上では言えなかった台詞を一真は唱えた。それを横で聞いていた理沙が、不思議

そうに首をかしげた。

「一真先輩、いつも本番前にそれ言いますよね。おまじないですか？」

首をかしげたことで、大げさに巻かれた理沙の髪が一真の二の腕に当たった。こそばゆくて一歩離れる。

「そんなもん。てか、ヒロインがこんなところにいていいの」

「いいんですよ。相手役の男嫌いですもん」

一真是苦笑した。理沙の好き嫌いのはっきりしたところは学生時代からさらに拍車がかかっている。普通、もっと丸くなる部分だと思っただが。

高校、大学を卒業し、一真は小さな劇団に入団した。何度も辞めようと思った道だったが、続ければ何とかなるもので、つい数ヶ月前に大きな舞台のオーディションに合格した。かなり端っこ役ではあるが、台詞はちゃんとある。そしてそこには、大手の劇団に入団した理沙もいた。

高校生の頃に理沙に頭を下げて、ほぼ辞めかけていた部の輪に入れてもらったのがついこの間のようにだ。

「嫌いだからって、一幕は主役とヒロインが同時に登場するんだからこんなところにいたらダメだよ」

理沙はつやつやの唇を尖らせた。そういうところは変わっていない。

「早く私の隣まで来てくださいよ先輩。私、ずっと待ってるんですよ」

「……行くよ」

一真の返事が意外だったのか、理沙は目を丸くした。その様子がおかしくて、一真は笑った。

「友達と約束してるから。それに今、後藤さんとも約束した。だから行くよ」

理沙は肩をもじもじさせながら、嬉しそうに

「絶対ですよ！」

と、真っ赤なドレスをひらめかせ去って行った。

もうすぐ幕が開く。南先輩は今日来てくれると言っていた。遠藤は……毎回二枚分のチケットを送っているが、今のところ来る気配はない。まあ嫌われているから当然といえば当然なのだが。あれから一真は、遺書を持って自分のやったことを廉の両親に話し、土下座した。謝ることで楽になるのは一真だけではないかと遠藤にも言われたし、一真もそう思ったが、それでも自分が黙っているいいものではないと判断した。一真の両親も含めて何度も謝罪をした結果、最終的には和解した。しかし、一真は自分のやったことが許されたとは思っていない。まず一真自身が自分を許していないからだ。

廉が死ぬことを決めていたとしても、引き金をひいたのは間違いない一真だ。

廉に重ねたヒーロー像が、いつしか肥大化した正義感となって一真を動かした。廉自身を信じていれば。一真が卑屈になりすぎなければ。腹を割って話せる関係であれば。もっと一真に色々な視点を持つ力があれば。あの頃の自分たちには難しいことだったと理解しているが、それでもどうすれば廉を殺さずに済んだのかと一真は常々考える。

そして、自分に死ねばいいと思う。

これは一真が一生背負って生きていかなければならないことだ。——いっそ死ねたら楽だろうが。

廉は、楽になれただろうか。

廉が死んだ本当の理由は分からない。死んだ理由どころか、一真は廉のことをなにも知らない。一真の遺書がなぜ遠藤に託されたのか、一真は一度だけ遠藤に聞いたが、遠藤は答えてくれなかった。もちろん、遠藤だけに遺された言葉も一真は知らない。廉が両親に遺した言葉が本当かもしれない。はたまた、顔が広い廉のことだから、一真も知らない人に何かを遺しているのかもしれない。

廉の真意のすべてを一真が生きている間に知る日はこない。

だから一真は、親友との最後の約束だけを信じるしかないのだ。それは一真だけのものだから。会場内のアナウンスが消える。一瞬の静寂。そして張り詰める空気。

一真の中に、知らない誰が入ってくる。大好きなこの瞬間、いつも目に浮かぶのは、すべてを魅了した廉の姿だ。同時に、一真が廉を超える演技をする日は来ないのだらうと確信する。選ばれた人間にしかできない所業。今でも少しだけ悔しいし、嫉妬してしまう夜がある。同時に、その姿をもう見られないこと、自分がやったことに死にたくなる。

……それでも、こんな自分がいつかヒーローになれる日が来たら、最前列のど真ん中の席を君に用意しよう。

その時は、君がその手で俺を殺して、真のヒーローとして君が照らされてほしい。

やっぱり俺にとってのヒーローは君でなきゃいけないから。
君が俺を殺してくれたら、その時やっとな俺は、対等に君の隣に立てる気がするから。
心で生き続けるヒーローの姿を掲げ、いまだ凡人のままの一真は、約束のための一步を踏み出した。

＊

その日、ヒーローは死んだ。

（文学部総合人間学科四年）

食べる

吉野 美羽

味噌を溶かす。味噌の中、ところどころにペースト状になりきれなかった豆の形がそのまま残っている。それも箸で細かく砕いて一緒に溶かす。砕かれた大豆のかけらが網じゃくしの隙間を通じていく。さっきまで煮干しを放り込んでおいたせいで少し黄金色になっているお湯の中に、だんだんと茶色が混ざっていく。網じゃくしの中から一すくいの味噌が綺麗に無くなってしまったら、再びガスコンロのつまみを捻って火をつける。音を立てて青い炎が鍋の底を照らし、少しするとふつふつと底の方からもう味噌汁になったお湯が沸き立ち始める。出汁と味噌が混ざりあった匂いがしてくる。お玉で軽くかき混ぜると、沈んでいた豆腐とわかめが浮き上がって顔を出した。しばらく煮立たせたら、よく温まったそれをすくってお椀に注ぎ込む。

ねぎがあればよかった。彩りもいいし食感もいいし、細かく刻んだねぎをこのよくできた味噌汁に散らしてやれば、きっと最高だったのに。私は昨日行ったスーパーでねぎを買い忘れた私を恨む。けれど、すぐに私の思考はタイミングよく音を立てた炊飯器の方に持っていかれてしまう。炊飯器の蓋をあげると、一気に閉じ込められていた白い蒸気が勢いよく飛び出してきて、思わず

目をつぶる。顔が少し濡れたような感覚に包まれて、目を開けたらそこにはきらきら光る白米がぎゅっしりとつまっていた。

茶碗によそった白米と、味噌汁の入ったお碗を持ってローテーブルにつく。おかずはないけれど、味噌汁の大好きな私にはそれとご飯だけで充分だった。手を合わせて、箸を持ち上げる。お碗に口をつけると、まろやかな味噌の味が口の中に流れ込んでくる。口から喉に達した温かい感触が、ゆっくりと胃の中に落ちていく。

食べることが好きだ。

私のことを説明するときにはこの一文がいちばん最初にやってくると思う。食べることが好きで、料理をするのも好き。一日三回、朝昼夜の食事が一日の中でいちばん楽しみであり、幸せな時間だと感じる。

もぐもぐと熱い白米を咀嚼しながら、今日のスケジュールを頭の中で思い出してみる。この朝食を食べ終えたら、メイクして、着替えて、髪をセットして家を出る。授業は二限と三限だけだから、今日は割とゆっくりした一日になりそう。三限終わったら、気になってたカフェとか行ってみちゃおうかな。インスタで見つけた、栗を使った特製ケーキが食べられるっていうお店。栗。栗ご飯も久しぶりに食べたくなってきたなあ。帰りにスーパージョ寄って、栗売ってないかチェックしてみよう。結局食べ物のことに行きつく思考を巡らせながら、気づけばお碗と茶碗の中身は空っぽになっていた。ごちそうさまでした、と手を合わせて息をつく。今日も美味しくできた。

食器をシンクに置いて、スポンジに洗剤を垂らす。窓の外から入ってくる日差しが眩しくて、思わず目を細くしてしまう。秋なのに、今日も少し暑そう。

「おはよー、砂奈」

声をかけられて振り向くと、そこには眠そうな顔をしたすーちゃんが立っていた。

「すーちゃん、おはよ。授業間に合わなかったねえ」

「完全に寝坊した……。一昨日も寝坊して二限間に合わなかったのに」

全然反省しないわうち。終わってる。そう言っただけで前髪を掻き上げるすーちゃんは、とってもきれいだった。メイクもしていないのに肌はつやつやしてて、腰まで垂らした髪も寝癖がついたままなのに、ゆるくウェーブがかかったみたいに見えて、わざとそういう髪型にしたのだって言ってもみんな信じてしまいそうなくらいに違和感がなかった。袖のところが少しほつれているスウェットとジーンズをさらっと着ているだけなのに、手足が長いからすごくおしゃれに見える。

「さー、砂奈はいつも遅刻しないで偉すぎるよ、高校の頃から寝坊してるとこ見たことないもんなあ」

「私は朝ご飯抜きたくないからね、頑張ってる。気合で」

「さすがご飯に命かけてるだけある女。今日何食べたの？」

「お味噌汁と炊き立てのご飯だよ。お味噌汁は豆腐とわかめ」

「最高じゃん……」

「でもねぎ買うの忘れちゃって悲しかったんだ」

「うわー、味噌汁にねぎは必須だもんね。てか朝食食べなかったからお腹空いてきた、学食行こー」
「行こー」

すーちゃんは高校の頃からの友達で、同じ大学に通ってる今もずっと仲がいい。私がご飯大好きなのも知ってて、よく私が行きたいって言うカフェやレストランにも付き合ってくれるすごく優しい子。

「何食べよっかなー、揚げ物食べたいからトンカツかなあ」

「いいねえ、新メニューのチリソース唐揚げも美味しかったよ」

「砂奈が美味しいっていうなら間違いないじゃん、それにしょっかな」

周りの学生たちもみんな学食に向かっていようで、その波に乗って私たちも歩く。こんなにたくさん人がいるから、ちゃんと席に座れるかどうかいつも不安になってしまう。

学食の中には溢れんばかりの人がいて、色んな角度から話し声が飛んで降って響いてくる。人が少ない時にはBGMみたいな感じで流行りのポップスがかかっているのが聞こえるけれど、何層にも重なった学生たちの声のせいで音楽がかかっているのかどうかも分からないほどだった。

プラスチックのトレーに、デミグラスハンバーグと中盛りのご飯を取る。副菜は栄養を考えて小松菜のおひたしを選んだ。本当はもっと時間をかけてどのメニューにするか悩みたいのだけれど、昼休みの学食の混み具合を考えたらぐずぐずしてられない。後ろには終わりがすぐには見え

ないほど人が続いている。すーちゃんはチリソース唐揚げと小盛りサイズのご飯をさっと取って、もう会計の列に並んでいた。

やっとの思いで空いている席を二つ見つけて、すーちゃんと横並びでそこに座る。トレーや荷物を下ろして席に着くと、思わずため息がでる。

「座れてよかった、今日も人すごすぎるよ」

「まじでそう、学食のキャパ余裕で超えてるって。いい加減増設すればいいのにね、食堂」
すーちゃんが笑いながら言う。

「てか、チリソース唐揚げまじで美味しそう。砂奈のおすすめにして大正解だったわ」

「えへ、新メニューとか気になってすぐ頼んじゃうかいがありました」

手を合わせて、ハンバーグを口に運ぶ。デミグラスの濃い味が舌の上いっぱい広がって満たされた気分になる。すーちゃんもソースがたっぷりかかった唐揚げを思い切りよくかじって、うま、と小さく声を上げた。ざく、と衣を噛み切る音が耳に心地よかった。

ハンバーグを咀嚼しながらふと顔を上げると、テーブルについて各々の選んだ料理を食べている他の学生たちの様子が視界の中に入ってくる。鯖味噌、ごはん、唐揚げ、うどん、味噌汁、わかめの酢の物、ハンバーグ、親子丼、大学芋、マカロニサラダ、トンカツ。色も形も様々な食べ物が細かく刻まれたり、掬われたり、摘まみ上げられたり、挟まれたりして学生たちの口の中に消えていく。すごい光景だな、と思った。この学食で作られたとんでもない量の食べ物、この時間にそれぞれの胃の中に飲み込まれていくのだ。そして学生たち一人一人に連れ立って、食べ

物は学食を離れ、消化され、いずれ吸収されて学生たちの身体になっていく。

このハンバーグだってそうだ。私が今箸で持ち上げたこの一切れ、私が今口に含んで噛み砕いたこの一欠けら、私が今喉の奥に送ったこのわずかな量が、いずれ私になるのだ。そう考えると、まるで私は今、自分を食べているような気になる。ハンバーグが私そのものであるように見えてくる。お皿に乗っていたデミグラスハンバーグが形を変えて、一人の女子になっていく。少し肉付きの良い身体、高くも低くもない身長、朝ヘアアイロンでしっかりまっすぐにしてきたはずなのに、もうぐにゃりと曲がるようにうねっている髪を持つ女の子。時間をかけてメイクしたけれどなんとなく冴えない顔、無難な色のブラウスとロングスカートという、おしゃれに見せるといふより体型をごまかすことに特化したせいで印象の薄いスタイリングの服。お皿に乗った私が、全く同じ格好をした私を見上げている。

その視線にむっとして、私はお皿に向かってフォークを伸ばす。近づいてくる硬い銀色の塊を、お皿の上の私はぼうっと見つめているだけだ。構わずフォークをもっと近づけても、ただ瞬きを繰り返すだけで。フォークがその額の辺りに当たった。

と、その時、私は横から突かれてはっとする。

「砂奈ー？ 聞いてた？」

すーちゃんが不思議そうな顔をして私のことを覗き込んでいた。

「あ、ごめんね、ぼーっとしてた……。何て言ってたっけ」

「もー。今日の飲み会、砂奈も来るんだよね？ って話」

「今日の飲み会？」

思わずぼかんとした表情を浮かべてしまう。

「え、うん。同じ学科の人たちで集まって飲み行こうって話してたじゃん。……もしかして忘れてた？」

めちゃくちゃ忘れていた。ちょっと前にそういう話が持ち上がった時に、砂奈も行く？とすーちゃんに聞かれて、なんとなくの流れで私も行こうかな、と答えていたんだ。あれ今日だったんだ。

「何か予定入れちゃった？」

「ううん、何もないよ。シンプルに忘れてた……」

「なら行けるじゃん、良かったあ。砂奈あんまり飲み会とか積極的に参加する方じゃないから一緒に行けるのレアだね」

「私、お酒あんまり強くないからねえ。人と話すのも得意じゃないし。すーちゃんがいるなら安心して行けるや」

とはいえ、今からもうなんとなく緊張してきた。飲み会の間ずっとすーちゃんにべったりくっついてるわけにもいかないし、他の人と頑張って話さなくちゃいけないと思うと気が重くなってくる。今朝行こうと思っていたカフェも、飲み会があるなら行かないでおこう。残念だけど。

皿に視線を落とすと、食べかけのハンバーグが横たわっている。一欠けら口に運ぶと、もうそれは完全に冷めてしまっていて、さっきよりもしょっぱく感じるデミグラスソースの奥に、ほの

かに生臭い肉の匂いがした。

かんばしい、と明るく何度もぶつけられるグラスやジョッキの音に、思わず肩を震わせてしまう。煌々と明るい居酒屋の中は仕事帰りのサラリーマンや私たちのような大学生で埋め尽くされていて、四方八方をざわざわとした人の声が包んでいた。

カシスオレンジが入ったグラスを握る手の内側を、結露した水滴が零れ落ちていく。濡れた手をそっとおしぼりで拭くけれど、おしぼりも元から温かく湿っているせいで手の表面の水分量はそんなに変わらなかった。

飲み会に集まったのは二十人くらいだった。みんな明るくて、長年の友達のようにフランクに話している人たちばかりだった。同じ学科だからなんとなく顔に見覚えはある気がするけれど、まともに話したこともないし名前もはっきりとは思いつけない。私は端っこの席に逃げていて、隣の席にはすーちゃんが座ってくれていた。けれど、すーちゃんは話が上手だし、かわいいから他の人からしきりに話しかけられている。私はそれを微笑みながら見ることにしかできない。

唯一楽しみにしていたのはご飯だったけど、テーブルの上に並んでいるのは質より安さを優先している居酒屋ならではのクオリティの料理ばかりで、さっき解凍したばかりのような枝豆、衣がべちょっと潰れた唐揚げ、しおれたようなフライドポテト。食欲があまりそそられないものばかり。一口二口食べてもおいしいや、となってしまった。アルコールに弱い私は、じゃあお酒を楽

しもう、ともなれず、ただただグラスを握りしめることしかできない。

なんで来たんだろう私。流れで行くなんて言わなければよかった。

グラスに口をつけるけれど、その中に入っている液体は飲み込まずに、またグラスを下ろす。

「飲めないの？」

正面から声が飛んできて、ぎくっとする。顔を上げると、私の真向かいに座っていた男の人がこちらを見つめていた。

知らない人の多さに緊張してすーちゃんの方を見るか俯くかしかしていなかったせいで、ずっと目の前に座っていたはずのその人をきちんと認識したのはその時が初めてだった。少し長い、真っすぐな黒髪が目の辺りまで薄くかかっていて、影を作っている。その奥にある瞳は穏やかな光を湛えながら、じっと私の方に向いていた。その人は頬杖をついていて、軽く羽織った紺色のカーディガンの袖口から手首が見えている。その手首が恐ろしく細かい細くて、驚いてしまう。骨の形が薄い肉の下から浮き出ている。

「飲めない？」

私が黙ったままでいるので、その人はもう一度私に尋ねる。全然喋っていなかったせいで、私の喉の奥は糊付けされたように閉じていた。すぐに言葉が出ずに、私は焦りながらもなんとかして切れ切れに声を絞り出す。

「や、あの、全然お酒飲めないわけじゃないんですけど。弱くて」

たくさん音の音がざわざわと積み重なった居酒屋の空間の中では、あまりにも細くて小さすぎる

私のその声を、その人はきちんと受け取ってくれたようだった。少し唇の端を上を持ち上げて、応えてくれる。

「ね、だと思った」

さっきから見てたら、グラスに入ってるお酒の量全く変わってないから、と続けられて、思わず頬が熱くなる。お酒飲めないのばれてるし、そもそもも見られてることなんて全然気が付かなかったし。というか、こんな人同じ学科にいたっけ。覚えてない。名前は知ってるかもしれないけど、顔と結びつかないかも。

「すみません……」

「ははっ、何で謝るの」

反射的に謝ってしまった私に、その人が笑う。笑う、と言ってもバカにするような感じではなくて、ただ、静かに柔らかく表情を緩ませただけだった。その仕草を表すには、笑うという言葉よりも、微笑みを落とすとか言った方が正しいような気がした。

今私の頬にパン生地を押し付けいたら、こんがり綺麗なきつね色に焼けそう。そんなことを思いながら、視線をうろつかせる。すると、ふとその人の前に置かれていた取り皿が真っ白なことに気がつく。そのお皿の上には何も載っていないし、何かが載っていた痕跡すらも残っていない。よく見たら、配られた割り箸さえも使っていないようだった。割られていない状態のまま、箸袋の中にきっちりとしまわれている。私の視線に、その人が少し首を傾げた。

「あ、あの。何も食べないんですか？」

「あー、うん。お酒は飲んでるよ」

「……？ お腹、空いてないんですか？」

「うーん、まあ」

はっきりしない返事だった。ひょっとして、私と同じようにこういうところのご飯が口に合わないのだろうか、と思った。こういうところのご飯って、お酒と食べるものでもんね、とそれとなく言ってみると、その人は少し目を細めた。

「……というより、食べるの好きじゃないんだよね。料理関係なく」

「……え？」

思わず目を見開いてその人を見てしまう。彼は、変わらず細い手首で自分の顔を支えながら微笑みを落としている。

食べることが好きじゃない？

私は握りしめていたグラスから手を放す。

そんな人いるの？

野菜コーナーの端っこにあった小ねぎをとって、買い物かごの中に入れる。この前買い忘れたから、今日はスーパ―に入っていちばん最初にねぎを探した。ひんやりと冷やされた空間の中に積み上げられていたねぎは、鮮やかな緑色で、ぴんとハリを持ちながらまっすぐに伸びていき

れい。かごの中から少しはみ出す長さのそれを見る度に、満たされたような気持ちになる。

大学の帰りに寄ることの多いこのスーパ―は、私の住むマンションからいちばん近くて品揃えも豊富で便利だ。野菜コーナーを歩くと、安くてぴかぴか光る新鮮な野菜たちが私を見上げている。それら全部を家に連れて帰ってしまいたい。

最近はいつこく残っていた暑さもだんだんと影を薄くしていつて、朝や晩には肌寒さを感じることもある。温かいメニューが美味しい季節になってきた。何を作ろうかな。おいしそうな野菜が沢山あるし、久しぶりに鍋料理かな。

葉物、根菜、目についた野菜を吟味しながら買い物がごに入っていく。ふと、ずっしりと重みがありそうな白菜が目につく。何枚もの葉が隙間なく重なっている、とんでもない密度の白菜。しかも値段を見てみるとそんなに高くない。一玉分か、もしくは四分の一カットで売られていて、一玉丸ごと買ってしまった方がお得な金額だった。でも、一玉。一人暮らしで一玉。余らせてしまわないだろうか。それにこのスーパ―が家から近いとはいえ、こんなぎっしり詰まった白菜を抱えて帰るには重すぎるよね。一玉。四分の一カット。一玉。でも、こんないい白菜。買わないなんて。四分の一カット。一玉。四分の一カット。

スーパ―の自動ドアから出たところで、もう既に後悔している。

エコバック二袋分にもなってしまった食材は、とんでもない重量で私の身体を引っ張っている。袋の中を覗き込むと、丸々とした白菜が一玉、所狭そうに収まっている。結局欲望に負けて一玉

分を買ってしまった。私のバカ。明日は筋肉痛確定だ。白菜の他にも色々に野菜やお肉を買い込んでしまったせいで、今にも袋が破けてしまいそう。今からこんな大荷物を抱えて家まで帰らないといけないかと思うと、これが欲望に身を任せた人間の末路か、と思わず考えのスケールが大きくなってしまふ。私の身体大丈夫かな。

ともかく、帰るしかない。一步踏み出すと、肩や手の平の肉に袋の持ち手が容赦なく食い込んでくる。大きく息を吸い込んでそれに耐える。悲鳴を上げそうな身体の震えを無視して、もう一步踏み出そうとする。と。

「……佐東さん？」

誰かに呼び止められた。

袋の重みで傾きそうになりながら、やっとのことで声のした方に身体を向ける。そこに立っていた人を見て、ぎょっとしてしまふ。

「あ、え、家入さん……？」

そこにいたのは、数週間前の飲み会の席で私の真正面に座っていたあの男の人、家入さんだった。飲み会の時とは違って、少し厚手の生地のパーカーをラフに着ている。彼は耳に突っ込んでいたブルートゥースイヤホンを片方外しながら、驚いたように私のことを見ていた。

「偶然だね、ここら辺に住んでるの？」

「あ、ええと、こんにちは、はい」

考えだになかった邂逅に頭が真っ白になりながらも、なんとか彼の言葉に応える。

「俺もこの近くに住んでるんだ。買い物？」

「はい、あの、そうです」

領きながら、身体がエコバックの重さに耐えきれなくなつてふらついてしまう。家入さんがそれを見て、さっと手を伸ばしてくれる。

「大丈夫？ 持つよ」

そう言つて私の手から袋の持ち手を素早く奪つた彼は、え、と目を丸くする。

「……重くない？ 何が入ってるの、これ」

私は思わず頬を赤くする。

「はくさい……です」

「白菜？ 白菜ってこんな重いんだ。すげー」

「普段買わないですか？」

「買わないなあ、自炊しないから」

まるで初めて生の白菜を見た、とでも言うように新鮮に驚いている彼を見つめながら、あの飲み会の時に家入さんが言った言葉を思い出す。

食、べる、こ、とが、好、き、じ、ゃ、な、い。

食、べる、こ、とに、興、味、が、な、い、と、言、う、な、ら、分、か、る。食、べる、こ、とに、関、心、が、な、く、て、こ、だ、わ、り、が、な、い、人、な、ら、今、ま、で、出、会、つ、て、き、た、こ、と、が、あ、る。あ、ん、ま、り、量、が、食、べ、ら、れ、な、い、か、ら、少、食、だ、か、ら、食、べ、る、の、が、苦、手、と、い、う、人、も、知、つ、て、い、る。け、れ、ど、家、入、さ、ん、の、よ、う、に、好、き、じ、ゃ、な、い、と、は、っ、き、り、言、い、切、つ、た、人、

を前にしたのは初めてだった。

だって、食べることって皆避けては通れないでしょう？ 食べることは、息をすることと同じだ。生きるために必要不可欠なこと。息をするのが好きではない、と言う人なんて多分この世にいないだろう。息をしなければ死んでしまうのだ、そもそも好き嫌いの天秤に載せることではない。食事だってそうで、人間は何かを食べなければ死んでしまうのに。

家入さんは、白菜の入ったエコバックを担ぎ直して言う。

「佐東さん？ これ、よかったら運ぶの手伝おうか。俺、どうせ今日は暇だし」

「え、そんな」

まだ今回を含めて二回しか話したことのない人に、重い荷物を持ってもらうなんて、あまりにも図々しい。すぐに断ろうとして口を開く。でも、あの手や肩に食い込む重さを思い出したら手伝ってほしいというのが正直なところだった。いや、でも、流石に申し訳なさが勝つ。

「大丈夫ですよ、家すぐそこだし」

「そう？ でも、さっき荷物持ちながら、すごい絶望的な表情してなかった？ だから思わず声かけちゃったんだけど」

「見てたんですか！」

恥ずかしい。飲み会でもお酒を全然飲めていないところを見られていたのに、野菜買いすぎて絶望してるところまで見られてしまうなんて。もう私の頬はパンどころか分厚いステーキまで綺麗に焼けてしまいそうなくらい熱かった。

「あはは、うん。家どっち？」

荷物の重量に苦しんでいるところをばっちり見られてしまっていては、もう抵抗することもできなくて、自分の住むマンションの方向を指さす。家入さんは白菜の入った袋を軽々と持ちながら歩き始めた。長袖のTシャツの袖のところから細い手首が見えて、私より細いと言っても過言じゃなさそうなくらいなのに、どこにそんな力があるんだろうと思う。

スーパ―から私のマンションは本当に近いので、まともに新しい話を広げる時間もなく、少し歩いたら到着してしまった。

「ほんとにごめんなさい、持ってもらっちゃって」

「全然、ちょうどいいタイミングでよかったよ」

家入さんからエコバックを受け取ると、ずしりとした重さが手の中に帰ってくる。

「白菜で何作るの？」

「え、えーっと、鍋にしようかなって。あと、浅漬け作ったり、マヨネーズと混ぜたりしても美味しいから、それですかね」

「へえ、料理得意なんだね、佐東さんって」

「食べるの好きなんで……」

何の考えもなくそう返してから、はっとする。しまった、無神経だったかな。私は食べるの好きなんで、なんて、食べるの好きじゃないって言ってた人の前で言うことじゃなかったかな。皮肉とかに捉えられてたかどうかしよう。

おそろおそろ家入さんの表情を伺うけれど、特に気分を害した様子はなくて安心する。

家入さんの顔は、少し青白い。肌には血色感がなくて、長い前髪が影を作っているのも相まって、吸血鬼がいたらこんな感じなのかな、なんて少し思う。失礼かもしれないけれど。

もしかして、貧血？ はたと思ひ至る。ご飯を食べるのが好きではないなら、きちんと食事を摂っていないんじゃないだろうか。実際、飲み会の場でも全く料理に手をつけていなかったし。

「佐東さん？」

彼の顔を見ながらじっと考えこんでしまった私に、家入さんは少し微笑みを落として声をかける。

「じゃあ、俺そろそろ行くから。部屋まで気をつけてね」

そう言って、さっと踵を返そうとした家入さんに、思わず声を上げてしまう。

「ちょっと、ちょっと待ってください！」

家入さんが、びくっと身体を震わせて私のことを見る。一年に一回出さなにかくらの大声が出てしまった私のことを。もう頬はパンも肉も一瞬で黒焦げにしてしまうくらいの熱を帯びているけれど、そんなのは今どうでもよかった。

「ご飯……、食べていきませんか」

「え？」

「ご飯です。ご飯」

家入さんは、宇宙人でも見たかのような顔をして私を見ていた。

「あの、本当に家が上がっちゃってよかったのかな」

家入さんが居心地悪そうに身じろぎしながら、尋ねる。

「いえ、すみません……、完全に勢いで」

私は、自分の部屋の真ん中に置いてあるローテーブルの所に座っている彼に深々と頭を下げた。ご飯を作りますから、ぜひ食べていってください。そう言って半ば無理矢理家入さんを引っ張ってきた、さっきまでの私を責めたい。人を家上げることなんて滅多にないし、上げたとしてもそれはすーちゃんがほとんどだし、ましてや異性を招くなんて一度だってしたことがないのに。あの青白い顔をどうにかしてあげたい。そう淡く思っただけで、こんな大胆な行動ができてしまう私にびっくりする。

「あの……、強引に連れてきてしまっただけで、嫌だったらいつでも帰って大丈夫ですからね」

「あはは、全然嫌じゃないよ。ちょっと驚きはしたけど」

嫌な顔を全くせずに応えてくれる彼に、申し訳なさが募る。私は、キッチンで存在感を放っている白菜に目を向ける。結局、家入さんに部屋まで持ってきてもらってしまったのだった。

どうしよう。ご飯を作りますなんて偉そうに言っただけで、別に私は料理のプロというわけでもないし、ただ食べることが好きなだけで、自分好みの味になれば満足する程度の料理スキルしか持っていない。おしゃれな料理を作るわけでもない。

けれど、どうしたって目が行くのは、ローテーブルに両肘をのせてこちらを見ている家入さんの手首や、その身体の薄さ。何かしたい、どうにかしてあげたい。

「……あの、家入さんって普段何食べてるんですか？」

「え？ 普段？」

少し考えて、家入さんが首を捻る。

「何だろう。家の近くのコンビニで適当に買ったパンとか、プロテインバーとか？」

「三食それなんですか？」

「三食？ いや一食とか、食べても二食だね、毎日。食べない日もたまにあるけど」

「た、足りるんですか？ それ」

「うん、まあ。……俺あんまりお腹空かないし」

信じられない。ご飯の時間が三食以上あればもっといろんな料理を楽しめるのに、なんて常々思っている私とは似ても似つかない。

「アレルギーとか、好き嫌いとか、食べられないものが多いんですか」

「ううん、食べようと思えば何でも食べられるし、アレルギーもないよ」

ますます分からなくなってきた。何か特定のものが嫌いなんじゃないくて、食べること、その行為自体が嫌いなもの？

というか、毎日一食をずっと続けてるなんて、そりゃ顔色も吸血鬼並みの青白さになるだろうし、身体も細くなるに決まってる、よく倒れないな。

食べることが好きじゃない。その言葉を心の中で反芻するたびに少し悲しくなる。食べることが好きな私ごと否定されているみたいだった。毎日三食の楽しみを、味わずに生きているなんて、そんなの。

「……テレビとか、好きに見ていいですからね」

そう言って、彼からキッチンの方へ向き直る。白菜を持ち上げて、まな板の上に置く。気づけば私の頭の中には、作りたい料理の完成図が浮かんでいた。それは私がよく作るメニューで、白菜を使った料理の中でも特に好きなものだった。

白菜の葉を、一枚剥がしていく。ぱりっという音がして、みずみずしく潤った白色の葉脈が根元の部分で折れる。白菜の葉は、感触が面白い。葉の根元の方は固く密度があってつるつるした手触りをしているのに、葉先の方は薄くてくしゃくしゃと縮れたようになっていた。葉を全部で四枚くらいちぎったら水洗いする。その後、冷蔵庫から薄切りの豚肉を取り出して、白菜と肉を交互に重ねていく。地層を一つずつ作っていくみたいに。出来上がった地層を、食べやすい大きさに包丁でぎくぎくと刻んでいく。

切り刻んだそれを、両手鍋の中に敷き詰める。粉末出汁を入れて、調味料をばっと回しかけて、コンロにかける。あとはこのまま煮れば大丈夫。

そっと後ろを振り返ると、家人さんは窓の外をぼんやりと眺めていた。その様子は、暇を持っているようにも、料理をしている私から目を逸らそうとしているようにも見える。私が見ていることに気がついて、彼が小さく微笑みを落とす。彼はそのまま、何も言わなかった。

時間が溶けるって表現は、こういう時に使うんだろうな、と思った。何も言わずお互いを見合っているうちに、時間は二人の視線が合わさる辺りのところで煮込まれて、とろとろと溶けていく。彼は私を見ている。私も彼を見ていた。

不意に、蒸気の吹きだすような音がして振り返ると、火にかけた鍋が沸騰して今にもこぼれ出しそうだった。嘘、そんなに長く時間が経った体感ではなかったのに。慌てて火を弱めて具材の様子を見ると、豚肉にも白菜にもしっかり熱が通っていた。

お玉ですくって、器に盛り付ける。出汁と、味付けに使った醤油の匂いが混ざり合って立ち上った。仕上げに小ねぎを細かく刻んで、ぱらぱらとかける。

彼と私の二人分を、ローテーブルの方へ持って行く。家入さんは、私の動き一つ一つを目で追っている。彼の前に料理を差し出すと、彼は少し目を見開いた。

「これは？」

「白菜と豚肉のミルフィーユ鍋、です」

家入さんは、目の前にあるそれにすぐに手を伸ばさなかった。じっと見つめて、少し困ったような表情を浮かべている。

「あー、やっぱり僕さ。……」

「……、食べるの、好きじゃないんですね」

「……うん」

分かってるならこれは何なんだよ、って思ってるだろうな。でも。

「でも、食べてはしくて」

彼が一度、大きく瞬きをする。

「私、食べるの好きなんです。だから、正直家入さんが食べるの好きじゃないって思うの、分からない」

器の中に入っている地層のような白菜と豚肉の断面から、湯気が立っている。

「好きなものを好きじゃないって言われるの、悲しいなって思ってる」

私の分の鍋が入ったお皿を、手の平で包む。じんわりと器越しに熱が伝わってくる。

「別に、これ食べたらず絶対食事好きになるとか、そんな自信があるわけじゃないんですけど。だけど、食べてほしいって思いました」

家入さんに、私の作った料理を。そして、あわよくば、ちょっとだけ好きになってほしい。食べることを。

「ほら、あの、パンとかプロテインバーとかだけだったら、栄養偏りますから、たまにはビタミンとか摂ってほしいな、って。家入さん顔色……、悪いですし、正直」

家入さんは、黙って聞いていた。私のことを見ながら、細い手首を使って頬杖をつくことはせずに。彼は、私を見て、その後に目の前に出された料理を見下ろす。しばらく考えた後に、家入さんは静かに微笑みを落としました。

「……そこまで俺のこと気にしてくれるの、何で？」

何で、なんて分かり切ってる。私と違う人がいたら気になるのなんて当たり前だ。

家入さんは、自分の長い前髪を少し手で払って、息をついた。そして、私が器の傍に置いていた箸に手を伸ばす。

「いただきます」

小さな声だった。彼はそっと器を持ち上げて、白菜に挟まれたお肉を箸で取る。その喉仏が軽く上下に動いたような気がした。

味や出汁が飲み込んでいるはずのそれを、家入さんが口へ運ぶ。白く立っていた湯気ごと、彼の口の中に飲み込まれていく。ゆっくり咀嚼する彼。白菜が、さく、と噛み切れる音がした。一回、また一回と顎を動かして、時間をかけて彼は具材を飲み込む。彼の眉尻が上がった。

「……食べられる」

「えっ」

家入さんは、もう一度箸で白菜と豚肉を口の中に入れる。しっかりと噛み砕いた後で、喉を動かして、彼はそれを身体の奥へと導いていく。

食べられる、と彼はもう一度呟いた。

そして私の顔をまじまじと見つめる。何をしたの？ とでもいうみたいに。

何もしていない。ただ私はいつも通りご飯を作っただけだった。手をつけずに帰ってしまった。何か、一口で食べることを止めてしまわれることも覚悟していたけれど、彼はゆっくりと、けれど着実に器の中身を減らしていく。

そして、しばらくすると彼が器をこちらに見せてくる。

器の中身は空っぽだった。

彼を見ると、彼は私の顔を真っすぐ見つめていた。視線が混ざり合って、また時間が溶けていく。

差し出された器は空っぽだったけれど、私の心は何かで満たされている。何か、少し温かいものに。

彼を待っている。

私は、大学を出てすぐのところにあるコンビニにいた。

手には、レジの横で売られていた肉まんがある。まだ熱いくらいに温められた肉まんは、包み紙の中でそのつやつやした身体を横たえている。食欲に負けて連れてきてしまった肉まんのおかげで、夕方冷え込んでいる空気の中でもなんとか身体を震わすことはない。

授業終わり、後は帰るだけの予定だったのだけれど、スマホを見たら彼から連絡が入っていて、今から落ち合うことにしたのだ。いつもは同じ授業を取っているすーちゃんと家まで歩いて行くのだけれど、今日は寄るところがある、と言って別れてきた。

彼と付き合っていることは誰にも言っていない。すーちゃんにもだ。隠し事をしているのは少し心苦しいけれど、気恥ずかしさが勝った。私はほとんど恋愛経験もないから、付き合う、という関係性になるのは彼が初めてだった。だから、いざ人と恋人同士になってみるとわざわざ周りに

「あの人と付き合ってます」と宣言するのが恥ずかしくて仕方がなくて、未だに誰にも報告できていないのだ。

肉まんが冷める前に来てくれるだろうか。そんなことを思っていると、砂奈、と、どこから名前を呼ばれた。

周りを見回していると、見覚えのある顔がこちらに走り寄ってきた。彼だった。

「ごめん、お待たせ」

「全然待ってないよ、肉まん買った」

「肉まん」

「^{しおみ}汐見くんも食べる？」

包み紙ごと差し出すと、家入汐見くん、もとい汐見くんは微笑みを落とす。

「んー、砂奈が食べてるものならもらおうかな。いいの？」

「もちろん。汐見くんに一欠けらも渡さないほど鬼じゃないよ、私」

肉まんを二つに割ると、中から勢いよく湯気が溢れ出してくる。汐見くんに半分渡すと、彼はありがとう、と言って小さくかじった。

「おいしいね、あったかい」

私も肉まんにかぶりつくと、細かく刻まれた筍とお肉がふわふわの生地と一緒に口の中に入ってきて、あったかくて、幸せだった。

汐見くんは、少しずつだけ、ちゃんと食べることができるようになっていた。私と付き合う

前はコンビニで済ませて、一日一食しか食べていないことも多かったらしいけれど、私が白菜と豚肉の鍋を彼に作ってから、仲良くなって、付き合うようになった後、彼はちょっとずつ食べる量を増やしていった。コンビニの簡素なパンとかプロテインバーとかではなくて、私の作ったご飯とか、外食でも、私と一緒に食べるものなら食べられるようになっていた。成人男性の平均的な食事量には全く及んでいないけれど、汐見くんにとってはかなりの成長だった。食事が好きではない理由は彼がはぐらかすからまだ聞けていないけれど、少なくとも前ほど食事を敬遠しているわけではなかったから、私は嬉しかった。

「今日、夜ご飯どうする？ 一緒に食べる？」

そう訊くと、汐見くんは目を細めて頷いた。

「砂奈は何が食べたい？」

「んー、あったかいものかな、寒いし。汐見くんは食べたいものあるの？」

「あれがいい、白菜と豚肉のやつ」

「先週も作ったよ？ ほんとに好きだね、あの鍋」

「うん、超好き」

「じゃあ、スーパ―寄って白菜買っていいこうね」

空になってしまった肉まんの包み紙をくしゃくしゃと丸めて、近くにあった燃えるゴミのゴミ箱に捨てる。汐見くんを見ると、彼はまだ肉まんを一生懸命咀嚼していた。それを見ると、汐見くんが手に持っている自分の分の肉まんを私の口の中に押し込んでくる。

「砂奈食べて。俺時間かかって待たせちゃうから」

「えー、汐見くんがちゃんと食べなよ」

けれど、もう汐見君の分の肉まんは全部私の口の中にあった。しょうがなくそのまま囁んで飲み込むけれど、それは冬めく空気のせいで既に少し冷めていた。

「行こっか」

そう言って私の手を取る汐見くんの顔は、前と比べてかなり血色がいい。長めだった前髪は目がちゃんと見えるくらいに切るようになって、顔に影が落ちることもなくなった。細い手首はちょっとやそっとじゃ変わらないけれど、でも心なしか前ほど骨は浮き出ていないような気がする。

彼が何を食べているのか、今の私には全て分かる。それくらい、私と汐見くんは同じものを一緒に食べていた。今日も同じものを食べる。そう思うと、たまらなく満たされた気持ちになるのだ。白菜、安いといいな。どれだけその白菜が重くても、今の私は困ることはなかった。彼がいるから。

恋人とか夫婦とか、長い間一緒にいる人同士は次第に似てくると言うけれど、同じものを食べているならそれはそうだろうと思う。同じもので作られる身体が、同じもので作られたエネルギーで動く思考が、同じものになっていくことなんてとっても不思議じゃない。

私たちが傍から見たら似てきているのだろうか。

キッチンの床が冷たすぎて、靴下を履いた。冬が深まるにつれて、どんどん空気は鋭さを増していくような気がする。コンロの上に置きっぱなしの鍋の中には、昨日多めに作っておいたクリームシチューが詰まっていた。大きく切ったじゃがいもや人参がごろごろとたくさん入っていて、私好みのクリームシチュー。彼も気に入ってくれたみたいだったから、今日の朝もこれを食べよう。今までに言われたことはないけど、もし昨日と同じメニユーだと飽きると言われたら、ご飯の上にかけて、とろけるチーズをたくさんせて、オーブントースターで焼いて簡単にドリアを作ろう。

足音が聞こえたので振り向くと、起きてきた汐見くんが眠そうに目を擦っていた。

「おはよ、……起きるの早くない？」

まだ半分夢の世界にいるかのような声だった。舌が回っていない。

「朝ご飯作りたかったから。まだ時間かかるから、寝てていいよ」

彼は私の言葉に少し口を尖らせるようにして、目が覚めたら横にいなかったから何かと思った、と小さい声で呟いた。私は思わず笑ってしまう。

「いつもそうじゃん。汐見くん朝弱いんだから、一緒に寝てたらご飯食べられなくなっちゃうよ」

「今日日曜日だから、何も予定無いんでしょ？ まだゆっくりしようよ」

「してていいよ？」

「砂奈と一緒にゆっくりしたいってことだよ」

寝起きのせいなのか、いつもとは違って子どもみたいに駄々をこねる彼が可愛いと思った。

「ちょっと待ってね、すぐ温めるから」

「……」

コンロを点火して、シチューを温める。パンは昨日の夕食の時に全部食べてしまったから、ご飯しかなかったはず。冷蔵庫にタッパーに入れた白米がいくつかあるから、それをレンジで温めればいい。

「汐見くんも食べるよね、冷蔵庫からご飯取ってくれない？」

彼は冷蔵庫の中からタッパーを取り出すけれど、それはどう見ても一人分の量だった。

「俺、もうちょっと寝てくるから食べと言って。眠くて」

「あ、うん。ありがとう」

彼の手からご飯を受け取って、電子レンジに入れる。彼はまたベッドに戻ろうとしているようだった。裸足で寒そうな彼の足首は細い。キッチンを出て行くところの汐見くんに、そういうえげと問いかける。

「今日の昼と夜、何食べたい？ 起きたら、後で買い物行こうよ」

彼は、少し考えて首を横に振った。かなり伸びて来た前髪が、目の上で一緒に揺れた。

「ごめん、今日夜に友達と飲むことになったからご飯はいいや。砂奈の好きなもの食べてなよ」

「あ、そうなの？ 前から決まってたっけ、それ」

「いや」

「いつ誘われたの？」

「さっき」

じゃあおやすみ、と彼はまた眠りに戻っていく。

少し寂しい気持ちを抱えながら、私は温めている途中のクリームシチューに向き直る。お玉でかき混ぜると、もったりとした重さが絡みついてくる。じゃがいもがちょっと溶け込んでしまったのか、その質感はさらさらというよりどろどろしていた。

可愛そうに、あなた今日は汐見くんの身体を作れないね。

「砂奈、何かあった？」

すーちゃんが心配そうな顔をして、覗き込んでくる。

「え？」

「なんか、今日ずっと難しい顔してるからさ」

大学の構内にあるベンチに、私たちは並んで座っていた。あまりにも人が多すぎて、今日は学食に入ることができなかったのだった。慌てて買ってきた総菜パンと、紙パックのカフェオレを手持ちながら、冷たい空気に吹かれているせいで体温はどんどん下がっていく。

「んー、何にもないよ。大丈夫」

「そう？ 気のせいかな、ごめんね」

そう言ってメロンパンをかじるすーちゃんを見ながら、ため息をつきそうになるのを堪える。何にもない、ことはない。けれど、それは汐見くんについてのことだから話すことはできなかった

た。付き合ってもうかなり経つけれど、まだ汐見さんと恋人同士であることは誰にも言えていなかった。

すーちゃんの言った通り、難しい顔をしていた自覚はある。汐見さんと、最近ちゃんと会えていないな、と考えていたからだった。

汐見くんは最近新しいアルバイトを始めたとか、授業の課題が忙しいとかで、いつの間にか滅多に私の家に来ることが無くなっていた。一緒にご飯を食べることも減った。

汐見くん、今何を食べているんだろう。今の私には、彼が何を食べているのかも分からない。またコンビニで簡単に済ませてないかな。ちゃんと栄養のあるものを食べてくれていたらいけれど、彼は自分で料理を作らないし、望みは薄そうだった。

「砂奈がさ、この前行って美味しかったよって言ってたカフェ、ここだったけ？」

すーちゃんがインスタの画面を見せてきたので覗き込むと、先週一人で訪れたカフェのアカウントが表示されていた。前から行きたかった、栗を使ったケーキを提供するカフェ。汐見くんを誘ってみたけれど忙しいみたいで断られて、すーちゃんに声をかけたら予定があると言われたから、しょうがなく一人で行ってきたのだった。栗のケーキは、しっとりしたスポンジとまろやかな栗の特製クリームが合わさってとっても美味しかった。

「そうそう、おすすめだよー」

「めっちゃ行きたい、この前砂奈と予定合わなくて超落ち込んだもん。今度いつ暇？」

「んー、ちょっと直近はバタバタしてるかな。栗のケーキ、期間限定でもう少しで終わっちゃう

みたいだから早めに行った方がいいかもよ？」

「え、マジか……。誰か誘って行こうかな」

カフエオレが底をついて、ず、と音が鳴る。ストローを無意識のうちに強く噛んでしまったみたいで、口をつけたところがひしゃげていた。今日、汐見くんは電話をかけてみようかな。メッセージアプリ上でテキストのやり取りは二、三日に一回しているけれど、もうしばらく汐見くんの声を直接聞いていなかった。あの落とすような微笑みが恋しい。

結局、その日は汐見くんは電話に出てくれなかった。時間を変えて、三回かけてみたけど、規則的なコール音が繰り返されるだけで、悲しくなってそれ以上連絡を送ることはできなかった。やっぱり忙しいのかな。

次の日、なんとなくスマホをいじっている。汐見くんと一緒に食事を摂らなくなると、時間が有り余っている。すーちゃんにはバタバタしていると言ったけれど、実際はそんなことはなくて、ただすーちゃんに甘えてばかりだと悪いなと思ってそう言っただけ。汐見くんが居ない食卓はなんとなくやる気が出なくて、最近はまだ手間のかからないメニューばかりだった。今日は、白菜と豚肉のミルフィーユ鍋にした。さっと作れて簡単だし、汐見くんがよく作ってくれと頼むせいで、常にこの鍋に必要な材料は私の家に揃っていたからだった。

しつとりと煮込まれた白菜と豚肉は美味しいけれど、どこか無機質な味がする。よく温めたはずなのに、冷蔵庫にさっきまで入れていたものをそのまま食べているような気分になった。

気を紛らわせようと、スマホを開く。普段は食事のときにスマホやテレビなんて見ないのだけれど、まあいいやと思った。どうせ私一人しかいないのだから。

インスタを開くと、色とりどりの写真たちが出てくる。ふと気づくと、すーちゃんが新しい写真を自分のアカウントに上げていた。

それはよく見覚えのあるケーキの写真で、昨日私がおすすめしたカフェの栗のケーキだった。行ってくれたんだ、期間終わる前に間に合ってよかった。今度会った時に感想を聞くのが楽しみ。そう思って、写真をじっと見つめていると、あることに気がつく。

すーちゃんの頼んだであろう栗のケーキの向こうに、もう一つ同じケーキが写っている。誰か誘おうかな、とは言っていたから一人で行ったわけじゃないことは分かっていたけれど、誰を誘ったかまでは知らなかった。すーちゃんの前に座っている人は、見切れていてはつきりと誰かまでは分からない。けれど、その人は机の上に腕を乗せていて、それがケーキの向こうに写り込んでいる。

その手首を見て、はっとする。

骨が少し浮き出ているくらいに細い、あの手首。

何度も見てきたから、見間違えるはずがなかった。

汐見くんだ。

どういうこと？ 私はスマホを取り落としそうになりながら、もう一度その写真を見る。細い手首。汐見くんの手首。見切れている服にも見覚えがある。

なんで汐見くんがすーちゃんと一緒にあのカフェに行ってるの？

二人に、繋がりがあるなんて知らなかった。大学で話しているところなんて見たことがなかったし、お互いのことを私の前で言及したことも聞いたことがない。学科は同じだし、あの飲み会には一緒にいたけれど、その場でも言葉は交わしてはいなかったはず。

私の身体は震え始める。温かいものを食べていたはずなのに、私の身体は今や芯から冷えたようになっていた。

浮気、ではない？ ただ友達として、一緒にカフェに入っただけかもしれない。すーちゃんは私と汐見くんが付き合っているのを知らないはずだし、汐見くんはすーちゃんが私の友達だと認識しているのかも分らない。分からない、浮気かもしれない。でも、浮気なら私が見ることのできるインスタにこんな写真載せないはずだ。だから浮気ではない。けれど。

浮気されているかもしれないという可能性よりも私がショックだったのは、二人が、あの店で、あの栗のケーキを食べたという事実だった。二人は私のいないところで、同じケーキを食べたのだ。私は今一人でこの白菜と豚肉の鍋を食べているのに、汐見くんとすーちゃんは同じものを、二人で食べていたのだ。

ひどい、と思った。視界が歪む。スマホの液晶に水滴がぼたぼたと落ちる。

この写真の中に私がいけないことが、その店で一人で私が先週ケーキを食べたことが、脳味噌の中を何回も浮かび上がってきて苦しい。インスタを閉じて、メッセージアプリを開いて、汐見くんにテキストを送る。ガクガクと身体が震えるせいで、何度も何度も打ち間違えてしまう。

『すーちゃんとケーキ食べたの?』

やっとそれだけ送る。

すぐに既読がつく。

もうそれ以上画面を見られなくなる。

久しぶりに私の家にやって来た汐見くんは前に会った時よりも痩せていて、初めてあの飲み会で出会った時のようだった。

元気? と聞くのも何だか白々しくて、それは向こうも同じようで、すぐに沈黙が訪れる。お互いを見つめ合っているのに、何の熱もその間には生まれなくて、ただ虚しかった。

「……あの人は別に付き合っていないよ」

長く伸びた前髪が、彼の目元に影を作って隠していた。

「ただ誘われたから一緒にカフェに行っただけ」

細い手首は、今日はシャツの中にしまわれている。

「でも、砂奈と付き合ってるのに女の人と二人でどこかに行くことが、どういうことかはちゃんと理解してた」

この状況を砂奈が見たら、傷つくことも。そう続けた彼は、私の顔を見つめ続ける。
「私が傷つければいいと思ってた?」

やっこのことでそう絞り出すと、彼はちょっとだけ首を傾けた。否定でも肯定でもないみたいに。

「傷つけばいいというか、……この関係にヒビが入ればいいなとは思った」

ごめんね、と彼は呟く。

「砂奈と一緒にいるのしんどくなったんだ」

だから最近避けてた。

「どうして？」

泣かないように口の中を嚙む。跡がついてしまいうまくないに強く。

「……砂奈は俺のこと好きじゃないから」

驚いて目を見開く。

「何それ、……そんなことないよ。好きだよ」

彼はそっと首を振る。

「砂奈が好きなのは、俺じゃなくて、食べることでしょ」

彼が何を言っているのか分からなかった。

食べることは好きだよ、もちろん。けれど、食えることが好きだということ、汐見くんが好きだということは、同じ土俵に上がるわけがない。ベクトルが違いすぎて、比べるようなことではない、はずだった。

「俺が食えることが好きだったら、砂奈は俺に対して興味なんて持たなかったでしょ」
汐見くんの言葉の意味を咀嚼する。

「そんなことない、よ」

「そんなことなくないよ。最初、スーパーの前で会った時、ご飯を食べませんでしたって言ってくれたよね。俺のことを心配してくれたのかなって思ってた。俺が痩せて、顔色が悪いから心配してご飯を食べさせてくれたのかなって」

でも違った、と彼は言う。

「砂奈は自分の好きなものを否定されたのが嫌だったから、俺にそれを訂正させたかっただけなんだよね」

思えば、砂奈のいちばんはずっと食べることだったよ。そう言って、汐見くんは悲し気に目を伏せる。

「例えばさ、一緒に寝てても、朝ご飯のために俺を一人で残して行っちゃうし。俺は二人の時間がほしかったし、ご飯のことなんて考えないで俺のこともっと見てほしかったよ」

私の頬は、濡れて冷たくなっていった。できることなら彼の言葉を飲み込みたくなかった。

「砂奈の世界には食べるのが好きな人しかいないくて、だから俺が目立ただけなんだって、そういう時に強く意識しちゃって悲しかった」

俺はね、と汐見くんの声が少し震えた。

「俺が食べることが嫌いなのは、母親のせいだね。母親が、無理矢理食事を摂らせるような人だったんだ。毎日三食は必ず、栄養バランスは完璧に、嫌いなものだって全部食べなきゃ叩かれる」
彼は言葉を吐き出し続ける。

「大学に入って、母親から離れたら、食事が全くできなくなってた。口にものを運ぶ度に、必死に食べ物を詰め込んだ記憶とか、えづきそうになって冷や汗が出る感触とか、母親の手の硬さとか、いろんなことを思い出しちゃって、苦しくなって、まともに食べることができなくなった。それからどんどん痩せて」

彼の青白い顔が小さく歪んだ。

「食べ物美味しいなんて、思ったことなかったんだよ。……でもね、砂奈が初めて俺に作ってくれた料理、本当に美味しいと思った。初めて自分から、ものを食べたい、と思えた」

彼が目を伏せる。

「俺のことを考えて作ってくれたんだなと思って嬉しくて、砂奈のこと好きになって、付き合ってた。でもしばらくしてから思い至っちゃったんだよ。砂奈は俺のことより、食べるの方が大事なんだなって」

違ふよ、と言えばよかった。そう言っただけで、汐見くんの話を遮って、止めてしまえばよかったんだ。けれど、声は海苔のように喉の奥に張り付いて出てこない。

「そう思ってしまったら、もう砂奈と一緒にいるの辛くなっちゃったし、砂奈と一緒に食事もできなくなってる、砂奈のこと避けてた。でもこうやってちゃんと全部話すの怖かったから、女の人と出かけたりにしてなんとなくヒビ入れられないかなって思ったりして。あの人には利用するような真似して悪かったけど」

思えば、私は彼になんて残酷なことをしたんだろう。食べるのが好きではないと知っていなが

ら、彼に料理を食べることを強いて、食べることを、自分の好きなことが否定されるのが嫌だから、彼の嫌いを否定した。彼のそんな葛藤も知らずに。私だって、彼の母親と同じようなものなんじゃないの。

「砂奈のこと、責めてるわけじゃないよ。砂奈が悪いことをしたわけでもないよ。悪いとしたら勝手に傷ついて勝手に離れてった俺の方が悪いし」

彼が微笑んで、私の顔を見る。

「ただ、食い違ってただけだと思うんだ、俺たち」

薄く、顔に貼り付けたような笑顔だった。

「好きなものとか、求めてたものが、食い違ってただけで」

ごめんね、と彼は静かに繰り返す。

ごめんね、と私も返したかった。

返したかったのに。

彼と別れた後から、何も口にしていない。

今まではお腹が空いたら食べたいものがすぐにぼんぼんと浮かんできていたのに、食欲も食べることへの熱意も全く消え失せてしまったみたいだった。何かを食べようとすると、汐見くんのあの最後の薄い微笑みが思い出されて、喉が自然と閉まって食べ物を受けつけなかった。

あれから何日経っただろう？ 大学にも行く気がなくなってしまうて、外にも全く出ていない。曜日感覚なんてとっくの昔に死んでしまった。ただ部屋の中で、汐見くんとのことを思い出して、彼のことよりも食べることを優先してきた私のことを恥じて、彼のことは見ているようで、自分の欲求を満たすための手助けにしていた私のことを悲しく思った。このまま水分も養分も全部身体の中から消え失せたらいいとさえ思った。

スマホは見えていない。何度も通知音を鳴らしていたけれど、汐見くんはもう連絡してこないだろうから多分すーちゃん。すーちゃんにも会いたくなかった。すーちゃんは何も知らなかったとはいえ、彼女を前にしたらきつと汐見くんのが勝手に頭に浮かんで苦しくなる。

泣いて、意識を飛ばすように寝て、また起きては泣いて。

それを繰り返すだけの時間がずっと重なっていく。

次第に、頭と胃が痛みだした。脱水症状と、空腹のせい。頭はふらふらしてきて、身体はありえないくらい重い。まともに考えも働かなくなってきた。ああ、これは駄目だ。

もう這いずるようになって、冷蔵庫の前まで辿り着く。もう立ち上がるエネルギーさえ残っていなかった。冷蔵庫の扉は信じられないくらい重くて、両手を使って、全体重をかけても開かなかった。こじ開けるようにして、やっとのことで冷蔵庫の中を覗き込むと、そこはほとんど空と言ったいいほどだった。ひんやりとした空気が私の顔全体を包む。

手をつっ込んで何かないかと探ると、手の平が何かに触れた。よく見ると、そこには使いかけの白菜がラップに包まれて置いてあった。ちょうど四分の一カットくらいの大きさのそれは、た

しかしすーちゃんのインスタであの写真を見た日に作った白菜と豚肉の鍋の残りだった。

ひったくるように掴んで、ラップをびりびりに引き裂く。気づけば、口の中には唾が溜まっていた。そんな水分、どこにあったのだろうか？

重なった葉のうちの一枚を、雑にむしり取る。白菜は、少し萎れて柔らかかった。一枚の葉を、食べやすいように小さくちぎることも切ることもせず、私はそれを口の中に押し込む。

少し青臭い匂い。歯を立てると、ぱり、と弱々しい音がした。嚙む度に、歯が食い込んだところからわずかに葉の中に残されていた水分が染み出してくる。

ぱり、と更に私は口の中に白菜を突っ込んで、咀嚼する、飲み込む、嚙み砕く、ちぎる、嚥下する。美味しい、と思った。数日間何も与えられていなかった身体は、全身で目の前の白菜を求めている。

白菜を一心不乱に食べている間に、汐見くんの顔がかすかにちらつく。少し胸が痛んだけれど、それでも白菜を口に運ぶことを止められない、それでも食べることをやめられない、わたし。

食べることをやめられない。食べることを忘れることなんてできない。食べなければ生きていけない、生きていくためには食べなければならない私。食べるから生きている私は、生きるから食べている。ずっと。今までも、これからだって、ずっと。

(文学部文学科三年)

選考を終えて

東光原文学賞 総評

選考委員長 濱田 明

東光原文学賞は今年度で第十七回を迎えました。応募作品の総数は昨年から五作品増え二十作品となり、この中から一次審査を経た九作品について、一昨年度から三回目となる熊本日日新聞社の農孝生先生、そして今年度から新たに加わった本学の日高愛子先生、そして昨年度に引き続き私の三名が審査員として選考を行いました。

文学作品を研究する場合、作品を特定の作者を前提として分析するのではなく、テキスト、引用の織物として解釈しようとするテキスト論と呼ばれる文学研究の方法があります。私たち審査委員は、応募作品の作者のペンネームも知ることなく応募作品を読みます。色々な形、色に染められた織物を最初に見る者として、応募作品のテーマ、物語の展開、作風の多様性、豊かさを味わわせていただきました。

それでは、審査員全員で選出した受賞作品を紹介いたします。

学長賞を受賞した『画家ホールウォードは生きている』は、画家ホールウォードの世界と大学生の三木の日常生活の二つの世界が展開する作品です。ホールウォードが主人公三木が夢で見る

画家であることは冒頭で明かされていますが、彼のアトリエの情景描写や友人ラッセルやパトロンであるサマセット夫人宅での食事会での会話など、ホールウッドの生きる世界が巧みに描かれています。大学生の三木の生活は平凡でしたが、夢の中で見るホールウッドに不幸が訪れることにより彼女の心は揺れ動きます。

審査員全員から構成的力、表現力、小説の作品の全体的な完成度が高く評価されました。最終選考に残った作品のなかでもフィクションとして意欲的な作品であり学長賞にふさわしいとの評価が一致し、学長賞に選出となりました。

学長賞に続く附属図書館長賞には『一枚目のキャンパスの魔法』『くたばれ、マイヒーロー』『食べる』の三作が選ばれました。

『一枚目のキャンパスの魔法』の主人公は耳が不自由なために同級生と離れて過ごすことが多い中学生の「僕」が三年生を迎えた春に中国人の転校生リン・ユシンと出会います。タイトルにあるように、キャンパスに向かう「僕」が描いた線にリンが色を塗るといふ魔法によって素晴らしい絵が生まれ、その絵の魅力に引き寄せられるように孤独だった「僕」のまわりに友達が集まるようになります。心温まるストーリーであるだけでなく、中学生の男子のこまやかな感情が平易かつ的確な言葉で綴られています。審査員から爽やかな読後感とともに多くの人に愛される作品と高く評価され受賞となりました。

一方、『くたばれ、マイヒーロー』は高校生の一真が、同級生の廉の電車内の姿をSNSにアップした投稿が波紋を呼ぶ物語です。三人称小説ですが、廉を「マイヒーロー」とする一真の憧れ

や嫉妬などの心情が細かに述べられています。タイトルの「くたばれ」にあるように、一真の嫉妬が廉を貶める投稿を生みますが、投稿は一真の予想を超えた展開を見せます。SNSのもたらず社会の暗い面を描いた作品ですが、一真が打ち込み廉が代役として参加する演劇のシーンも読みごたえもあり、構成や展開の面白さ審査員に高く評価され受賞作に選出されました。

附属図書館長賞の三作目『食べる』は、中学生と高校生の友人との関係を描いた『一枚目のキャンパスの魔法』『くたばれ、マイヒーロー』とは異なり、タイトルどおり主人公の女子大生砂奈の食べることへの執着が中心の物語です。冒頭の一文、「味噌を溶かす」から味噌汁の作り方を細かく述べ、「私は食べるのが好きだ」と結ばれた冒頭のシーンから作品の最後まで食について丁寧な言葉が連ねられています。砂奈は買ひ物の帰り汐見に重い白菜を持ってもらいそのお礼に料理を作り彼と付き合うことになりましたが、彼女の食への過剰な思いが別れとつながります。友人との関係を中心とする応募作品が多い中で、主人公の食への欲求から発せられる言葉に満ちた『食べる』は、異色の作品として審査員全員によって高く評価され受賞作となりました。

以上の受賞作品の投稿者の皆さんには、素晴らしい作品を寄せて頂いたことに対して、感謝とお礼を申し上げます。

また今回は残念ながら受賞に至りませんでしたが、一次審査を通過した作品名も紹介しておきます。

弓道家であった祖父から学んだ弓道から離れ、陸上競技に打ち込む高校生を主人公とする『唯だひとすじの矢のように』、戦時下を舞台に「金糸雀」と呼ばれる戦闘服縫製要員の女学生たち

の間の憧れや憎しみを独特の語りで描く『花綻のしつけ』や、就職活動をしている女子大生が部屋の前にいたセミの幼虫と交流する『蛻』、これらの作品に対して審査員からそれぞれの作品の魅力を評価するコメントがありました。他にも、『凡人の失樂園』『エーデルワイスは風を呼ぶ』が一次選考を通過しました。今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員に感謝いたします。

文学作品をテキスト、引用の織物として読むことを最初に申し上げました。学長賞一作品と附属図書館長賞三作品は『第十七回熊本大学東光原文学賞作品集』として刊行されます。ひとりでも多くの人が、この作品集を手にとり、同じキャンパスで学生生活を送っている同世代の人たちの作品を読んでいただければと思います。個々の作品の色合い、光沢は、肌触りは違っても、同じ世代の読者がそれぞれの思いで味わっていただけるはずです。

今回受賞された皆さん、そして今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員にあらためてお礼申し上げます。そして最後となりましたが、この度の東光原文学賞の企画運営にご尽力いただきました宮崎誓附属図書館長をはじめ附属図書館の皆様方、お忙しい中、選考委員をおつとめいただいた農孝生先生、日高愛子先生、そして東光原文学賞の実施にご支援をいただいた本学の小川久雄学長、宇佐川毅理事・副学長ほか、ご関係の皆様方に深く御礼を申し上げます。

● 濱田 明（はまだ・あきら）

熊本大学大学院人文社会科学科学研究部（文学系）教授。専門は十六世紀フランス文学。主な近著として『アイラウ漱石先生 漱石探求ガイドブック』（集広舎、二〇二二年、共著）、「十六世紀プロテスタント詩人にとっての生と死」（荻野藏平／トビアス・バウアー編『生と死をめぐるディスクール』九州大学出版会、二〇二〇年）、「ドーニエの『書簡集』」（北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文編集委員会編『コレスポンダンス』朝日出版社、二〇二〇年）などがある。

講評…日常と非日常のはざままで

選考委員 日高 愛子

このたび初めて東光原文学賞の選考に関わりました。第十七回目となる今年度は二十篇の応募があり、応募総数は昨年度よりも五篇増えました。「読書離れ」や「活字離れ」が指摘される昨今において、文系・理系を問わず多くの学生の皆さんがことばを紡ぎ文章を編むことに意欲的であることは、文学研究に携わる者としてたいへん喜ばしく、心強く思います。

芸術は非日常であるといわれますが、文学は単に非日常を描くだけではなく、日常に普遍的要素をいかに描き出すかも重要であるように思います。例えば、昨年に大河ドラマで取り上げられて話題となった『源氏物語』は、「いづれの御時にか…」という語りから壮大かつ重層的な物語空間が展開されますが、そこには日常のなかで経験するさまざまな感情や世の諸相といった普遍性が内包されており、ゆえに時代を越えて現代に生きる私たちの心の琴線にも触れるのでしょう。文学の醍醐味は、非日常と日常を往来しながら、さまざまな世界を追体験し、人情の機微を知ることにあるといえます。

今年度は応募作品二十篇のうち九篇が二次選考に残りましたが、それらの作品にはこれまでの

学生生活のなかで得た経験や見聞から着想したとおぼしき題材が多く見られました。日常生活において誰しもがどこかで経験するであろう躓きや傷を抱え、迷いや痛みを覚えながらも新たな一步を踏み出していく——そのような若者の直向きな姿が瑞々しい筆致で描かれており、選考委員として作品を拝読しながら、皆さんの日常に触れ、対話をしているような心持になりました。

学長賞となった『画家ホールウォードは生きている』は、夢と現実世界を交互に描き出すパラルな物語構成とその表現力が評価されました。物語は、大学生の三木が見る夢から始まります。パトロンであったサマセット夫人からの支援を断たれ、唯一の友であるラッセルとも離れて孤独に生きる画家ホールウォードの夢の世界の重厚さに比して、ありきたりな日常を送る三木の現実世界のアンバランスも、非日常とのコントラストとして効果的に感じました。〈友情〉も本作の重要なテーマとなっています。ホールウォードは友と引き離されることになりましたが、三木の隣にはいつも親友である岸の存在があり、彼女によってホールウォードとも繋がりを得ます。三木とホールウォードが互いの存在を認識し共鳴し合う終盤の、一枚の絵葉書に描かれた漆黒の空と海、夜明けとともに白みゆく意識の描写が美しく秀逸でした。

附属図書館賞には、『一枚目のキャンパスの魔法』『くたばれ、マイヒーロー』『食べる』の三作品が選ばれました。『一枚目のキャンパスの魔法』は、聴覚障害のある「僕」と中国からの転校生リン・ユシンとの心の交流を描いた作品です。本作では、聴覚や言語に拠らない視覚的コミュニケーションがテーマとなっています。絵本を読む営為には、古い記憶を呼び起こしたり、心を浄化したりする作用があるといわれますが、本作においても、「僕」が自己を見つめて他者や社

会と新たな関わりを築く契機として絵本が機能しています。「僕」の絵にユシンが色彩を加えていったように、「僕」の日常も彼女との交流によって彩られていきます。作品全体が絵本のような温かみに包まれており、読後感も心地よい佳作でした。

『くたばれ、マイヒーロー』は、近年話題となっているSNSをめぐる問題を取り上げた作品でした。他国で十六歳未満の子どものSNS利用を禁止する法案が可決されたというニュースも記憶に新しく、学生の皆さんにとって関心の高いテーマでしょう。本作では、主人公の些細な出来心からSNSに投稿した一枚の写真が、ヒーロー的存在であった同級生の人生を狂わせる引き金となります。友人の死に隠された悲しい真実と主人公の贖罪を描く本作には救済がなく、読後もメランコリックな感情に支配されますが、作者は現代社会への警鐘として敢えてこのような結末を選択したのであると推察します。

一方、『食べる』は、私たちが生きるうえで欠くことのできぬ「食べる」という日常的な行為をテーマとし、日々の食卓風景を淡々と静かに描く点で異彩を放つ作品でした。何よりも「食べる」というタイトルの潔さと、食物や料理の一つ一つが丁寧に描写されることに好感を持ちました。「食べる」ことを至福とする「私」は、「食べる」ことが好きではないという汐見くんの存在が気になり、二人は「食べる」ことを通してコミュニケーションをとっていきます。しかし、「私」の汐見くんに対する感情は、「食べる」と同じく自己を満たすための欲求にはかならず、「食べる」ことに執着しない汐見くんとの関係はあっけなく破綻してしまいます。「食べる」という人間の欲求と執心を結び付ける発想がユニークでした。

このほかにも、惜しくも受賞には至りませんでした。が、戦時下を舞台に「金糸雀」と称する戦闘服縫製要員の女学生たちの憧憬や憎悪を描く『花綻のしつけ』や、弓道家の祖父を持つ少年の葛藤と克服を陸上競技とともに爽やかに活写する『唯だひとすじの矢のように』など、次作が期待されるものが多くありました。次回はどのような作品と出逢えるか、心待ちにしています。

● 日高愛子（ひだか・あいこ）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門は日本古典文学。

主な近著として『飛鳥井家歌学の形成と展開』（勉誠出版、二〇二二年）、『和学知辺草 翻刻・注釈・現代語訳』（文学通信、二〇二三年、共編）、論文に「細川就と有栖川宮家―織仁親王への入門をめぐる―」（『国語国文学研究』五四号、二〇二三年三月）などがある。

講評..小説の器

選考委員 農 孝生

小説の書き手とは「器」のようなものだ。書き手が小説を書くのではなく、小説の方が器を選んで物語を書かせるのです。

作家の吉村萬壺さんがかつてそんなことをインタビューで語っていた。「例えば石牟礼道子さんや島尾ミホさんなんて大きな器やと思いますね」。それに比べ、自分は小さな器だというのだ。人間の器と言えば、大きいにこしたことはないようにも聞こえるが、作家の場合はそうとも言えないところが面白い。器の大小で小説の善しあしが決まるわけではない。形も大きさもさまざま、両手で抱えるような大鉢から、小さなおちょこまで、それぞれから魅力ある作品が生み出されてくるのに違いない。

東光原文学賞の選考に携わって三年目となった。今年もさまざまな器の存在を感じさせてもらった。応募作は、テーマ、構成、ストーリー展開、表現も多様で、バリエーションに富んでいた。学長賞に選ばれた『画家ホールウォードは生きている』。主人公の夢の世界と現実の世界が代わり番こに進行し、後半のある局面で、夢の中の画家ホールウォードと主人公が交錯する。夢を

手掛かりに、主人公の心の底に澱のようにたまっていた鬱屈を浮かび上がらせるという構成で、夢と現実の両方の世界の登場人物がよく描けていた。全体的に表現が巧みで、情景描写がうまく、部分的に使った画家の独白スタイルも効果を上げた。主人公の抱えている主題の設定にやや物足りなさを感じないわけではなかったが、受賞作の中でもっとも完成度が高かったのではないか。

附属図書館長賞のうち『一枚目のキャンパスの魔法』は、耳の不自由な中学生の「僕」が主人公。学校内で級友とあまり関わらず孤独に過ごしてきたが、中国から転校してきた女子生徒と親しくなり、彼女と一緒に描いた一枚の絵をきっかけに、人間関係が広がっていく。二人の心のふれ合いと、やがて訪れる別離にほろりとさせられる。ファンタジーを思わせる結末も温かく、ホッとさせられた。佐野洋子さんの絵本『一〇〇万回生きたねこ』をモチーフに使っていて、多くの読み手に好感されそうな、安心して読める作品に仕上がった。

『くたばれ、マイヒーロー』は高校生の人間関係を描き、思い込みや、情報を拡散させる交流サイト（SNS）の怖さといった今日的なテーマを浮かび上がらせた。主人公の生徒には、中学時代からの同級生で「ヒーロー」のように思ってきた人気者の親友がいる。ある時、その親友の思わぬ行動を電車内で目撃し、密かに撮影した画像をSNSにアップする。親友への「嫉妬」から生まれた行為だったが、その投稿が後に重大な事態をもたらす。登場人物のうちの男子二人が交際していたことが途中で明かされるなど、構成がうまくできており、人物の性格もよく書き分けられていた。人間の暗い部分を扱い、読みごたえがあった。

料理の過程や食材が細かく描写された『食べる』からは、食という営みへの愛情や執着が伝わっ

た。主人公の女子大生は料理をすること、食することが大好き。一方、彼女と知り合った男子学生にとって、食事は呪わしいことでしかない。母親から無理やり食べさせられていた過去があるからだ。食の細い彼と付き合いはじめた彼女は、二人で同じものを食べることに喜びを感じるが、互いの思いはすれ違っていき、やがて関係は破綻する。大好きな食べることが「喪失」をもたらした、にもかかわらず、彼女はなお食べざるを得ない。白菜を生そのままむさぼりかみ砕くラストシーンは印象的で、人間の食べることの業を描いて、余韻を残した。

● 農孝生（のう・こうせい）

熊本日日新聞論説副委員長。社説、コラム「新生面」「黙鼓子」などを担当。

新聞連載記事に「公共事業と山村」（一九九七年）、「再考 水俣病の医学」（二〇〇一年）、「否—ある水俣病闘争」（二〇〇四年）、「命ある場所」（二〇〇二〜〇四年）など。

第十七回熊本大学東光原文学賞作品集

発行日 二〇二五年三月三十一日

編集・発行 熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

